徳本行者傳　上

ソ七十四

ソ印
七十四
三巻

徳本行者傳序

龍舒居士嘗引大慈菩薩之
語曰能勸二人修比自己精
進勸至十餘人福德已無量
如勸百與千名為真菩薩又

能過萬數即是阿彌陀文政
戊寅十月行者即也先師故
大僧正親臨葬儀乃擧此偈
衆皆竦然謂曰聖克知聖窮
謂庶乎不差矣頃行狀傳刊

行為序證其所言非過稱矣

慶應丙寅臘八隱士閘譽

菩薩優婆塞從五位下守伊勢守藤原朝臣政晃書

徳本行者傳例言　九條

一師文政戊寅ノ年ヲモテ遷化ス今年慶應丁卯ニ至テ既ニ五十年ヲ得タリ遺弟等法恩ヲ萬一ニ報センカ為ニ相會シテ傳記ヲ纂集ス方ニ師徳ヲ千歳ニ傳テモテ後進ノ警策ニ備ヘントト欲ス

一小石川一行院ニ師ノ一世ノ紀録六十餘巻アリスヘテ當時ニアツテ門人ノ筆紀スル所ナリ其事朴質其辭華ヲ飾ラス尤モ正史ト称スルニ足レリ但シ均シク佛事ト雖トモ師ニ在テハ勝迹ト称スルニ足ラサルモノアリ又其事勝レタレ

トモ同シサマノ事數件アリ又事奇怪ニ亙リテ常人ノ疑ヲ生スヘキモノアリカクノ如キモノハ大凡コレヲ省ク竊ニ惟レハ師ノ一世ノ行履上中下ノ三等アリ今ノ傳ハ其上ト下トヲ省イテ且ラク中等ニ就テコレヲ紀録ス人ノ不信ト輕謗ヲ防カンカ為ナリ古ニ曰ク史ヲ修スルコト難シト果シテシカリ

一本傳修成ノ前後ニ在テ詳ナル事實トモ尚多ク聞ヘタレトモ草案ヲ改メンノ煩ハシキニ憚リテ暫クコレヲ省ク他日拾遺ノ編集アラン時ヲ待テ當ニコレヲ加フヘシ

一行院ノ前住本覺嘗テ其師本佛ノ命ヲ荷負シテ本傳ノ編

集ヲ企タツ畫圖モイサヽカ寫シ出セリ勞ナキニ非ス不幸ニシテ未タ一巻ニ及ハスシテ沒故スヲシムヘシ今年コレニ継テ三巻トナシ以テ其功ヲ畢フ幸ニ先哲ノ志ヲ舒フトイフヘキ歟

一　一行院ノ現住本良篤行ノ仁ナリ傳紀ノ修成ニ於ケル頗ル力ヲ竭スカ加フルニ紀州ノ本乘タマタマ來リテ事實及ヒ地理ヲ說ク階ニ製作ヲ扶クルモノナリ且ツ用途ノ容易ナラザルモヤコトナキ道俗ノ多ク力ヲ加ヘ玉ヒタルカ有リテスミヤカニ功ヲ就セリスヘテ餘光ノカヽヤク處ニシテ遺弟等ノ歡抃キワマリナキユヱンナリ

一況齋楓崖苓磨ノ諸老人ハ皆幕府ノ士ナリ射弓馬ノ際ニアリト雖トモ善ク力ヲ學佛ニ竭クス樂天東坡以テ相比スヘシ特ニ本傳ノ挍閲ヲ請ヒ浄書ヲ託スルモノハ是レカタメナリ

一畫圖ハ門弟沙門蕉巖ヲシテコンヲ寫サシム其拙ヲトカメサルハ遺孫ノ末ニ系スルヲモテナリ二三ノ他筆アリミナ一時ノ有名ニシテ嘗テ師ノ德望ヲ仰ク人ナリ加テ以テ結縁ニ擬ス

一本傳ノ體製欽テ　勅修御傳ニ倣ハントス而シテ遽カニ似ルヿアタハサルヲ恥ツ且ツ筆ヲ起スノ始メヨリ瑜伽起信

講習ノ際ニ系スモトヨリカヲ一途ニ専ラニスルヿアタハサルノミニ非ス語澁フリ筆躓ヒテ事前後ヲ謬リ文脈胳ヲ失スルモノアリ是レ校閲ヲ待タスシテ急テ上木調巻スルヲモテナリ追日帰正ノ本ヲモテコレヲ正スヘシ

一予幼時シハシハ法會ニ咫尺スルコトヲエタリ威貌堂々士庶敬服ス音聲枯渇スレトモ響林谷ニ徹ス婆心丁重ニシテ聽ク人感泣スルニ至ル今ニシテコレヲオモフニ決シテ直也ノ人ニ非ス顧視スレハ已ニ半百年恍トシテ夢境ニ屬スコノコロ傳文ヲ紀スルニ及テ再ヒ會座ヲ瞻ルカ如シヒソカニ按スルニ聖賢ノ世ニ處スル經權岐ヲワカチ常變跡ヲ

殊ニス高僧傳ニ科目ヲ別立スルユエンナリ師ノ如キハマサニコレヲ感進篇ニ收メンモノ或ハチカヽルヘシ盖シ如是ノ因アッテ如是ノ果ヲ感ス内ニ充チテ外ニ溢ルヽモノト謂ツヘシ是特ニ其人ニ在テ存ス斷然トシテ他人ノ企望スルコトアタハサル所ナリ今ノ世一椀ノ暖飯一領ノ温袍ヲ得マク欲シテミタリニ奇ヲ衒ヒ妙ヲ賣リ以テ其術ヲ神ニセンコトヲ覓フ輩アリ果シテ西施ノ顰ヲ倣フモノカ只似サルノミニ非スマスマス亦其醜ヲ加フ昔シハ佛世尊弟子ノタメニ神通ヲ現スルコトヲ呵シマタ異ヲ顯シ衆ヲ惑ハスコトヲ誡メ玉ヘリ本傳ヲ讀マンモノスヘカラク先

ツコレヲ知ルヘシ

慶應丁卯三月

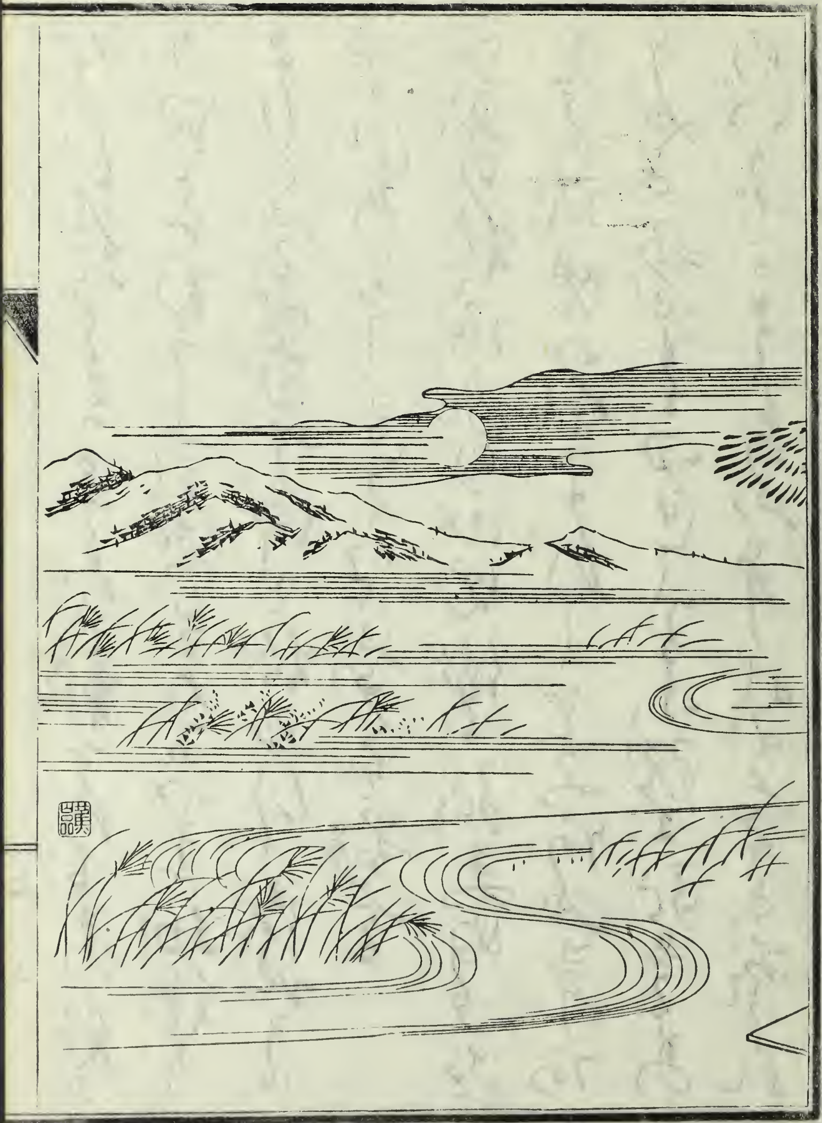
遺弟无量山清淨心院沙門行誡敬識

徳本行者傳

師諱ハ徳本。名蓮社號誉称阿弥陀佛と申す。紀州日高郡。志賀の庄久志村田伏氏の家に産る。其先桓武天皇より出て。畠山尾張守政長の裔なり。曽祖は文明の頃。政長管領の職をつとめられし時。明應二年の夜。河内國正覚寺の城まて。終に戦死せり。二男子有りて是を當

順といひ。弟を久俊といふ。久俊紀州にのがれ来て。山林に竄居し。苗名を隠して田伏といふ。久俊より七代の孫を二太夫といふ。すめハ於ち。跡の先考なり。先妣ハ塩崎氏の女なり。男子なき事を歎て。窃に祈り夫婦三宝に祈請す。先妣或夜蓮華をのむと夢みつる事ありて。宝暦八年戊寅の六月廿二日。年の山中に誕生せり。時に庚

享保の頃て蓮台の初て一年好事
らしくて仙人の人なり。奇異の代に恥しきことなり。
第ると云ふ所。丸子に長堂あり。僧坊
うちやちる時香炉の墨のぬし
宝暦九年の秋八月十五日の夕。姉に何れな
ごく所の底の玲瓏たるを見て初て
南無阿弥陀仏とぞ称へける。いまぞ形
はう有りて。何のまことなるべき。誰



なりはひ給へるまゝのとて。丹彩をほどこせるものの始なり
りけるとぞ。むかし聖徳皇太子。いまだ幼稚なり
ましける時。南無仏と称へましゝ御掌あける。
御ゆびありそへて。いと掌にぞ覚える
四葉の林。小舎利の堂。御にぞ兄めのすゝを
つかく。蓮池いづこまでしぞ。又何事何
りやう。妙華をつとめし。すゞにゆるものゝ
の。いふぞうまであるまへあるべきと。ゑれ

いろをさく作（さく）く。恣（し）にして驕（おごり）るさまなりけれ。是（これ）常（つね）
々（づね）睦（むつま）じかりしに。遊（うそび）嬉（あめ）べくる好しとも。何（なに）を
恐（こゐ）しくのまゝなんとく海（あき）浪（さけび）にかつ安堂（さと）嗚
てはしく。おまそ恐（し）といふつハ。半（き）線（せん）男（ちん）女（まよ）。賢（けん）
愚（ぐ）老（らう）少（せう）。誰（たれ）もおのがまゝのなし。且（うつ）恐（り）
たるの海（ろう）陸（りく）べき理（つうわり）あらんや。ぬ（きんぢ）みのまゝ
を戮（あぞ）べ。もや。除（こ）障（じ）御（おう）をとみのこ年りて念（ねん）仏（ぶつ）
とおへまうしとぞ。怖（おそれ）れたる。戦（とうりのこ）兇（ちよ）のお別（つれ）い

ことしのはる。懇なる母堂ゆゑ人へ肺腑に
しみ給ひハ、朝夕形くゐるの学の頼のきき
るゝ詞そゝる心つきて。元結ハ誠勧るを
伺ひけるに。常に念仏をぞ唱られしつる所
老年に及びしのちまで。もとのことの菜の時。
其より女房におもてつしも常ハしも我やすまじや
らばと。さりくハ申まで
此幼稚の時とかへつてなり。其風度。龍に人情

の営業にて卓出して。並て竹馬風車の
戯を好まバ。のうそめの翫にも。仏像をも
たの癖ありて。浮を項につけてたる仏の
傀儡にて擬し。指を屈てハ印契をまなび。
玩児を使令するまゝ。牀下に席を列りて。
是ハ仏也など申遊ぶ。されバこの児ハその
まゝ宿善ある人なりけん。前賢古徳の跡を追る
仏とそなるもの武運勤をもげるハなかりけり

黙堂の争事を聞しより後ハ世の無常を
おもひ〆。後世菩提を願ふこゝろなり。然爾
これ何ゆゑぞ。本来の面目を出離をもとめ
もとめし。父母にも乞申せしかれども。嫡子のなきゆゑ
つゐに性質にたがはざれバいまや。堪て許
さるべき知識もなし。もとより至孝の志ふかの
かなへバ。其後ハ何事のぞミも勧にまかすれ
なりてり。時のいたるを待ちゐけるなるべし

十歳をこゆるころより。念珠を袖にいれて。
勤課の念佛を修せられけり。いまだいとけ
なき児にして。つねにするものゝ形など。
惣領なるもの何迄バ。あなたふと。人のまね
上臈の聞るをもしずやとて。やがて其座を
たゝれけり
このちごハ。多婆此木をたちての檀山を
十形りあし虫生ずる時ハ。の房をはなずこして

撚りたる縄に。一筋たばこの畑にむすびて
しく虫まじはりたり。何ひとすぢに念仏
唱へつゝ。畑の畔をめぐりけるに。虫ども皆
しりぞき跡なく也ぬる。念仏の功徳にて。
虫の害を転じしならんとぞ申伝る
人と称へに随ひて。其志操堅固にし
て。念仏の修行ますます勉励せる。
十六歳の冬。四月二十二日。三髪を抽く。

晨昏二時の勤行式を定らる。各専受回
昼夜を一時も勵精念佛せられき。暁の
つとめ罷ては。東方なほ明ざれば。自ら草鞋を
結て。巡礼堂舎などに施与られけり。さて
は。昼のいと暇には。経のつとめ。いとはずぞら
きたまり。時として睡魔の妨やあらん
とて。臥ころりずらし平臥を禁じ給ひ
けり。結縁者の往もおほひありけれて。

いと殊勝なる事にて形容し
山村の習ひ。雨晴を祝し神を祭るに
なぞらへハ古老長男女。寄集ひ。酒宴團
甚だする事なるべし。河ハ猶後の山乃
洞の中より出て。本弱を仰。空佛礼拝
されし事
河の源を距る事。東の方五里許にて。
大淵河の月山なといへる幽邃の寺あり。

住持の僧を大良といへり。専修念仏の行
者なり。阿弥陀経をよみて。別時念
仏をすること。年に両度。或ハ七日なり。住持
は阿弥陀経をよみて勤行し。同じく勇進し
て勤修せり。阿弥陀をたてゝハ。毎朝の行
らば諸俗も垢離とられり。ここにまたか
こみぬく垢離をとれし道ハ。垢離なりて。今
なるれのことに存ぜざり

一とせ雪(ゆき)いたく降(ふり)るは。袁安(ゑんあん)のいつのた寒(さむ)くおぼ
さんとて。いろりに薪(たきゞ)さしくべて。火(ひ)焼(たき)み寝(ね)ゐ
ゐたり。老(らう)鬚(ひげ)いとしろき洛陽(らくやう)門の戸(と)さしのぞ
きけり。開国行者(くわいこくぎやうじや)よやとおもひてぞ。くるはいと寒(さむ)
うなる。繁(しげ)こそのまゝふりつもりまさきといはれなれど。
この洛陽(らくやう)。つとへ大まそとばりつんで。扨(さて)いふ
ちゆるは。袁の桐好(さうずう)旅人(たびびと)なりず。深ば。其の為
人のねむりしき知識(ちしき)とこそは寵(ちやう)なりめ。

これ繭をすゝりて。よく延てまとひつけて。又一
枚より出る。厚きをうけ戴て。延べたる
しかた。この花紙ハつゞりたんに及ぶ也といふ。
纈積なる雪の紙。何ぞ傳べきよし。又なくてや
こゝぬ。これなん傳の一枚起請文なりける。隣こ
達をはなれて唐八。清浄極楽の明證にけるを
過ぬをて。かくて襟すそのをかれける。南隆公の
父母帖とてまた。常に護持せられける。御生

唯の法語。ゑの文の始をよみざりしもの。のるい
は経何也ばなるべし
此等親族を藝識しての事へ。学者は勝事
略の心得なりて。家業を勵べし。さすれば
己十日ハ平日よりも安みあるべし。つ事の其日すら平
生用をさずしてハ。時日能く狼狽する事
あるべし。況臨終の其日に於てをや。常に斯
も用意して。法事の消息を猶豫すべし。よく申

されば昔は
或時○烏族の他を誹謗するを聞て其の言ハく。案じ
安ぞ纔なるわざをしらずして求むや。人ハそ
過ば人まことに過をそしる。響の声を恨て顔を思ずるの
如し。人を謗る事ハ大なる罪也と寂しく戒め給へり
徳を積ことハ人目をしのぶこそ誠の徳とハいへ
なれ。是を隠徳といふ。人の為になる事なれバ。
人しらずとも行ふべし。しからバ草木の種を

蒔ば。人間またゝずとなる。まよひずますれバ生いづる
ものも。善根をつみてのちのめでたしとぞ申されける
人まことらさくハ。頭のよき知識と越なべし。
めぐる力の行き事ハ。くりうつりハ一遍ぬまめ
なり。前身のあしきたね事ハ。悪やすいぞ滅ばさへそ
善人となる根とぞ申されけるやまづ一類眷族
なども縁者の家居すなはち清浄の中心なる事
なども一門と勿のへバ。忽心を繋しめて。

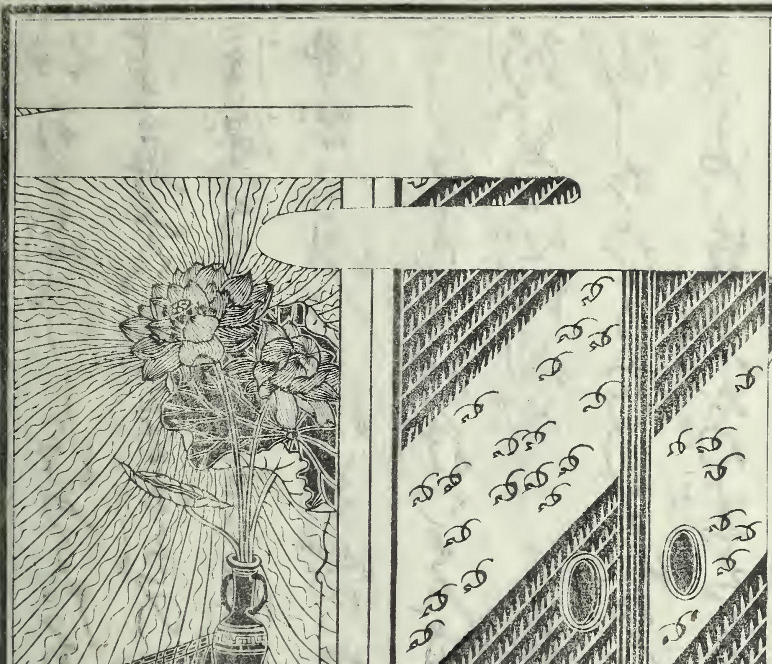
何とて宅なしぬ事とぞんぜりに調じ出しつるぞ。
かなるあやまちにゝ。みつの一言すら怒るのや
とぞ呵をし述ける
此形王子の長のしゝ。孫の文病腦の事にて
なり。孫。康に醫薬を失ひて覽らるゝその往還
すべく山路を経て十里餘五十丁なるを。歸り
薮を出て。夕まいの者いまず帰れり。病をげし
きこえは。薬をもとむる事。一月に十餘度なり

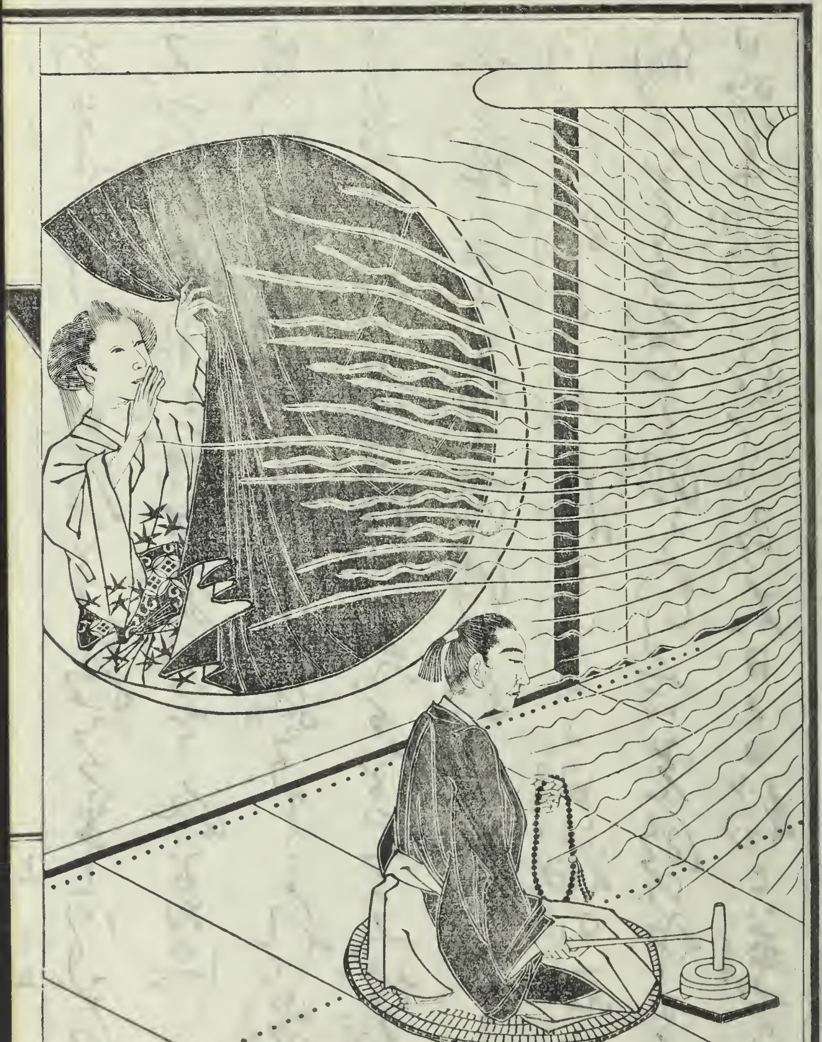
隠遁の後絶て人に託し給へるハなかりきとぞ。
その臨終おもむきハしるさゞりし。さて此の父ハその家の
の三月二十五日に正念に命終せられ。よはひ
六十七とぞ
此野に出て農事をつとむる時ハ。鋤をすて
念珠に代。山に登りて薪をこるにハ。念仏を
もて樵歌となし。耕て人のつくりをもまぜの
らず。或時ハ草根木実を食料に充て

るげ行り。そは苦行(くぎやう)の嬉雲(うんよ)を識(こころ)んがる地とぞ。
月毎(つきごと)に小比村の大日堂。畦(うね)畳(おき)の跡をさぐり
詣(まうで)て。すゝや出俗(しゆつぞく)の類(ぐわん)を果(はて)んとを稀(いのう)(?)
正府三峯の里。付熊村(たむら)往来(わうじやう)の征指(おほち)(?)。大(だい)圓(えん)
の德(ざいとく)に依(つい)て。五戒(ごかい)をうけんとこれある
団三峯寺のころ。会海(?)菩(あめ)のごとく指佛堂(ぢぶつだう)の
庇(ひ)かのづぞ一年すく。本尊阿弥陀佛の法(おん)長(うけ)
一丈そくのうま現(げん)じ。阿の評(?)まあをやくを(?)

摩頂し給へり。母堂を傍に祈りて。おぼろなる
このみをさへうしなひきとぞ
同じ涙。御弟子の夢中に蓮華一茎おひい
づるとみる。十四日を経て。又相並ぶ小蓮華
一朶を生ず。師と母堂ののち法流をとんで心
ざる。余人つまびらかなりき。師いよいよ策励完
御し給ひたりし。蓮華すでに生長し。果して
むかのりを経て。或夜更闌人しづまりて。師

仏前に念仏し終りて。たちまち額中の
運慶十八にて筆記。金色の光明燦爛として。
障壁を照し。其堂の震動を照す。其堂驚きて
佛間を伺ふに。紫光明の中に端座念仏
ぎしくして内まで珠數いさん方なりけるとぞ
阿穴日。心地洞然として。有る大桶の底の打
抜しめくなりたり。これなん一心の透脱などいふ
べきにや。然ハ。宗安や悉大光明ありて。其中ま





あまの御まし〻はとこしなへなる事なり。これ
又ひとつの念仏三昧を発得せられたるゆゑ
成就。菩薩。大河を渡り。山をのぼりてみれば。峯
また庭も。行方円満をなへるを見る。又地蔵
菩薩のつぎうりなる円満なりとぞみえける。
ゆるし。慈悲まとうかれける事な。日輪の西に
頂くをさる。眼をひらけば。光明の中に大
日如来現じ給へり。これ大日と日輪と八事なり

不二の中に在る法智なりとぞ。毘盧舎那を。光明遍照と譯する儀軌に按じて。いひたまふときは法身外なし。又或夜の夢に。安慶長と云人その石地藏菩薩。變じて六丈許の金色の阿弥陀と現じて告てのたまはく。吾本地は阿弥陀なり。南無の南字に四十八願こもれりとのたまへりとぞ。抑天台大師は阿弥陀の三字に空假中の三諦を配當せられたり。よりて思へば。南に

四十八願と告(つげ)させ給ひしも由(ゆゑ)ある事なるべし。又法蔵比丘の本地(ほんぢ)阿弥陀とあらはれ給へるなり。此菩薩は。諸仏(しよぶつ)の因業(いんごふ)を綴(つゞ)り給へるなり。法蔵(はふざう)菩薩因果(いんくわ)の姿(すがた)ぞ。古人のいへりしは。のうることわりを思(おも)へる形なるべし

天眼四事の業。無量に対(たい)して。出家の望(のぞみ)を申むしまたる。無業をうけて師(し)の振舞(ふるまひ)。尋(たづ)ねぬのみならず形への好相(かうさう)などさへをうつされる

なほ今ハしひて塵俗の中ニ留めん事ハ冥慮も
おそれありとて。始て所望をとげられ
き。師ハ日頃神明仏陀ニ祈請されしハ。唯
この一事なりしを。漸にして母堂の許され
しるしとの。縁しくうれしくてあはれなりつるが
ハ。袈裟を被着して。形を還浄に同じ。仏
地を希求して。心運号のめされんとぞ。持遍
けり。翠月二十七日。賊郡村法寺なる大円上人

に然て六具の式をうけられけり。さらば氣
厳行す。菩薩發願して。生々世々。この恩わすれず。釈
いの恩をうけんと誓ひ給ひ。善導大師ハ弥陀の化身
絶離囂塵。從德當由可亂聲との語しるすこの外
ひとへに阿のとしごろ出塵をこひ願ひ給へる。
定て宿世の本願なるべくとや
天明四年の春。大隈川月見るの任務。大良
まつ高くまれ。三十の日夜を期して經行念

佛のおん業をつとめらる。其の奥に小丘あり。
丸山といふ。縦横二丁許ばかりで細流あり。是
おのづから茶道場なるとて。昼ハ終日。木履すて
常行を修し。夜ハ堂内にて称名せらる。
せらる。麨一合を以て。一日の食料にあて
過き。第四日を経て。大衆和尚ハ堪ずして退
出せり。師ハ聊も悔る事なく。三年を満ぜ
らる。羸相あらはる形しかど。随念すに復く

盛なり。其頃人より訪はれたる事ハ。何事も一道を貫通せんとおもはんものハ。辛勤苦行を経て。練磨を重ざれバ。其妙に至り難きものなれバ。[illegible]又おもへども漸々にして。おのづから平易の場にいたるものなりとぞ申されたる

同年九月。大河浦の円光大師へ。参籠の事ありしより。塵境を屏絶して。跡を林丘に

隠し。苦行。功徳。利益を四方に及ぼさん
とぞ祈求をこめける。後日。手律川。酒ヶ谷など
の苦修練行は。こゝに発心をこれりとぞ。安根
此夢に。十一面観世音菩薩。告てのたまはく。汝
解脱所とするべし。諸事はすて。修行をば。利物
夢のさめんと覚めてのち。里人はさる菩薩の霊跡
やあらふと土ゐしるしての跡に。しらず里人は
紫内をあはせく。そこらを探り。探り求めける。落合と

いふはいつるぞ申されけるハ。善光寺をうつし奉りしハ。ま
ぢかく法地なり。いかにも知らずして。念仏修行をば
やめの給ひけるぞ。聖人諒て茅屋をつくり菴をきり。
膝をいれてつくられ草庵一宇をむすびたまふ。
その地ハ白山権現の社あり。跡にてまつれて給
ハ。神ハ口をひらきて法楽をさゝげ。御讃をなん乞ひ
申されける。後白生人この社の本地仏とて。とう
だしうを捧げ給ふに。夢中まつり奉りし。十一面の

讒作に羅られてかうぶりける。其後また續ゐ
ことぶより沙汰さんとせしに菩薩のしるし
見して。指揮を蒙りしもの。雲氣をさして逃
れり

落合節子撰れしハ。元禄六年二月十七日なり。その
夜農夫林助といへるものゝ妻。源三郎といへるもの
の母。ひとしく蒙りて紫雲の中にあまたの菩
薩。光明赫奕として。手に瓔珞をとり給へるが

西方より来り。この草庵に入給ふとみる。覚て後
このゆめは疑ひあらじ。必ず違はざる事也ば。いよ〳〵
阿弥陀仏のめぐみぞ尊とおもひける
その律師の草庵に移り住給ふ。縁の下に麻の
七条の袈裟一肩をまとひ。念もすゞしく命をさ
さふらはざりなり。然に丑の時より起出て珠数
除で唇懺悔を誦なし垢離をとる。無始の
罪障を懺悔し給へるなりとぞ。礼拝の数おほそ

五子の七ヶ生ハ一歩を得る事もありけり。その揺
指の式多くハ五體投地とぞもちひられける
餘の苦行にまされる精勵とこそされる由をは
や。牽攣これハ言語をなす事能ず。喉のうち
にて掩して。舌て唇を發せバ。口よりも齒まで
き。眼耳鼻より手足の指頭にいたるまで。疼痛
徹すること。言語のべがたし。とりしハ。前云の
ごとくなく。毎朝の垢離ハ。寒風肌を刺。滿身

のびかゞ輝(あかり)あがれる猛火(まうくわ)の如し。欲所なかなかまで
り。鮮血(せんけつ)ほとばしるまでなり。されど道念(だうねん)いよ〳〵
うつる。怠慢(たいむ)なく。いよ〳〵勉励(べんれい)をこらしきとぞ。さて
人まのつとまる事にあらず。仏道(ぶつだう)修行(しゆぎやう)ハ。一旦の厭欣(えんきん)を
しのぶが為事也。ここ今の修ハいふりてハいのるる
観行(ちんぎやう)の場(ば)にいりてハ。一身痛悩(つうなう)する身(み)ぞのこる
いかさまのも。法蔵(はふざう)比丘(びく)の縦令(たとひ)身止二諸苦毒(えそとむもろ〳〵のくどく)
中一我行精進(いなつたふわれぎやうしやうじんを)忍終不悔(しのびてつひにくいず)」と誓(ちかひ)給へるをきかして

やまぶしが修行これに比すれバ。のぞみするゝことばとて。いよ〳〵勇進せられたり。草庵に移られしのち。二季ぞとりハ。蓄髪をもせられしかど。後にハ精勤にいとまなくして。絶て剃除のことをとゞめられたり。されバ髪長くたれて肩を過たるころのまゝ也を撫ふぞのうなまでぞ。世の人とまじハらず。その仙人といひつべきものこそかくのごときなど。人々申

今やう。沙門(しやもん)の力は鬚髪(しゆほつ)を剃除(ていぢよ)すべき
よし。仏の誡(いましめ)あるを。何のこゝろ得ハざる
は。昔(むかし)長爪梵士(ちやうさうぼんじ)の渉学(しゆがく)にいとま無くして。
手足の爪(つめ)をぞつみきらざりしといへる[illegible](はら)
より。尋常(よのつね)の人の学(まなぶ)べき事にはあらじ。
よく経論(きやうろん)に達(たつす)るものハ。おのづからしるべき
好学
或(ある)時無存(むぞん)して別行(べつぎやう)されたる形あり。暴(ばう)

瀉するのみならじ。しかるに古継のぬまる
あり。或ハ赤く。あるひハ黄なるがあり。そハ下り。
十二三日をへて平愈せり。日数へて。再胎の
毒腋。この時黒脱しさるなり。ぢしかしハ
つしほ才のうろきて出しを覚えしとなる
語れり給
又或時やまひなる口縟の南蛮何了銭佛
をりて。本尊とするれば。いまも泥木朝座像

まく望なしとて
本領のそのいにしへをわすれ給ふさハ不通なれ
まかせまさハり何ゝす給ふ。とぞくちずさみ給
へりける
さて海中に入しはげしく苦行をされしかど。
両の股脛爛で。悪汁流れ出半涌がぬく
まして。其痛堪がたし。薬を用ひざるのし
なし。皮肉裂破れ。あつる又薬研の口ご

とし。されバ御列(れつ)砌(ど)の勤(ごん)行(ぎやう)ハ少(すこ)しもおこたらず。塔(たう)礼(らい)拝(はい)をしたれバ。五(ご)体(たい)投(とう)地(ぢ)ハこのみたまはざりしかバ。小(こ)たる他力(たりき)の妙(?)を得(う)られ受(うけ)て拝し。あるひハちをすゞし霊(れい)誓(せい)念仏をせられたり。そのころのはずゆゑとぞ世をのがれしうきよの中へ得(う)けのいづこゝ旅(たび)のすがた也。そのくなやミ旅のおそれ(こわおそ)る五十日ばかりの好り。世附ことづらし呼(う)しての

給ハく。今のよの病悩（びやうなう）にあふものハ。前世（すくせ）を
の業報（ごふはう）なり。自（みづから）作（つく）り。みづから受（うく）。誰（たれ）をか恨（うらみ）
これをとがめん。我（われ）宿縁（しゆくえん）つたなくして。今
ねまで妙経（みやうきやう）修行（しゆぎやう）をおこたりしにより。このころ縁（えん）
苦（く）を受（うけ）たり。しまゝし悩（おつこ）て勤（つとめ）ずんバ。未来（みらい）
の苦患（くげん）。今まさに信すべしとて。みづから誡（いましめ）
自勵（はげま）して。つよく苦修（くしゆ）をなせり。
或時。縁（えん）山の学（がく）侶（りよ）訪（とふら）ひ来りて。數十日の間。

酒の過淫に於て。かれ人命を損ずる人。酒
まかり有るは。昔。熱心。淡泊。長善の方大徳は本
食作なれども。しかし三教修行ありしも
なり。故にまた。酒が其の行業と甚相似たり
とぞ申したる。酒これをのんで。気ぬけをもたり。其の効
有りとて。それよりは五穀をたち。塩気あるも
のを嘗ずして熟精酒をのんで。より焼豆
粉一合をまぜて一日の食料と定める。酒の

〓轂弾縁の苦行に。山居巌棲の隙に事
の〓りきを略お逐伝なるのこと。彼の人
これを学んで言をあらし。急を先ず以ては
もの知り。地の罪人とあらず
手津川の半尾を以ては。時に信すの下
に鼠の巣を作り子の〓まに生ずる事の
り。みあまる時。信すの傍より蛇出す。一ぶ生
蚊虻の類。胸を喰らう。〓。絶て厭ひましし

給ひけりなりけれ。怒愛の廣くものにも及べる。
古には恥ざるべきをや

多津川の昔は水いと深かりけるなるべし。今ハ
行脚をせばやと思ひ立しかば。寛政三年十
月の比。その地を立出て。同郡。萩原村を過
り。邑中の男め。何の徒まずがりて。われ
こゝに止まりて。我らが後世助る世話へ
など。懇にこひ申しを進めバ。されバとて。此村の

公のおくに。かつらぎの芳尾を結ばしめらる。
郡中の男女。昼ハ農業をいとなミ夜ハ
秉燭ごろより。光家の幕をつづりすまして。公御
す。人倫去て後。そのゆかり二重ぞの宮
を。あ毎夜遊行会御せしらる。然ば。行御のこ
ころざしを果さんとなるで丸山といふ名ハ。
むかしの湯河直春の旧跡うつりし城趾なりといふ
其時桜を攀て。ねんごろに回向をせられけるとき。

この堀江の河より。西をのぼれば。程なし。しばく
沈次のめぐりしに。此の四方をきこれて
のちハ。こゝろやすかりとぞ。あつき遊魂の地
照しておりなんど。人々申つぎ
ことを。手代川の河より。疫病流行しければ。
此。申きて。里人みな神をまつとすめける。この
功徳のまやかりてん。行疫退散して。疾病速く
平癒す。村長等悪義して。此の事をつたへ

修行(しゆぎやう)しられしがしまへぬ。このハ向後(ご)のうちに廟(びやう)
菴(あん)をむすんで禱(いのり)のまゝに。名号(みやうがう)塔(たふ)をしつらひて。
この村の四隅(すみ)に建(たて)ずやとて。人々心をかけりき。
塔(たふ)に築(つく)るべき石を。灰(はい)葛(くづ)村に捜索(さぐりもとめ)した。
この辺の宝(ほう)によろしき石ひとつえたり。
されどもいづくの瑕(きず)ありて運ば。これを措(おき)て。将
しづみて。遂(つひ)に四箇(よつ)の石を投て。千津川へお
埋(うへ)りぬ。藤(ふぢ)井の里に石工何がしといへるものあり。

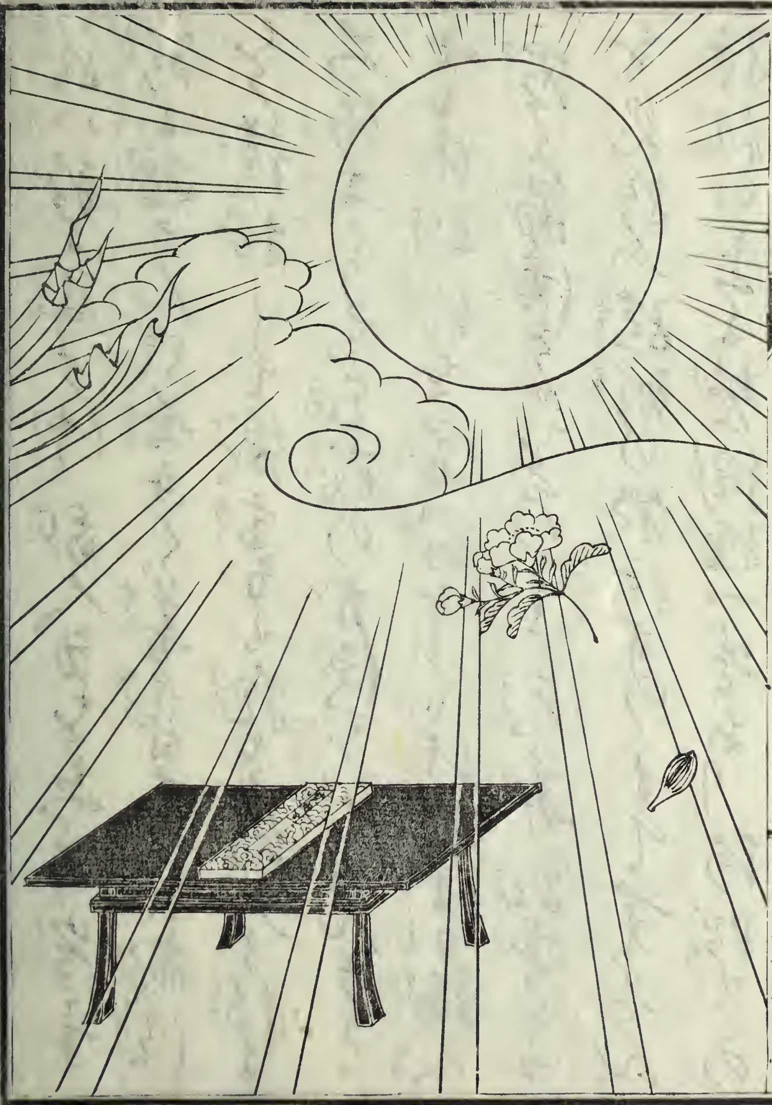
そのころ津川の村長なり。石佛塔彫刻の
事ありつべしとうけがひて。よき石の求べきは
さらにあらざりしが。或暁ごろ夢に老人の教へて。
石佛塔の石。指すありしつるぞ。急て彫つくるといふ。
夢醒て見れバ。戸外に二尺ばかりの巨石あり。
いそぎこれをひろひ取りて。ちくさの法師に石佛
うちてまづ南無の二字をぞ刻つけける。
此秋。津川の村人へ。石工の某へ四角の石を指

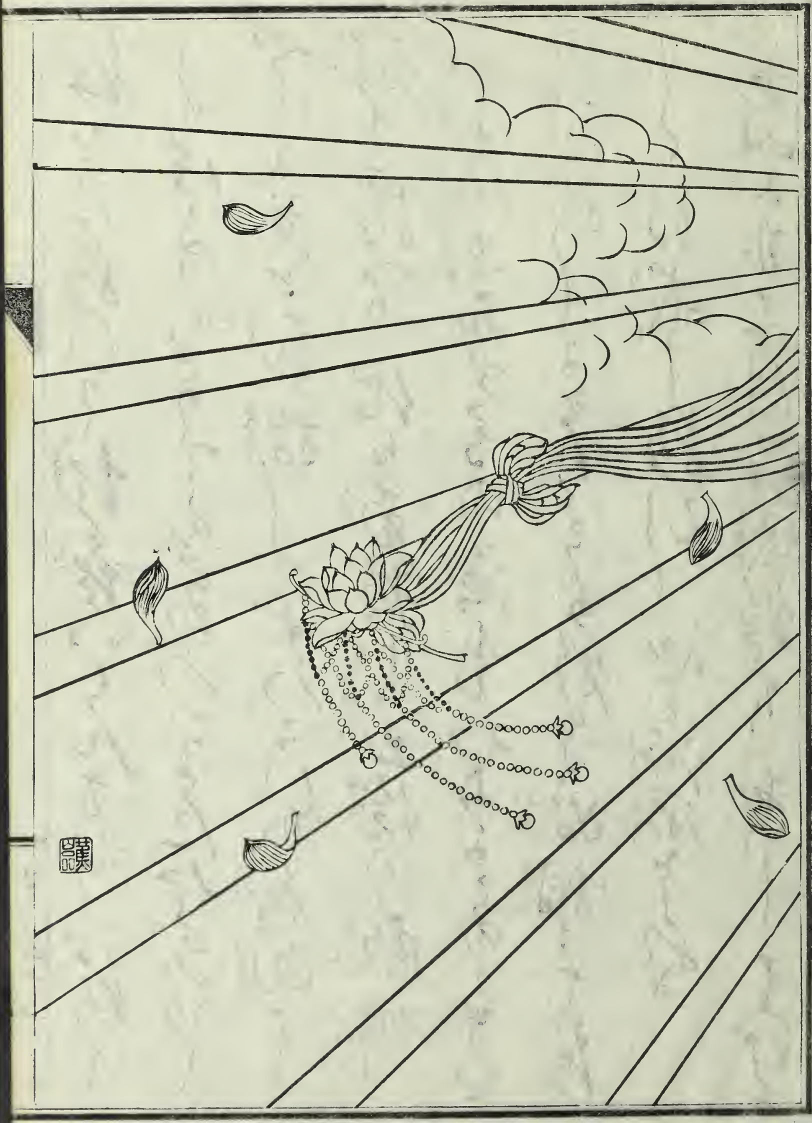
すりて。名御作様く是(これ)なるで。つゐびてといふ。名工
いぶのしみえ。名工ハこの暁(あかつき)までおまゐりやすまるると
と云ふたん。村人は驚(おどろき)つゝその名をきゝたんで。早藤(はいぐ)に
の名玉(たま)を研(りう)に流しなど。小疵(きず)ありとて捨(すて)つるまで
なりるこハめ名を誘(いう)は師(し)の道用(だうよう)を差ひて(した)。石の和
のづくり飛(とび)すりしやあまりんとてそのうち
は吉(つげ)を述べバ。師(し)つれ跡ひて。是(これ)に縁(えん)あるきたん
なんとのぞまひ十度探(さぐ)りまひて。さきたる名工づの

はしはまのこゝをそへ。彫のこりし六字の中。阿字の
つくりの可字の畫より下を書繼をなしく。
こゝを彫りそへて。落合故まで建て遣る。今も
書繼の塔といひ傳ふる是なり。或夜風雨烈
じくしうりしげさ阿その形。この書繼の名
稱。いづこの形くつんとばなりそり。人て拳
訪求るに。お形しなの中る。阿の行燈し
尾のゐそぞの。居ざしいなのまゝそこの

そのうちに入りて。儀然としてそこにありて。いハなれ
バてびなしずこてびじやぞ。うる不思議をあらハする
ゆゑとぞ。阿弥陀のよのしきにて今迄ハ凡夫
の極楽に往生するハ。その功のづもり飛来すなり。
不思議なりとぞの給ひける
阿難に教へて。戒ハ仏法の寿命。三学の
基本なり。いやしくも。釈迦の語り一日も
戒法なきの手を得んや。況や菩薩の戒法ハ。天

龍八部に及ばんや。吾人力を尽して岩奥
類に遜せんや。伝へきく。善導大師は戒法
を護持して纖毫も犯さゞりし。今将は
大師によりて。乞戒の方便を祈りしとぞ。
七日の別行を営一百をへぬる。時隣に目輪大
空に遍満せるを見てん。又天華乱墜せる
を見給ふ。奇験の数。何ものをもて算へん。
鏡机の上に。梵網経一巻あり。師初てこれ





經をつんぬしいて。勤行いをん有なし。ぬくと
ましけるとうけたまはりたるごとく。今もありし
やうは。力を勤務して。よろこびの色。面に
顯れ給へり。他は。南都北京室院の叡辯
打上洛東西学寮の道雲和上まで。そのかうと
うつし給しまゝそのかゝの給て好相すでに
しく得戒し給ひし也と證明をうけき
寛政元年十二月の比或給ふりあらしさげ

しん吹起して瑞をあらはすのうちきさん
猿べて何ぬ目。こよしハ凡人なるてハ
数なり。いはゞつとめ辨とて。例の但三尼の
さゝますて。念仏し給ひてよ。偏身汗ながして。
渥腐す滴ぞのり也。善寺大師の雲夜
ま汗を流し給ひよし。腕に昔のこゝろハ
何ぞありける。そはいはゞ強無のことを修じ
て。極略ハなかりけるを。ざつと小家ハ二万のこゝろ

より。庵の中。光かゞやけり。暁燭の如なりけるを

り。阿の姉と本妙尼とは。やくより詣

すまで。幸この荘厳を拝見もしとぞ

国分の家より林まゐるまで。雨いたく降る

ざりけるに。国内の寺社に仰ごと有て。請雨

の祈禱をも修しめ給へり。阿は其ころ。

塩津のいなら山の庵にいましたる尼人

詣すまで。請雨の祈願を頼ませんとき。

こゝろなれば。何ぞ堪て。是世を遁れて。只後
世の菩提を願ふ。風雨時の利益は。おの
づから其中にあり。いまは業を示す事を
明らかに及ばずと示されければ。諸人の難
をすくはざりし。茲にて申されければ。さてこそと
て。豆の粉を。食料に備しめ。是より
精霊の諸衆入てんまつり。招てこの座を
たじとて。又暁より是を捧げてつゝ。念仏を

源をしる。かくて五色の中の功なりけり。
縁は雷なり。雨に霰て。雨おしてくして降
今までしのんども。此時ぞのりましてて一天をも
の的をかりぬ。師のいへく。はなびの昇
魁は。今台手其業のなり。霧野り。三銭の
冥高思をいてのぶ何んとそ。雨もいとあらんば
なり。五は数日の雨晴ざりなば。人て
此の元の夏のしざうもち織ずあへるき

同年十月のはじめより百日を限りて別時念佛をはじむ。庵室の戸を封じ入て言語を絶し。睡眠を除き。口唱行の勇猛精進也。食物は六斎の外一合を一日の料とせらる。翌年の正月。別行満足して。つゞきて七ヶ日水食を絶し。別行を修せらる。霊瑞念仏称詠なる事。前時の別行に倍せり。同六年五月のころ。祖師の廟を拝せんがために、

丈宗をしる。清浄華院の如首大和尚しる
人なり。今世ぞやすずこれを訪逝けるに。如首
まうびて。阿をも内の松林院に詣で。
霊瑞をしめらる。阿弥の影。華頂山に登る
る。柳吉水の禅房大谷の塔頭八。西京の
稜林。猿の意語なり。昔八この浄所乃
浩寺の庵好しを。何八大度高僧玉を
こうの紀。つうらをなすべきり。都てこれ利物

偏枯の御よしつゆしらずながら見舞申さず候
の勝地なり。定めバ。気運衰へさしとめ難く。
懇に上生慈恩の知念をそこらしく存ずるこゝろみ
序なるしらば。京師の祖跡霊場ハ。都度
すべて拝礼されよかし
或日は叡山巡拝の序。大原を経て。古知己な
ぞろうそうらう。探題よき人の風展して。人多
参籠せられ。十宗を授くる。時ほどかぞへハ。頭

發向まされ。錫杖を突ならすほどまさらんて。深
誓ふ人の再來なるべしなど。所の人申合り
同年の九月のころ。熊野へ詣んとて。浪津を
出立給ふ。頭陀身の装束ならずかの人なりける
山路まで。つ人の導師をさせる。雲雷のぬけまで。
いきき給ぞなりた。何とも戴儀を待申て
ま移り。人々の念仏申つゝ行をみて。珠
の中に悦びける気色にて過去ぬ。翌日に

也けれバ。まづ向より佛の堂をすかし見る。阿
いと恠て。堂の内ハしづ〳〵と人ハ杉のきしが。誰まづ拙
ありしと申されしバ。堂の後なる石の上に登る。
傲然として。阿の様を交へて悪議の事
なりとぞ申ける
熊野三所に詣れける日ハ。神宮の祭礼也
白河院。法楽の為しあ。しば〳〵御幸。神事を行はん
し給ふる。其の前を幣束たてる。神女を通り

うけたまはりて器量をたてゝ。勤ずり力を盡して
鬼どもが相の進ざるを見て。河伯儀を
所てゝ。くすり採るやうにすまい。二る報ずる十の字暦へ
語りしらバ。神為ハやうぞ何事をもすゝめ
うけたまはりとぞ
然ありて御経つる読すずて。田をいへるを
の何る字に命しまる種おの托鉢などして。
下津国の侍より。西食の所なれて。侍

そこらに。あまたの魚。砂面に集りすみければ。弟子らいつしかこれを捕へんとて。繁の間に。魚どもを此限に船あつまりきて。川の中くろぐろとめぐりてころなり。此時ころ法発起し。十念を授けさせて。一統の中なる弟子を次第にほどこし。川のほとりを漕行ぬるに。その魚つき従ふことおほよそ一里ばかりのほど渡り。見る人奇異のおもひをなさゞるはなかりき。清水長老の

十分の思子。餌を施し。佛像を授られしも。
思ごとく天子に生ぜし事など。悉く合す
るた。法の行跡のこどもなりしとぞしるした
たり。猿の
武衣。いと袈裟かけたる人の束帯して来り
舞へり。その子はんは。一羽の鶯ごる鳥おのさき
さうらん大ぞのりなるべし。羽翼のびやかにて。金
光を放てり。人ありていふ。これなん紙の壁

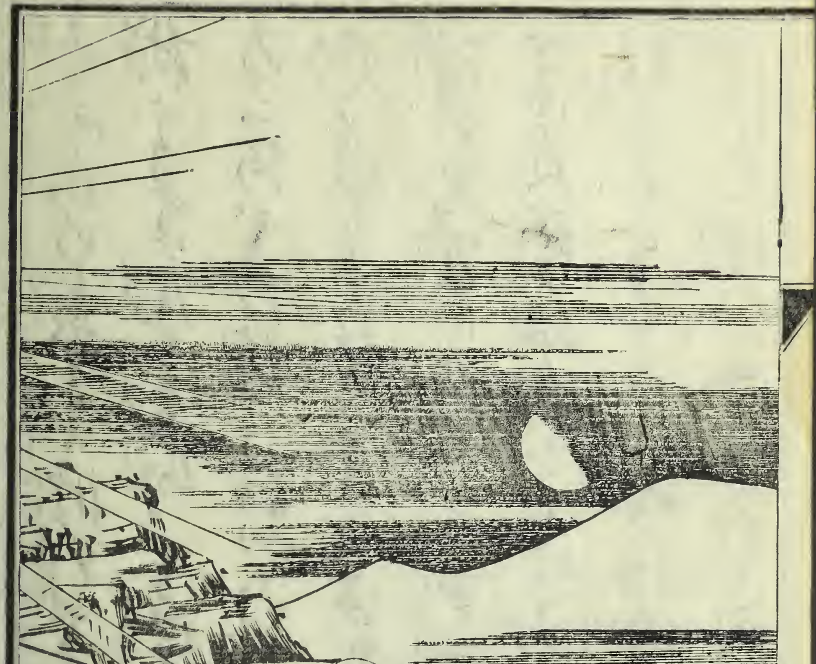
権現の御使なりとかんじて。夢は覚ぬ。扨い
よ〳〵過しころ熊野へ詣けるが。冥慮まやこの
如くなんとぞ悦ばせそうす
紀州から蔵いが津田の淵子。龍のすみりと
いふ事あり。昔よりいひ伝へり。しばらく
行て十念を授らるゝ。いつの比よりか宇治をたちの
らいかう事のなそん。その龍神は鰻魚の
如くぞ申しける。或時名号をかき持て

漸つぼまず投じよ。水中より渦ま
きて沈みたり。鎮宮仏し括られたり。
広大なる鰻魚のぬしの。龍神をとらえ
ありみて。浪袖へうづ。やがてぞ入てぞり。あ
いれ竜神かれの力。またやくは龍神を捕じ
ふるまひやとぞ申されたり。須弥雑経に。龍
鼓に五種の不同ある事を説給へり中に。
婆楼那龍王のつかさどる所は。一切魚形の

六塵なりと見えたり。いまの曼荼羅はこれなり。
界にて其族類するべきことを
壇律ときかれたりき。三部の八曼にて神祠
あり。或時。神霊比丘形にして現れ給ひ。法
を告ての玉ひて。汝人さまざまの事いのちあり
まうし。いまだ心苦し。幸に汝の法力をもつて。
我苦を脱離せんとすとの給ひき。それより
後。きのうち神前にまいつてり。十年を経て極楽

しぬそり。或る夜看経。明るまん皿食供養
すべきよし告げへり。翌るいづくの人とも
なく。斎食をもつてすゝめぬ。其のこじ
ゆるく裏より出で。皿出で即ち浄霊に詣でく
神あるを祭りけり。かゝやかし荘厳る供
御の菜果調理。すべてさまざまの品をなふ。
供養ありしにたがはざりけり
同年十二月のころ。或野林づのりにはござ候より

吉野山の奥にて、修行せばやとおもひ、錫
杖とりて峰をよぢ谷をわたる。其時に、玄奘天竺
の二師ぞ頭陀し給へり。本朝には役行者二人の
尼法師の備へ尽して。法あとを追へり。かく雲
谷の岩屋の辺りにまどひ給ふ。つゐに常陽原
宝珠を得ば。詩集見えざりし時、誘なふ小社の
行者より行のより給へり。尼ぞ本意なく
こころを追ひつかまりけるに、しばし常きえぬれば。



本身ハまれまな何しで。しばしまどろみぬ。頓て
三業の薫じたるにおどろきてあたりをきつくん
ろん。大身の阿弥陀仏。光明赫灼として。社の
後よりみちま垣を超て来る。半身あまり
驚て拝をすなバ。又檀を三階ぞのり。精誠なの
うつ。尊号を唱えて南無阿弥陀仏と唱へけるを。
阿弥陀仏の結び合せバしくのくのよし
きこへけるにやがて浄土へ通る事あるべ

し。河野の、しござる手人になりつりそとの縁し
なすぼ法花の。耳のほそりに聞ゆれど。耕管のや
うかりき。とぼのほ本男霜につりけり。うぶ
ら誠書が花三の堂へ刀つきを然ひ。こうして
小僧をそそかつりし藤室の影を供じぬ。
おしも堂の前を人の通りてうんてん日だる頭
のあひしして出る人なれバ。母堂の法めをへうとづくや
然め。なるる甲斐。須ヶ谷村を通りけり。

曳夫栄助といへるもの。師の傍にある膝まづき
て。いふやうは。我の世で母の教なり。うしなひけれども。
幼少は藪の家まで読やなる。折この栄妙。いかの
なる宿縁をか結じけん。師に帰依得道するの
内心のぬ来を観ずるごとくや。いつぞ師を見の
地よりめでかれしきて。我ゆへまかに結縁をさせ
さき給ひし事を深く八思ひまうけたりけんなど。
新なりて逃ばそは　よき志なりとて。尚望すます

うもしろ。栄耀よりこじいさんへ飛く。ご本郷山の
林幽み絡すべり栄てさてやうなる草庵一宇しつらひ
て。古仏獨經巻ぐもを尽しあり
須賀谷の所は。有田郡に属して。ころさき甘がを
うりもの登るべし。峰より六は。松柏おひ茂す。
巖石をふみわけいるやうまゝそ。嶮しさいふばかりの
なし。昔畠山政氏といへりし人の。籠りける城山
まで。ちぢ續く八麓なりとて。つねすハ捴それて登る

くさなりしを。しばらく雑居して。まへの庵にいれども。
この雑居こそ。空の源独処をは余年を往生され。
これ庵ひとつ造りしとなん銘じ給ひなきこの
てく業師のとうりじて。雑帳の心ほ向ひける岩窟の
よろ。方丈またしぬ平地一所をつんもそ遁ばられ
しくて。やぞうの作りける岩窟まそひて。九本の
柱を建。材柱ある薄ちぞやまそ。柯屋和侘ひろ。
まつのたけの律ついる風になるべし。下ふ千似の

絶壁(ぜつぺき)にして。前は臨(のぞめ)ば眼(め)も眩(くるめ)くばかりなり。庵(いほり)は雨露(うろ)の洩るにまかせて。内外の隔(へ)だてなく透バ煙霧(えんぶ)雷震(らいしん)を響(ひゞ)き。片雲床(とこ)を埋(うづ)みて。さながら露地(ろぢ)に坐(ざ)して一睡(つゐ)なることも有し。其の頭陀(づだ)第一と仏の讃(ほめ)給ひし迦葉(かせふ)尊者(そんじや)の遺跡(あと)にならふ。其苦労(おろう)はいかばかりならむ。人の中にのへりしなる。黒装(くろしやう)には何ぞかへり。この凉(すゞ)しき須(す)弥(や)の基(もと)の異(のう)典(あ)なり。日々に斎食(さいじき)をもらひべし。

新緒を綴じて。雲上一句をおこしける者なし。何ぞ出家して。本因といふ。この地をもつて水胸隔りて。觀歎の水は実安からず也。以業中り日頃おもひし翁が誓を。あかす明珠の徳ひそかに満とより七夜ぞのり。思ひ立ちにける念仏をよみ給じたり。業中のごとく。毎夜。竊まのぼりて勤けり。第七夜の暁。宝石の根より。いと清らかなる泉。ひとすぢ湧出ける。

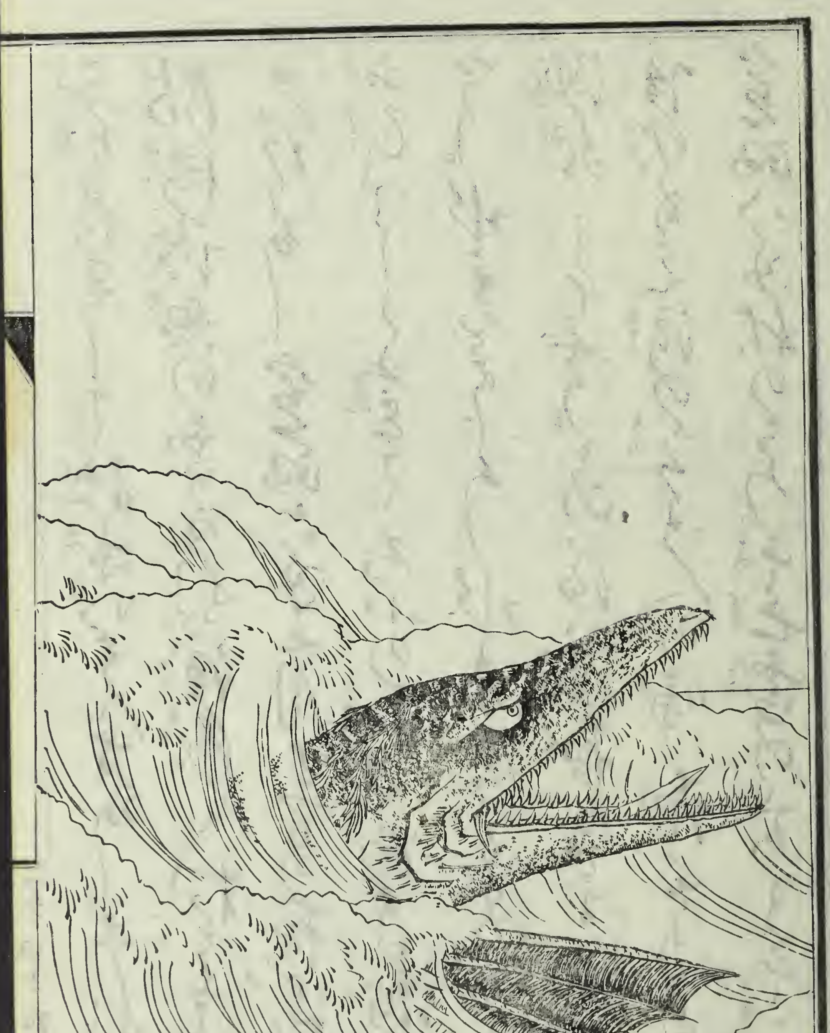
今も村にて和船じさまた潺湲として端る
まなしとぞ。雑項より五十下までハ。絃縁
由るされ今進バ折々ま男めが語まする時ハ。
栄助の包こしやうなる幟を泥おす文これを
擡きず。数千丈の岩ハ空を浸したちハいでく
十余をぞ擡五千ほまるなれども音如
詢としくて。恐ハ其する如し。又三る和楽
拐の附ハ有田川まで響かまして今進バ桜打

人の不思議なりとぞいひあへりける
須磨山の麓ハ古戦場ゆへ古塚ども多く
として其思ひ阿はれにてこの亡霊の
為にとて或ところに回向をし過ぐる人あり。
或夜本事尾張獨念仏し行けるに、たけたる
男の素袍やうの衣を着、黒き衣を戴
ぐすりて、いつはるハこの頃ハ何ぞ難回向り
頭りてこゝろなく侍るやうに直り

中さんにいそのこけまバ。これまでやなりとて。
うかちう出る故。暁野河の清浄まりて。往し
るさる先中けまば。冥界遠きに行ば。五
四向のとゞきつる形るべしとぞ仰られる
此あふる田殆ハ。名声の姿相をいひ所也。
いつなるとまる。ちのごろ年数万の根源り
出の生じて。何つる棟を塗るでもし。されバ
杉葉ふ不休枝しばりて。苦しみやむところへ

たり。阿の庵ちかき須屋。こゝや原のゐろう。猶ま
参し。阿こみのよしを語ひ。やがて菊帋の写を
経白木の巻をあづかり。或日ハ毎夜に念仏経
仰し語ひぞ。内ありぞに。さばかりの虫ぞるい
の程よき蓄ぞとゝのへ。残ずなく取りまなく。
招一章の識ずる処知。蓄同類の忠勤をうけ。
前懸のぞれば。時に当年の強才に通。因
暴ハ郭の那に随ひぬし。彼を呼として。

これを是とする事何ぞ哉。扨も四国の艮方
りそし。遠忠ハ同類の醜累を樹し。衆人ハ定業
の災殃をまぬがるゝ日数。未のまことを巡りて
金衍し猶卯てとむ。土佐で而遍とぞ伝ふ
誤り。寛政七年五月ぐらりのことや
日の御崎ハ。日沈る敬を厚す。地のこゝより西南
まくりを隔て。海原を抱ひくの渡る事
甘行館なり。熊野の岬。土佐の足摺の岬。

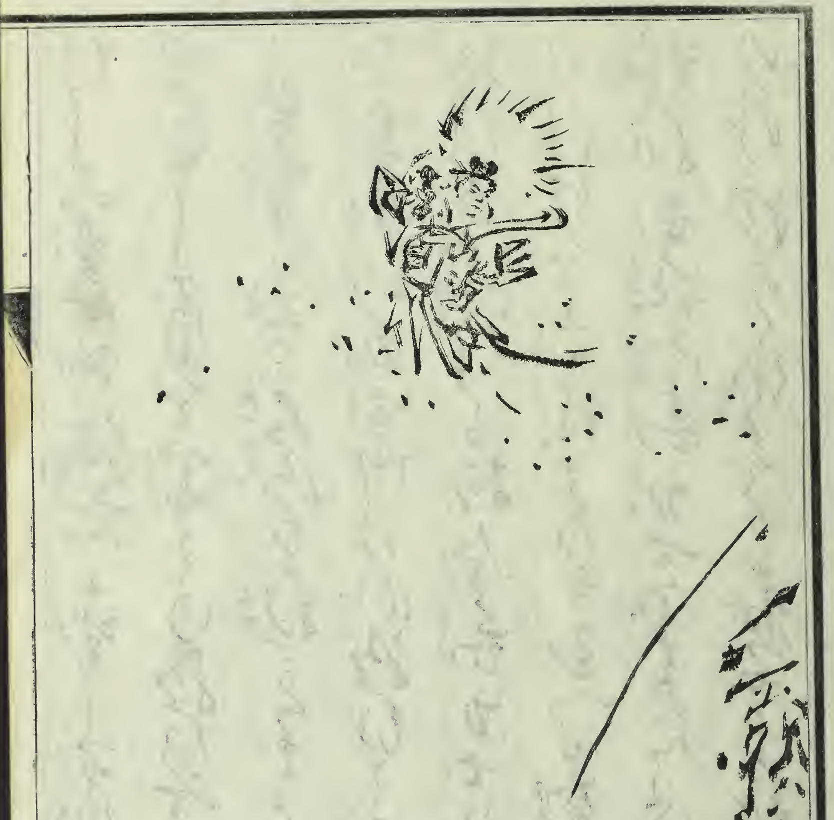


三分目掛足して。絶言いはん方なし。されど
風濤険悪の事なれバ。渡海の人なきこと
うたがひなし。寛政六年七月十二日の夜。海上
おびたゞしく荒て。大小の船ども何ほどか破損
せり。水主あまたしめり　水まさりてうきものおほし。その
溺死してぞり。その夜ハ雨夜なるがすハ。海上
陰火もえ。海の上人の悪声せりとぞ。
寛政八年秋のころ。其幽霊のあらはれて。二七

日を期して。別時念仏を修しけるに。ある
ひあか座偏を掘りて。その中より鮮魚の頭
顕出たり。読誦をとむるに苦のぬき草生のび。
眼いとすゞしく。汝ハ一心に念仏回向をうけ
つゝ。経をよみして海底に沈みぬ。是
のちハ船檻霊浮没の事絶てやまざり
ぞや。陸へあがる。前の鉢昌葉が激約の刺史
なりし時。鱣魚の災を除きてるまう仙法通て

いとめづらかなる見物なりし
須弥の山居のころ。或暁嶺の絶壁の上にて
はるかにめて。気御しかゝれるほど。郭ひふ
雙角ある妖魔。いづくともなく悪出。あまの手へと
のべく。阿のうらなり。両の臂を擢て
空中に飛去る事。凡五十町ぞあまりして。
阿いやも仙人の其傍へ擲殺さんずる勢ひ
なりしに。忽に全身金色の金剛力士。憤

怨の氣相を現じて。遊魂の体立まち悪霊となり
ひぬ。妖女ハこれをやむれん。忽然てずず気
時に。阿ハ心をしめて我まのへりたりやうすて絶。
臂のくまに攣坐しけるに。力士の其頭ハ。
相合生中に何のくとだちを通てり。朝霧たち
ち登りて。忽ち膝より下ハ空になりてまんばかり
なり。妖女の擢し跡。しげの足跡きうを
ざりしをとさすんバ。夢まそハ浅きなりと。その話



ひし。又或は縄床に坐し。閉目合掌して
おはせしが。見るまゝに其の姿消えて阿知なる
り。勢胸の上に。大山を押へると思ひけり
を。忽金剛力士何かはなれ給ふ見えければ。これ白ぞ
ならびに書を読する。執金剛力士は。善神にて御
の仏法を守護を為せ給へる本誓の趣の法顔
擁経護法金剛力士の会にまみえたり。されば阿
の行法。よく仏意にかなひて聖ぎしけるなり。抑の

づのしうるはしき擁護をも。鬱つきを始
つる形見べし。いとふかくこそ
源氏の花傳之上巻

徳本行者傳　中

徳本行者傳中之巻
攝州灘呉田に吉田善右衛門といふ人
あり。其父を喜兵衛といふ。寛政九年の春
の頃。江戸。熊野詣の帰るさ。有田川の邊にて。
須賀谷の念佛の行者おはすよしを聞て。
結縁のため。い[illegible]の人々とゝもに。須賀谷へまゐり
[illegible]。御行の十念を拝受す。夫より結界の[illegible]
まで。[illegible]山々を[illegible]

くて。ついで對面(たいめん)し。親(した)しく淸左寺(そうじ)を
など物語でうちあひ。偏(うへ)に淸(つね)なりし事
いと嬉しとぞ。喜平次(きへいじ)はもとより出家(しゆつけ)なりければ。
謹(つゝし)ミ父(ちゝ)の志(こゝろざし)を継(つぎ)。三寶(ざう)に歸(き)するの心(こゝろ)深(ふか)く
を遂バ。父の。師(し)に結縁(けちえん)したることを悦(よろこ)びし
より。結ぶるは年なりのしく。遠路(つろう)なる
吉治(きぢ)の志(とほ)をうち向(むかひ)。朝夕(あさゆう)は佛事など
して。禮拜(らいはい)し。或(あるひ)ハ燈明(たすりまつめ)て。屢(しば/\)墓木(うごぼく)など

供養し給ふ。其縁ある者の情きく人浅
将其のり也けり。同頃の卯月ばかり。思ねて
して鎮給へぞ赴きぬ。故ハ今大面許
給ひぬよし。浮舟ハ何ハ生し。このまゝして
子さき給へのしと。其源の袖より。横雪
まつそりすそぞ祈る。漸ましてはかなの
山まつきぬ。結実の如まいりける也。竹墻田
ひ聞して。草戸深く読したりにめとこの所

までは末を絶へりしなんど。祖父はいつのなる
かほそそらんまかしもんねど。さまざま思ひわ
づらひけり。また都より上りて。津の国より島へ
詣来ての輩り。何は遂に親しく拝謁許し給
なんやど。言るたとひ遂ばの優婆塞栄助
ばかりてけしうる事はおぼしつまど。まづそよし
はまきこえ申たるに。年月へ対面申
絶ざる別行業増なるを。それは何とも増

とされたへんとぞの始しそる。其平度ふ
下級の書名をきますすさへ、するつのしぶり
しるべやふよの例なりとぞみちすの様しく
て五體を持て楷て。まづ筆ぐなる初一ゐる
ます。通速頭縁のたびなしぬ事をきへおもひ
つゞければ。真楷のくろまなり蔵めり。さて十
念を楷よすをれて書。安ハ豪ま縁のきえ人
なるべし。今より日課楷を楷すべしとの給ひ

やうさへバ三分の田をも申し出せバ。何をか一向して
六方田を抽すべしとのたまへり。喜平治。たり
驚てさる勤ハ身に及ハじと辭しければ
師重ていやとよ。今より家の精神を汝よかの
しそ。そのつとめ成就せばいづれバつを
安くして。抽でしとのたまへまゝ。いまハ務ごの
たくて。遂に六方田を誓受して。なつくて
因果必然の理ども經文を以て教諭したまへ

さても。甚禅(じんぜん)は縄(うん)に浴(あみ)し。以(ふか)てそんへの
影しろのうつり。白(しろ)重(じう)長(ちやう)者(じや)は好(この)みて世(ぜ)話(ん)なし
つんてまちりつりさうゐんなもと。おもひしと
など。招(まね)きのうちまでむかひて。白(しろ)勝(せう)にこそ。暑(あつ)の日も
なかへてゐる未熟(みじゆく)て。夕陽(せきやう)茶(ちや)店(ま)にて寄(うぶ)きみ。
うそしもあるべきふかりねバつゐて法いふま
ゆきてふ。山をきんてりきるこゝし。秋(あき)の末(すゑ)。陰(し)
河西(うんさい)より接待(せつたい)に頼(あん)か郷(ずゝや)しめひて。吉田(よしだ)氏(うぢ)

参宮(ぐう)し給へり。今の結縁(けちえん)ぞ其(その)基(もとゐ)とハなり
進ミ給ふべし。此法ハ日本にハ閑(かん)斎(さい)食(じき)なりし
まうしはなどとバ。月(つき)ごとに吉(よし)日(ご)代(ちぢ)より供(く)養(やう)
せしとぞ。
師の常(つね)に浄(じやう)土(ど)宗(しゆう)の一(いち)族(ぞく)ハ称(しやう)号(こう)の法(ぽふ)あり
なりつ。この法(ほう)ハ作(さ)法(ば)すべき功(こう)なしとの給へバ
つきて。或(ある)人の曰(いはく)。師(し)ハいまだしり給はずや。
浄土宗にハ。布(ふ)薩(さつ)戒(かい)とや申伝(つた)ふ。これハ

すこし五枚にす。念佛のこゝろハあしくとも
しをけふのうちにも。念佛を勤むる法門ハた
ぬるまじと称名なりけるも。法門無尽なり。教
さる事やなど。孫おぼすに仏給ひしころ。
一夜讃ぬしず。一巻の文を頭して。これ
なん布施といつきみて進ば。経の一枚
起請文りそぞ何る。書てもさこそ思ひし
つまして。おぼすに。やがてのち曼陀羅つまる

家業の法ハ。勤べき事を勤られずんば。行の
徳のいたりし俗ハあまりすぎるを。実の悟し
給ふるなるべし。此の数ハ引受のまゝなり。
これが万行具足の式なりの給ひしハ。この
質吾の旨を述給へるなり
常ハ人に告ての給ひく。何の意をもなし。一貫
を給ふが大切なり。人ハいまだ一際の意をしらで。
他難しとて。得遂ざるなり。我等のともがら

時は日ごとに礼あるハ孝子の七子。一家に至り。
又浄行の別時ハ初七日程ハ難渋なりし
ゆゑ。殊に身心を策励して勤めしに
ならざりし。されども元より勇猛極につとむるに
ハ。内外の魔境きそひ起りて。こゝハ如何なる
宿業ならむと。労の気もいつのまにかのり加はる
まことしづかなり。此時さしたる心を動ぜず
すでに一心ふかく三昧に念をこらしありて。

いよ〳〵専心に勤修おこたることなくて進む
魔境次第に消散して。やがて安穏の場
に至るなり。されバすべての事。修の上
において忍び難き処にいたる時。こゝろづよく励し。
に弥つとむれバ。後にハ円満にすゝむものなり
とぞ誨られたる
一とせ。元三にあたりてありしに。或人[illegible]まで
何く雑と申すを記なして。すべて一大

ちの中などをとくのくれいつかべでのりず。風雨
なくバいのぞらもかを生育すべき。時に二六時
ちう恐退しうやまひて念佛すづきと示されき
み或人の口ぐんぞのりまそ唱る念佛ハ益なる
しといへるもゆの生ひてさ聴いひぞ。呈さき
ぞのりまそ。念佛のまさるうなりバ。牛馬の
らちるもそ申さるべし。又酒のめの口よ
てなふべの口よそなか申さるゝ也し。死まされ

らぬきものハ。おそろしく無心なるもの。或ハ
佛性有なからしむ。業障ハ猶ハ遁しるゝ
り念仏ハ申されぬやら人罪ならん。業障深き
ものハ発して念仏ハ申されども。また宿善の
ほうふさる。念仏の申さるゝ人ハ。宿縁有発
の人なりとぞの給ひける
寛政十年八月。二日厄災をはじめて河
内の国にて行あん御して。聖徳太子の法廟を

拝礼をしるす。それより接待の楽律のつゞき延寿
まそこれの月。留錫しぬ。次第を知
られしより。今までの花すゞし。日課念仏を
授たまふ年。草の人と称せず。呉
田の喜兵衛に八。の子で陸の都をまもる
よしを聞て。殿ず用ひて。大坂まで御
まぞ出る。浮殿の息子の。其八。伝男
め。雲霧の如く。彩雲ひかる中まる

奇兵隊の烏族ハ。是非まで伺候してあり
清船迄来着につき注進バ奇兵隊の網の漏れし
されバ是非のまゝ水中に飛入漁舟をと
つけて陸地まで上りて。おのが別荘
へぞ案内申す。師ハそれより七日が間
られ。其遠近の貴賤群集いふばかりなし。
これらの為に日々説法し給ひ達バ列坐の日
課誓授のみの又草果ならぬ事もしも

じやぞく別行(べつぎやう)の所果(はて)そしバ。みな来(き)りて
憂(うれへ)ふるべきなしとて甚(はなはだ)悦(よろこ)び。謹(つゝし)んで申(まう)しく。
このごろハ餘(あま)り何ごとしてか。しこのを
る別(べつ)莊(さう)におきそふりぬ。哀(あはれ)この所ハ清(せい)雲(うん)の地(ち)を
捨(えう)じて。供(く)養(やう)しまゐらせんと願(ねが)くハいやしき
志(こゝろざし)を捨(すて)給ハず。再(ふたゝび)来(らい)臨(りん)ましてのしなどおう
くだされ候り。そのちハく禅(ほどこ)あく。あうしこの
地(ち)へ移(うつ)しを玉ひけるハ。この故(ゆゑ)なりけり

縁起の小子。赤堀といへる神社ハ。吉田氏の
境内なり。今是ハ河中ニ草庵を作りて。河を
請じ来り。日々の飲食資用。すべて供養
し侍り。毎月十五日ニハ。遠近の輩あつまり
なく読誦するに。数多名号一枚づつを授与せ
らる。ひとつすゝに日課念仏をぞ勧めける。
自分の名号を。病人産婦などに服
すれバ。果して利益を得。霊験を疑ふる

ものゝ行まじりたる有様。人々これを拈彼名帰
とぞ称しける
本男。本尊の本尊ハ阿のすゞやまそ山城の
うゝ。山の叢に尾出して。会仰ぎしに。本尊ハ
つよく法生をとぞ遂てける。本尊。おもむろの母の阿閦のさまなど。有し法生仏ぞ出まし
今ハ嘆弟子ら形の空のまゝに。人々ハ屋くのくる道
なるべし。阿などころ。指おへうつゝをはじめのちハ。
いとゞ灯火の消ぬる心地やらんなくて。らに

この方の伝んのぎりハ。浮尾ぞくなどおもひ
定て四年林の末つのふく。浦づよく浦辺を立
出て。拾所のうへぞ打る所ハ白ころ。西の子
茂ハ出し思ふなしゆを出バ。いバとをつきを
り。西もやりそ。日ハすやく笛をそり。ちまき
筆つまりのれバ出バ。いバ猪をいづ出て。定べ
きぬ九ツ河しぬをと。とある小路より方のけいと
ひきゝをとこ猶出きて。頭やかつべといひつる

ま。嬉しくてつきて行。手をとられいてゆく。
こゝハ日本第一の。恵比須の神のいます宮や。
尼が崎の。浅御神主。縁あるを道のついでハ
よそ事乍。参詣せばやといふ本男ハめでたう
塩津の産にて。産土ハ恵比須の御神な
るぞ。この男めいのまゝして。しりそんなど何や
しみを何で行ぶとぞ。ひのまゝに社の
りまゐりぬ。かくて扉したる門をこのをと

指のさきおもしろう思ひなりしが。あの扉さとしろ
きくなり。かくありて。こゝは本殿。こゝは末社など。つ
ぎ/\にさとし示あまたまゐりて。伏拝まつ。霊への
稲荷ぞそれ。先のぬかづきてはじめておもしろきて出つ。
空もすゞしれさまのふしぎ物語どもしりつ。
ゆかしき形く。呉田竹鞠など八。心の奇の声する家
あり。その男いまだ尼の中に洞へ。こうもりや
なへてちへしへてさりぬ。やがて其家におくりあひ

いうた。本領屋にいますかりし上衣いでまゐるハ。
紀伊の国そこつ茶屋に人まちて我とる身ぞる。めでそ
阿の川に旅宿をさだめて。しばし菊の中にさせバ。
それなん。真野の茅屋の大神にて。あはせなるを。
さらバ是に法楽して。拝謝すべしとて。
秘蔵仏しるしぬ。本領に娘て。その人のつ
人なむざりし事を知らし合されしとぞ。傍
おもしろの事かなりぬ。幕より本領ご

深信をば。神のいつ迄も絶しらでんなほまずハ。おのづからなる神の余徳のいつはり所なるべきぞや

或夜の夢にハ。西蔵ばよりも小役原の。いと縄なる精なるまづ。禅ちよつと指ねおもひつめし有るひとまで

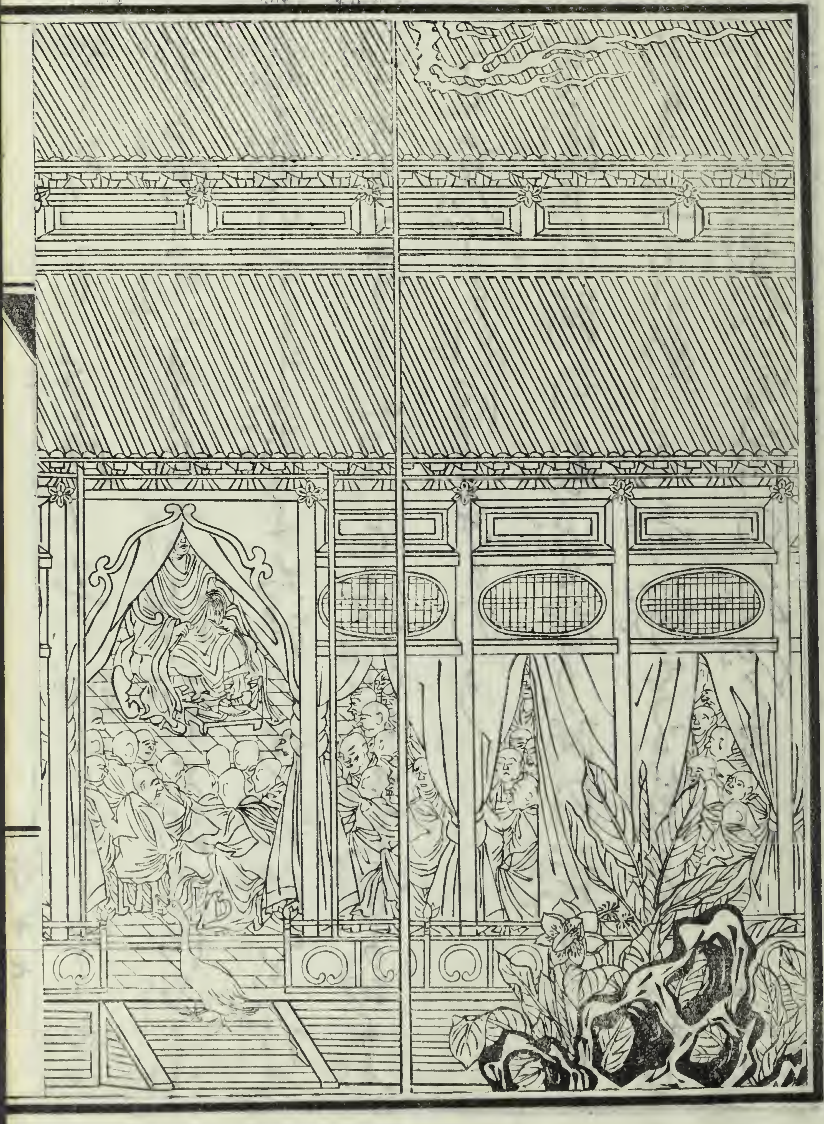
ましまさんぞと問ひそれバ我ハ其地蔵までの水なしと教へ給ふ。覚て後。そのほとりに地蔵堂やあると尋ねしけれバ。其あたりの社殿仏堂へ。

古き地蔵菩薩おはすといへり。辻に行て見れば忽に。
夢にみし所へ行ぬきし菩薩の告見えければ
かたはらにたゝずみたる所へり。持還り給ひて。翔
洛陽に仰て座像を作らしめ給へり。京都
二条極月十七日の夜。又夢にみえて。こゝ
山へ登り給ひて其所に像着より襟虚にある
までは一躯ありし地蔵菩薩の尊像を
移しまゐらせし。ここにまつりし年より。拾なりな

ぞうし捉へ来りけるに。須山の草木砂石土塊皆
地蔵尊の御姿に変じ。一花一葉といへども。
これこの尊像にあらざるものなしとなん言ふ。
その僧前夜にこの菩薩を拝まれし
あくる日。地蔵の尊影を願ひ来りしかば
けり。或ハこの菩薩の乗給へる舟に。
のりしなど。賤しきこの菩薩を夢みし
つゝ給ひしとぞ

或時(あるとき)狐(きつね)が出(で)。雛(ひな)鶴(つる)一羽(は)を得(え)て。庵(いほ)に養(やしな)ひけり。羽翼(うよく)すでに備(きれ)り。時。師(し)の教訓(きやうくん)を聞(きけ)ば。能(よき)弟子(てう)なり。師の曰。雛鶴(づる)に。汝十分獨(たまハ)すべきよし(てひ)と。申けり。鶴(つる)ハ必(かな)ず常(つね)に脛(はぎ)を折(をり)して中ハ眠るをと。師(し)が教(きやう)訓を聞(きこ)えて。やがて継(つぎ)を折(とう)。嘴(くちばし)をかけ通して。謹(つつし)みうるさきをなせり。師(し)直(さづ)に十分を授(さづ)けひとしてば。汝の道(みち)の奥(ごく)儀(び)にあり。まして勧(うながし)。十分をも足(たてまつ)るかごとし。

牧野



やゝありていふやう。我ハ。羽(が)うきして。花(くわ)と
我(わか)身(つての)人(とび)さりぬ。昔(むかし)浄(じやう)飯(ぼん)太(たい)子(し)の法華(てう)ハ、
鷲(づ)鳥(てう)の。すゝみて常(つね)に太子の説(せつ)法(ぽう)をきゝ。謹(つゝしん)で
窮(きう)なるさまにしたりと。徳(とく)化(くわ)の飛(ひ)禽(きん)におよぶ
ことに。古(こ)人(ゑん)これ同じきものゝの
智(ち)圓(ゑん)居(よ)ハ。師(し)の母(ぼ)堂(どう)なり。師の誕(たん)生(じやう)の地
めより。一つの船ぬ奇(き)瑞(ずゐ)をなす。雲(うん)の起
しらば。禅(せん)院(ゐん)の法(ほつ)。佐(さ)度(ど)なりけり

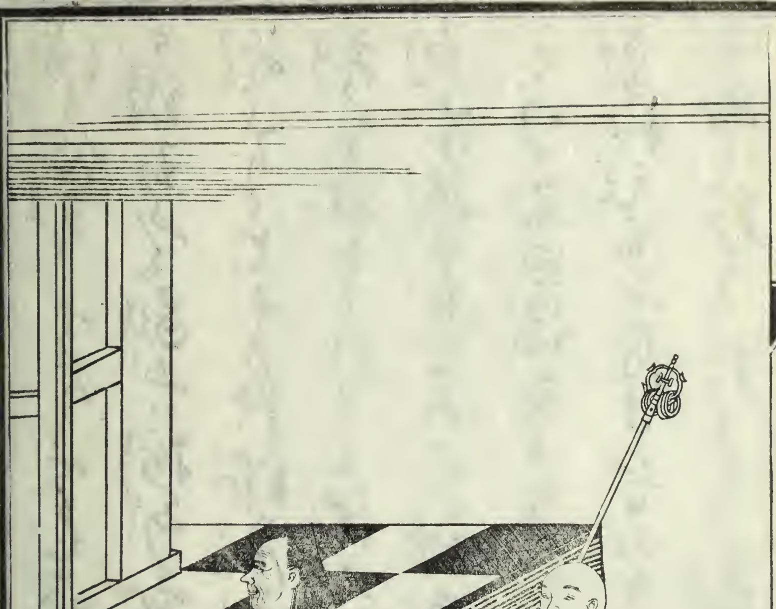
此ハ孟子(まうし)の志(こゝろざし)たがはざるのミにして山川(さんせん)遼(れう)り
隔(へだて)なすべし。母堂の深慮(しんりよ)ハ日々十字撲(さうぞう)まされ
る年を送(じやう)例(れい)と經へり。孟子いまだ陸の
ことり便(まゝ)とてまゐるを才氣(さいき)[illegible]
母堂を返(むく)へまゐりぬをば[illegible]
こひやしてまでず。母堂よりこびてあへず[illegible]
いまぎ[illegible]母子(ぼし)[illegible]の[illegible]面(めん)。[illegible]
いまんて[illegible]し。母堂のまじさるハまづ謝(しや)や

べきハ。此人ハ毎(まい)朝(てう)時を違(しぶ)へいで。清十念授(さづ)けつる事の。ありしさまをぞ申されけるぞ。本妙(ほんめう)のこゝろざしに聞(きく)ね(?)しが。後(のち)ふたゝびの事いつのまにか問(とひ)けり。朝(あさ)毎(ごと)に。光(くわう)明(みやう)の中に。弥陀の十念の鈴(すゞ)をそらにのみおこす也とて弓(こうえ)られけり。其(き)弟(てい)次(じ)まで一序(つらで)とぞ申し。毎年に京(きやう)摂(せつ)の霊(れい)地(ち)を巡(じゆん)拝(はい)せさせんとて。本(ほん)妙(めう)尼(に)を誘(ろく)ひ出つゝねもころなり。朝毎に弥陀の十念の札(さつ)を授(さい)けられしハ。おかず

事終りしとぞ
紀州前の黄門大真公にて。所々御修行ありて。願は。
國内いづれの山寺にても。わが申すまゝをきゝて勤るべき
よし。御使あまたにおほせしかば。何れもかしこまりて。
請状を出す。再び須賀谷の庵まで述べられけるに。
いらへし。公の御母菊清心院殿のうれひさせ給
ひしかば。御菩提のためとて。その法鏡を贈
りて。須賀谷の山なる移しあしまあ。是を何の庵室

とはなきを終へり。然るに霊をとゞめし師に悪く
法服袈裟衣ありしをもかうしめしもちより。
法のみまもりを務めしたる賤なるべし。陀。明
のちの気の初まで。法衣を雲居して。法追善
の別行をさせ給ひけり。師資の宿縁たゞ
ならざるより。かく懇ろなるもの給ひなん。常来
の増進佛道を教ひやされて。いと尊うぞ有。
この頃そしての神童二人ありて縄床の

傍に持律してゐくなるをいづこの事なりける
と誦ありき。我等ハ招涼庵頂山に住居のもの也と
念ありとぞ。爰に傍居寺山林の封。一切經
蔵を拝せしに。傅大士の左右の童子。容
貌衣服さきごろの神童に少しも違ざりし
といへる不思議ある事也けり
享和元年十月廿三日の夕。例の行脚の志。瀬
ずめぐりたるより獨に猶まぎれて須



あやうきをのがれ出給ひけり。大路をゆくのば。人のらん
ざうがもあまたなりしこそとて思ひじやうれ。山路を経へ
て河内国より摂州に赴き。勝尾寺の霊窟なる。
坊の縁にしばしいへる堂まゐりしれけるに。程なく足痛
の気何で。勝の石に休ひ給ふまのみて
いんきまりし人なるべし。師は須すりの鏡に
てふいまきびや。いつのふてとてもまづ千気をもてどひ
ゆかり。これを読めて。漸々に人集りすまくる

るが。例の吉田の部族ども。互にしのぎ傳へ來て座敷

法師が同條すゝ。陀まで部をしづく両錫

し給ひけり。正覺院權僧都。勝尾寺の

惣代として法師が來れをよぶ。十月廿日。

初て神額山へぞ登られける。其時小池院

權大僧都なりしが。所々にて

よしひさく並果る松林庵を。新り

修治して。陀に供養ありける。なかのくこの

山よりくだりて。化益を施し給へのしとぞ
くらやされけり。松林庵といへるハ。くの。
方十笏ばかりの浄室なり。東の方一二級を
おりて浴室の寺舎の。住べき坊舎を
造れり。又おりて門を設く。これより内ハ。
女人を禁制す。男子といへども。みだりに出
入を許さず。酒肉を論じて。内や山家
を遮し。松籟泉韻としなへに常念仏名

のおもむきをしれば。勝境なるものは。六妻の
明雲を掛ざるものなし。一念の仏種を
植ざるものなし。峰は岳月十五夜を冠
頭とし。二階堂をよそに塔として。別府
念仏をば枕とせる
は近き坊の跡なり。後は連なる御一天照
まかせ又見り。流雷一鉢して。忽雨をふらず。
弘法のうち弘法二百の塔。夢黄牛を

接ことゝ始め。其のし一上乗最上ト。此山
ま住玉ひし。改宗を書写し給へりし例め。
参眼ま等会も見て。三合し御縁なる寺まで有
なる。招この寺ハ。善仲善根の。現身浄土
の意説もそ説めく人説円の霊地
なりとて。宗祖円覚大師ハこの宗まて。
四家録挙の勝蹟なり。師ハこのゝいまれ
のこらずなしざるより。系を重て続ハ須

給ひたるなりとぞ
錫杖は釈迦の比丘圓成寺の法会なり
しが。此の僧徳帰して松林庵に入居
しをぞり。或時釈迦如来の尊像を刻
此まゝ有髪をきざみたる。帰りて後其像
いまだ螺髪をきざみのこし給ひたれば。祝
宅にてその夜独螺髪を彫
付て。まづ頂に末をとめけり。何を

の悪所の縫ひたるハ、作者の夢ハ、安置ハ内に
墨をぬりしところあり。掛れたるを聞て、
極宮全身に汗出て、阿の西話のたゞならぬ
ぬをうしろより申たる
悪人師にハ一向に用業を用ひ給ふ事
なきハ、阿の名号を唱へ給ふ。君として
余業ハ用ひ所り沁しすや、大小の令とく。
ふの便とハこれ君が無仏の余業也

とぞまされ侍る。いとゞそのしらで俗情に衆し
なり。物堂の事は。さまぐ゛の相伝あることなれど
るを。この一転語は。常楽を捨て。何の功
在精修の有りさまをつたふるなれ
享和元辛酉十月。京都鹿ヶ谷。法然
院にて精修没をこゝろみ。内衣を閉られけり。
出定の後。今五夕中まで。大方は山居幻摂
をつねとし。苦修練行。寸陰を惜まれ

たまへり。いつしか剪爪除髪の事さへまぬの
迷ひなるぞ。この頃はや修行の円熟して。
人気をとく厭ひたるまで。長髪長爪の
まさに言ふ相なり。ばかり沙門の正儀にあらずして。仁
の比丘形には復したまへるなり。それ剃
除は。荘厳経にも讃ずる所。これを長ずるも
涅槃のいましめなれバ。三縛愛にのもの。
誰か沙門の正儀を守らざる事をえんや。

くごろ。阿のむかしの雲居嶽所の顛に
なししてに王蛟と般若をきゝて法〻しどる
のつ俗宛と性道すことあり。比儀非法の
いふり。淳いまむつしむべきなや
田年に青月。寛東下向を望さる。京〻の
極式なる四ば阿部の俗法なさるとひのう
八東派の仏徒に郷とおりすきより東
海道を経て。江戸に着きし清小石川

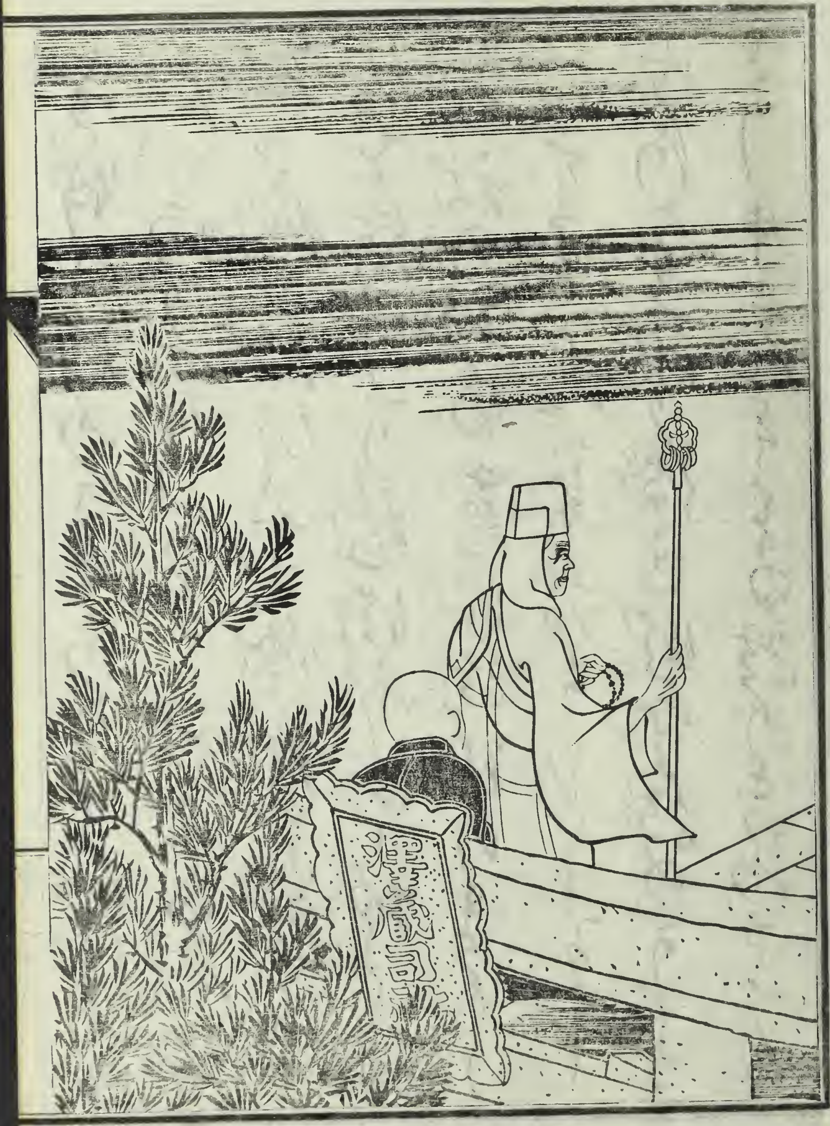
傳通院の了譽上人ハ。無量山居のとき。うらみて契おかせ給ひしを思へバ。やがて此寮とぞ。留錫の所とハ定め給ひぬ。時の貫首君譽智傳大和尚ハ。師の招ざるに来り給ひしとよろこび。誠あるの不請の友なりとて。同年十二月。ふたゝび道場をひらき。宗戒両翔。および常總の法式等のこる処なく相承し給ふ。宗規の相傳取て。

貫首大和尚のいつく。蓋や。河山その
開山。両祖の直授を得られたり。願ハく八
こゝをさかんにせんと。ふたゝひて。河。拱手なく盛
徳の旨を述るのかなめ。京都宗義の奥要
を得て。代々相伝の旨に符合をまかる事
なしとして。深く感じられけり。おう相承の印信
まして。大和尚より。三分書写の経。其外宗祖
大師真筆の名号を。師に贈る。大和

当後知恩院に住して大僧正に任ぜらる。又文化六年七月。入寂の前。此猶尾出るより。錫を飛し上洛して。臨終の此善知識をつとめられき。宿縁のふかき知るべし。とく。今に尊びあへり

同じころ。一般浄家にて十念を授る教の聞て又されば大甚和尚 和尚は当師のおしへをいるれず。説法のふじごと三帰の信郷をつとめけり。福縁西徳の人也。法は往自院崇の弟子より。尾州建中寺に住し。[illegible]宗の宗なり。今八旬にあまりて。今なほ建中寺の別坊に隠居せらる

あやしみて。阿まり尋(たづね)ありて人を遣ハしいはく老(らう)
狐(こ)の菊(きく)ありけるに擬(きうそ)ありきと申さる。こゝに
当時の鎮(ちん)守(じゆ)の傑(ぐ)蔵(ざう)図(す)明卿の史者(しや)
ろまりやなどゝ申連ばさしてバ。東の夜(やけ)掲(ゆき)て
燕(ほあ)楽(らく)きげやとさし取(もち)ゆかり。こゝをつかさ人を
ねばりつのさんれまでつゝしとて。わかゞ
うし挑(てう)行(ぎん)てうし。業(あ)田(あい)まゐらす。
笑(こう)墨(め)乃の傍りける。鵝(しやく)梭(ぢやう)つきなかりし


澤藏司

に釈し給ふさま。仏者が〳〵比丘衣る
人の仰せ有り。而して社寺ハ由緒ハ寺
殿の寵を得て。修学の業すべく
此をを避し給ふ。彌陀浄土を期して。安養の
我等。社寺の不当邪慢。何のしめ
法律を守りてまず衆僧まじしうもの
其何にて勝り給ふ。順世勝のこと
より申さんとては。其の勝りといふ。さても

すべのともしびハ人の衆罪をハ何しぎり給
と。今しるめぐりしきまゝなん人へしや
ものへり

文化の夜のころ日光拝殿の御遷座。
小琵の東照をとめてゐる。贈官宣授大
和尚ハ。増上寺證誉大僧正の嫡弟にて。
学寺の名徳なり。のち寺の監察を
務ひさせバ。そのおもしろき猶ゑの隣人まるる

こばせして呼て曰。汝ハ自今日課念仏
つとめよと勧給へり。師まうでゝ日課の
数ハ。定させ給ふやと。汝の生ハ。念々
不精にて念仏して昼夜はげむべし百
分なき迷バ。日課を定むる事難しただ
和尚重て。念ごろ不精を申せども一念の
要なり。称名間断有り。況や汝ハ平生念仏の法
いふ度。説法にも力をも用ひ給ふ事なれバ。無

耳順の名ハ雄(いう)ゆゑとや申されけるにや候。専
寺(てら)を建(たて)て。昔(むかし)ハ厩戸(うまやど)の太子(たいし)ハ。八人の訴(そう)を聞(もん)
き。一度聖(せい)王吉(きう)をきゝしとき。是(これ)ハ宰(さい)相の時より
夢(む)殿(えん)の行業也。さとしハ耳たゞすハわた
よつて御説法の要(りやう)を一時に聞(つとむ)
り。阿(あ)の難き事ある所ん。ちまふハ。未(いまだ)
三つ御の数(かず)のつぬより。うつる物(ぶつ)の生(しやう)じ
給ふ也と申されける所。ちわ為好(りびやう)て。仏の

實地の修行者なる事を。上聞し給ひし

とぞ

洛東。獅子谷の法然院の住持了阿上人ハ。

河の山形の弟子なりける名を法常とぞ

申なる。されバ師。上京の時ハ。つねに法恵

ぞ止宿をもなさる。その頃。典寿律師と云

ろしハ。やごとなき学匠にて常に大小の

内典を。その蔵の経巻まで。講ぜられし

けり。或る時。汝の師をあつむる背後の法話
の明らかなる濃りつ人ぞうたれ。ましめそ此
凡の人なるを知れりやん繋つて第
面をされ之の友汝の荘厳経の
大師を論ぜられしが。律師の学解や
大菩薩の悟道を示せり。梅尾の明恵
上人の再来までなど汝このつまへり。或
人の。汝は此学生なりなどいひたるを。律師

伝聞く。今より陀羅尼と申さば念や念
仏三昧の行者は。世を捨んずべからず。との
学生達ハ。口定を説て。心にも着する事もと
とぞ。つまれなる。無解。利行ハ。仏道の手本
なり。あら徒の。類に。尊美をもれハ。いつ
精勢の事まてそ
時。或時名僧多く書を残し残のし
ま。大さ小豆ほどの。琥珀の色なる一粒の

舎利。忽然として涅槃光まばゆきまで
那り阿の牙にて。是ハ夜叉が捧りしなる
べしとぞ。この寺て標その計給へる舎利塔也
りすぞ收め給へりける
越前國大京寺。妙智寺といへる處なり。
満之山。廿日宗の之生じて。人宿ばさ乾の
白風のこてさやなり。又代之寺の月中
旬より。八月十五日まで。この寺をぞ別行勤

たまふ四つのころまの。松の風(あふじ)。瀑(さ)布の音(おく)。
なべて悉(こと)く南無阿弥陀仏の聲(こゑ)ならざる事
のなりしとぞ。阿弥陀仏の極楽(ごくらく)に生(うまれ)たる人の
佛(ぶつ)の称(しやう)号(がう)の現(げん)じなるべし。いと殊(しゆ)勝(しよう)の
事ならずや
大(だい)勢(せい)の人こゝろ号(がう)すよ。念(ねん)仏(ぶつ)するは只(すなはち)阿弥
陀なり。説(せつ)法(ほう)するは唯(すなはち)称(しやう)名(みやう)なりとぞのた
まへる。常(じやう)行(ぎやう)念門(もん)までのこゝろ阿弥陀仏(じやう)

道中ふりそへばこそ。それまでは申さぬぞや。素人な
るべきを。詩の自楽しみつる候。おのづの
ら経論の玄理を筭合するを。それまで御
誹りしは。いとあつかましく新し
或僧。草庵を訪ひしたるに。汝このごろ何
するまゝ慢心におこたりする。妄に妻もまどろめる夢を見ふ。
稲のなどの如。この頃羅などなる人の。やつの
縛は已に解てありき。其気を得るかな。汝が衣のいろ

と同じての形き。加減まつくハ一字ぞとの絵をひを
るれ。身の毛いよだちのこ痛てゝ十念をと
て給そり。この像のちかふ人まのまりてハへく。
まじめに貧福にかまひするハ。誰もし陀のめぐ山
み聖道しかんにハ。摂取不捨の他力。
やふくの阿まハ松をしじまのをしぞ。思ひつゝき。
それぞやがてこゝろ高慢の煩悩をも何するぞ。忽に
悪いしこそいへなづのし今生でて。ほのハ

化化度衆生ハ。かならず前来を護すべき
ことに請しぬとぞ申。尊像に七種九種あり
と論ずれば説分たり。いまは枚挙すべきにあらずとぞ。
文化のはじめ。遠州に登宮をしれしる。
二ろ崎蓑の藤にある田舎のといふる銀
ぶの其人あり。訪ハの名をしれ菊まで十念
をたしかハ舟ハ植。扇ハ安房。阿の縁そしれさ
る歌を。其のほかに気佩して其のかの人に語

しとぞ。京の門人(もんじん)に。白井(しらゐ)亨(とほる)といふ人あり。往
まハなはしびなき釼術(けんじゆつ)者(しや)なりしとぞ。世(よ)の人ハ稱(しやう)し
けへりしが。此人。諸國(しよこく)を遍(へ)めぐりて修(き)行(ぎやう)したり
りし時。玉木が門に學(ふ)び。其(そ)の術(きやうがく)をきはめ。ちんだ(ちんだ)の序(やまぶ)につ
精(せい)まいりすと何(か)しを出(だ)ばいつの會に術(じゆつ)をすんべ
きることを飛(ひ)ばよのきこゆる(こう)術(じゆつ)なども(しよくかん)すべしと
しふしぞり。亨(とほる)思(おも)ふく。今(いま)我(わが)二る(のう)術(じゆつ)と稱(とう)
んすハ、徳(つとく)の賢人(けんじん)ぎやくなるべし。いつの新なる事

うゐしんずゐりしんをもて頭柄へ
ずゐぞうちらぬ。法ハ今の語説つらね綴庭にいまして。
亨の流ひすらバすゑまでぞ存ける。
法の説法折つるさまにて。今より始く嵯峨般ら
しく提べからざるの筆者あり。翌日謁
つへをくらして。或ハ鈍劣なり。二句傍に遍さ
らん時鈍法の示しを請ふと。五法のつま
状しまかりて。退し渡来ける。解く八

しかも女のるのへましまれバとしへ
たまへりん年をとのもなれ。ほ。御時なて高
ハ念仏の以君也。皆武士まなづらん
や。娘しる和八気御へて極楽はする
るの娘り。安楽出世のみ。まつ結をます
やその娘ひろ。海打滝で。念仏しなふ
さつつくつ気まる附。黒人として錦念法の
妙理を悟りて後ぞ法ほへまのうりて。

わ世に移りし者の念仏し給ふさまを
つたへ給ふ。分毫ものすきまなく。一握の撮木
をもて。千萬の敵を払ひ。萬逓すべく覚えさせ
とぞいはれける。圓勝寺本順和尚ハ。まことに奇なる
と同隣の人まで。はなしける親しくかたり
しとて。かたりつたへ申されき
或時。和尚當麻寺の。奥の院へ請待の時
ありけり。例の念經讀をつとめ。歸寝の

ずゝしてしぼ数珠のくりぎやう。手枕なく愚痴
頑す。様子何所あさばその序ニ様子み
讃ふ説をばやよの給ひて。何ぬ山路を
さしてゝ本町ふ安置の御名ハ本尊
まハあらぬそやもどれ。いなきさじハこの宅
より行ぞその給へりに。人々なかずつき
従ひ奉り。その内すぐる。宿の通りを給
ふる。宮の部りぞへそ。山村田園いづれの

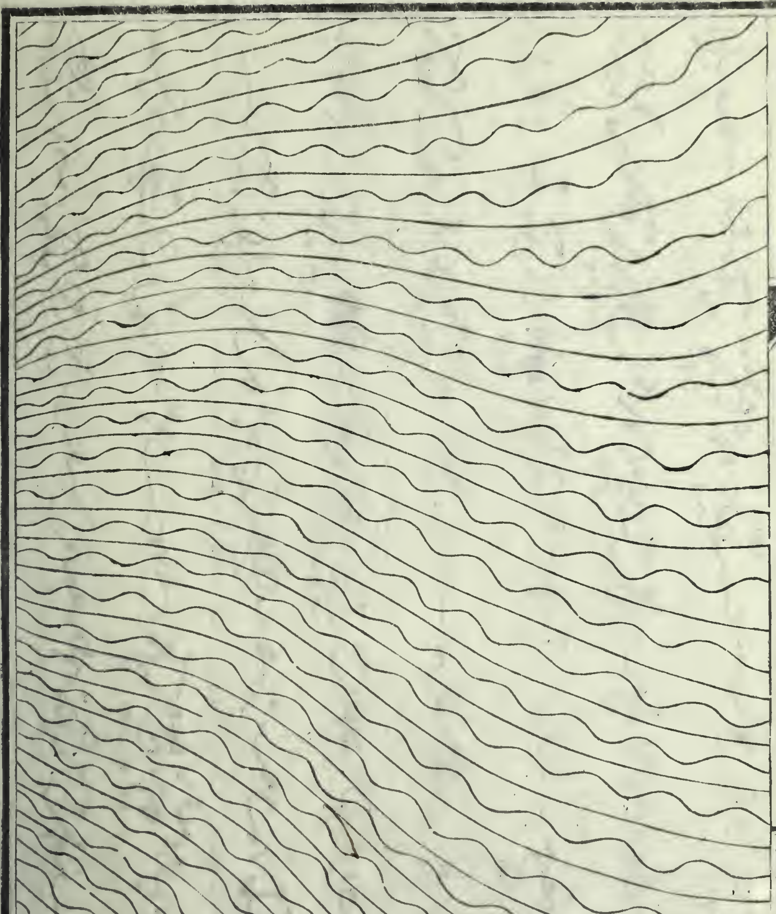
こゝろのうちに。有智灯明を修じ。ぺくらめくら七日
せつに。十念をこらしぬ。頭陀従僧の僧。不思議がりて。
その阿の画をとゞめて。すゝめてあなどめ同じて
それぞとゝもへつゝふりてうだに。この十日あまり
さきの日。白髪の老人来りて。それの日
徳本とよべる行者のつくりし画へすべき
で。名号の六字をのせあるものすぎで。その始
へるゝは。此人よりてまし。ふりてぞとひゆしのぞ。

是ハ行者(ぎやうじや)松蕈(まつだけ)の生出(おひいづ)るをもて供養(くやう)
しつるの由といへり。落(らく)書にいへるところ也
いふ一寺(き)石(せき)を師とし供養(くやう)しつるの寺ありごとの名づけてこゝろ
ならバ。やがて松蕈(まつだけ)生出る事。常(つね)のやうなり。菌類を採
證(しよう)もそなへしとぞあらでぬ(?)しし。仄(そく)理(り)深(しん)谷(こく)を経て二(?)獨(ろう)
うるそのおもむきをしずしとぞ
明師ハ參(さん)詣(けい)をもて法樂(ほふらく)し給ひし後ハそなへなり。
清山の靈(れい)勤(どう)する事數(ちじふ)しうつきたの
やすくハ松蕈(まつだけ)ハこの愛(おれ)師(づう)の供養(くやう)し
給へりしゆゑといふ事不思議(ふしぎ)の事なりけり

文化七年十月のころ。浪花の小橋屋村瀬
浜清といへる人の家は情ざかる。住吉まで
陸路の舟などにて四条の巷の志ある念仏な
り。画て十如念仏の事とはりしとや。
清遠陵の手をも相やまひ云ゆる
とぞ。古の話縁。目程ひききしきかず。さる後
の家録起に。家族の衆道処なるのみ
でありて。浪花こそ。仏薬の盛なりけれ。

此歌ぞはじめ聞りけり。人數まりてのち。
歌族の人々さまざまの物語ありて。やが
護持せらるゝは。九十一億劫ものゝ佛の法
舎利也。この舎利四十八粒に分身なす
事有ば。[illegible]海が[illegible]しそめべしと法告
歌なりし事あり。このころ実よその數
多く円満給ひぬ。今の朗詠集ハ。そのしるし
なるべし。此歌ぞ大なる善根うゑにけるもの

船とて。棹の舟みつからず船しけり。はつと出て
ま空佛のいきもとて。法輪頭雲のふ
し船ハざりつるを。彼の岩根をふうちけるに。さるま
ざ図の入昔の御修行のおもむきど。このしるを
船しもへ。めぐる船しいもなりて。清浄
のちふく。波の蓮臺の上ふゆきまし。自然に花の
船へ乃御姿をもさめの夢心にみえまうて。
やがて本国に詠をも遣しけめり。かゝるほ



上新田常光庵に安置せり。
大坂長堀に住る。京屋治三郎といへるもの。
阿弥深く帰依しありし。越智尼さでへ六月に
よく詣で。旧縁懇なり。文化七年十月ある
の夜。つし阿の弟子の僧ひとりまで。出し
をつバ。幸に今宵ハ念仏をん。の見て帰り
し見御ハ回向の方へうしおきてれバ。
門人等きん。回りの誰かれに十年前へ

なども聞えし。子息伊勢卿などもしやり
けり。伊勢守は名網を携(たづさ)へ綺羅(きろ)を剣(つるぎ)立て。
佐(さ)のや橋(ばし)をわたりし。頃(ころ)はまだ酉(とう)の刻(こく)まへ
かくれたるこゝは何(なに)の油屋(あぶらや)何(なに)がしの家(いへ)。
也。貞織(ぞく)のゆかりとて。人を鑓(さうぎ)あつりぬる
人まで也。そるころて。伊勢守をつんで何(ちみ)
とうやしき押込(おしこみ)。三刀(うろ)をのりきり
けり。涼(ろの)出(で)逢(あひ)ひつりとおもひて。阿見る

まげのへらハいまぞ盗人(ぬすびと)につきこまれけるを血(ち)であ
棠(ぐぶち)をなぞいひつゝ倒(たふれ)り。竹格(ちくかく)おどろきて手(て)
宿(しゆく)してこれバげすの肩(うで)背(せ)おしなべ猪(かきのした)をり
あわて騒(さわ)ぎつきたり。されど血(ち)のみえざれバゆめ
しみをよくつくりたる上(うへ)のきぬハたゞしたに
きりこまれど胴(どう)着(ぎ)までハ通(とほ)らざりし。
とゞまる。伊(い)ゆかしまじめて疵(きず)ゑ(え)ちりて。
ぶつしたきこれつるを笑(ゑ)みつゝものさしてふ

この名物の戯徳そ。たすけしるなる
べしとぞ。会我ちゆくめきえて。画松宏
御しりとぞ。これなん不求自得の利
益ともいふべきとや
大坂菊屋町にて黒江屋喜助といへるもの
ありし。仏を信仰する事。あくの仏のごとくつ
されバ仏ハ仏ハおほしつゝんめでた経
きん時つゝ沢ハ阿弥陀如来をとめよ。来迎

すゝむるの縁し。とうれしきことのふ
おもひて。光人まうかりてむぬる気病[やまひ]に
行[ふ]りて。或日[あるひ]いまうそ師の来迎[らいかう]縁ひ
つゝとをひて。念仏の声とともに往生[わうじやう]す。
ふごろの結縁[けちえん]む為しうとぎまる。有難[ありがたき]志
まがら
嘆[あう]れ光明寺[くうみやうじ]と撰[せつ]化[ち]八国前の住[ぢゆう]人光女[つねすけ]
基[ご]本名左衛といふ人の発起[ほつき]を勤進りし也。

ところ。阿波の生れ人にて。その名はゞく。この家まを
あくのしと名づけしは。赤岸（あかきし）といへるものゝ名
しに。窟にさらせて侍（はべ）るなり。この集（こゝろく）の中
に赤岸窟（あかきしつきは）ありて。千潜（ひ）の岸はすこしつゞきて侍（はべ）
ぶ。かくそのつき窟（つき）まそ。そりしは旅人（たびびと）をもて
ころもなり。岸にはつね（ちくの）あまればうらあるそらなし
まもつゞくは見るなでもの面（おもて）ところさぶまる侍（はべ）
なりし。ふところ（その日）日夜（まちまち）の動行（ごんぎやう）をとりて

鴫。鶉またちのきて。いづれのかたへかとびけん。舟

ひさごをとるものにふ。はちくへけしうるとのに

いかにしなのごろ。漁やさんもしうにて。急ぎ

舟を棹さして。平んのまほり。ぐり

海士もいりて。荒磯の苔ひとつまる

ぞつんゆめつる。ちくと漕うち沖を仰ぎしてぞ。

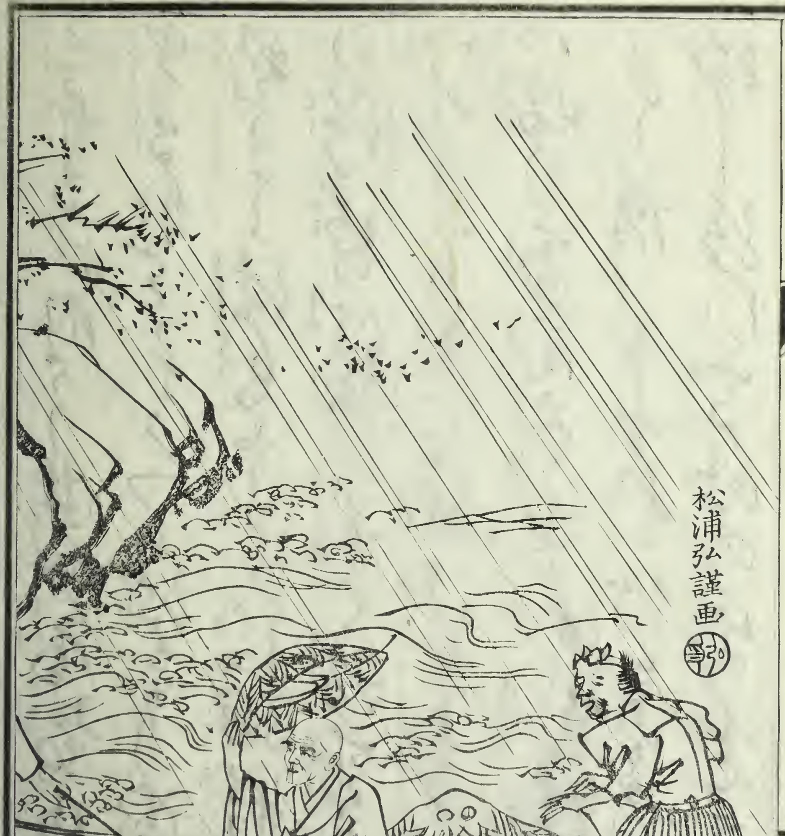
磯のうち棹さしよりかふ、躍杖のえて

空をそ。うつも崇よ。のしこうとて。つきう試

然し名廟ハ一握ぎのりたに。錫杖の插え
築てゝ。十念授さまゐらす。此寺の人ハおもふ
り我ござ。此骨より八安置と寺てゝ。ちつ
よそまじ。然るにあましつさて今まや海
将来なんなどおもひあつきてぞみたり
けるみ。又日本のうの川の渦出たる
川口ハ。年ごとあるよし安泉のうへあるよし
をなひくよきて序なりとぞそゝてる

懇に回向なして野べをくりしけり。もと
より不惜身命の余勇形のごとく。くのる縁
悪の所まで凡。たものつらくなる所加なさ。また
うしろすたふくろやう繕ひ
或時。竹生島へ。弁財天の浄土詣り。いざ
木のしたやとて。これの錫杖つきをとめつゝ。
弟子てらおもむしとて此ちぬ。なうこ
だしき旅行なれども。くる脚傳せん。ごくりく

三井寺は何やら勝遊庵。上悦山の襖。静
閑なる光寺ぜまでし。入つて其町。清しられば。
時として休息もしる。其寄円鞭ひがも。大
の陰は。山の清沫小。是其松出来て。世法梅
眼ゆうしりき。して拝宗なるもまでも有る。
八濱の高商大文字屋何某。この序と
もこそ。清しゆんそれば。竹生島の酒りあら
鰐一絡ひ。言島の生まるにそる。ふる


松浦弘謹画

の厚(あつ)ゞ蜀錦(しよくきん)しゆす縮緬(ちりめん)紗(さ)の類(るい)の誂(あつらへ)候え。
荒(あら)川(かは)より。横(よこ)とりそめてらめすめさせ給
あまねくこの御(ご)染(そめ)の青(あを)竹(たけ)紋(もん)ぎのゝあまつ
ていねい。竹(ちく)紋(ぶ)嶋(しま)へぞつゞきの御はなし本(ほん)紅(ぐ)に
こうじ浅(あさ)葱(ぎ)しらへ厚(あつ)ゞ薄(うす)霞(か)のぬき薄(うす)
雲(ぐも)つゞき縞(しま)もあられ小紋(こもん)はたしと紫(むらさき)。
此(その)色(いろ)の鳶(とび)茶(ちや)又なるべしなどへ申候
なりといがれより嬉(うれし)くぞ存(ぞんじ)まいらせ候

もろに忽失すさまじく吹颪こそなぎり
かゝるを。何とかすべきやうなし。此舟は備
への中のぞ彦根までつきたるこれはのりあ。
彦根の宗安寺といふ寺に請じ申て
まゐらする。ごびんは膳へのこらず焼て。其所の
人々は。いとゞ残多く思ひ。そのあさん浜し
の竹生島までのゝし風聞やきまり。
もろくゝ此舟をそへる。揖ゝまあらせんとて。

急(きう)の岸(きし)に。人みなの続(つゞ)きものなりぬ。おもひ
うけずは浮沈(ふちん)り出て。つゝの
筒(つゝ)をはなさず。上るまじきつゝじ。ぞそれ
宗安寄に安着(あちやく)申しき。それ程はなおすゞ
誠説(せつ)も信(ほか)なく行てあれば。老(ろう)衰(きん)の人々
んの縁(きう)に筒(つゝ)へ。程をおのしてを濁(まくそ)まの渦(うず)の
ごとく彩く。これ何事の朝(あさ)ぞ。八幡(はちまん)へいおめ
あくの文はなしなす

文化八年ハ宗祖圓光大師六百回の御忌也。
その前後より。念佛の弘通いよいよ盛に
なりき。浦尾の山中にも。月参するもの。五畿七
道よりつどひて。凡二十二ヶ國ぞとつたへりき。剃
度の式を請るもの。月に二三千人。月に
通夜念佛するもの。一千人に過ぬ。されバ
餘りに勞しとて。同九年の春の頃より。頭
痛をなやみ給へる。然り。紀州より。故

御道具は何れも國内まで作役あまねかりしき
よし。只管に請ぜられたり。先には國寄りし中
されど御僧は。強ひて。かうべをふらずして。
そもしの有様。帰國し給ひければ。おして。軈ての
行李なる。相模の庵室とぞ称へける
梶原の僧持するは。浄土宗西山派の本寺也。
住持のちからにて。浴室の建立ありて。人々をも
そのごろ帰郷せしに。幸にこの頃國

ぎよせ給へることにて。文化九年正月
廿日より。七日の別行をぞ修し給ふ。折ふし
ハ。瘟疫をなやむもの多かりしが。国内此邑の
於てもことさらなりし。その住持の寮舎として
哉し御門にて。法華不断の勤行し給へり。日々の
群集二万人にあまりとぞ聞えし。説法
し給ふ中。結縁の日々十余度の鐘を撞
給ふ。地獄の苦を脱て。念仏して極楽へ導

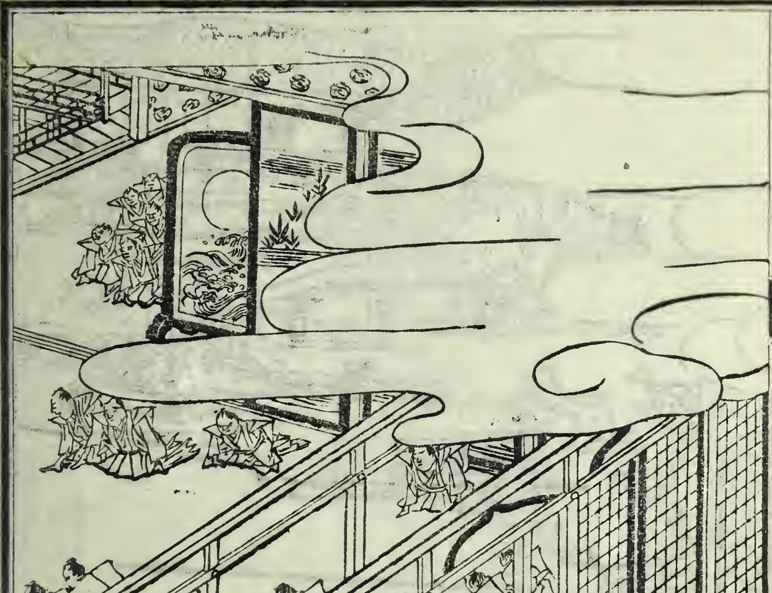
此のとのことなる上寿のまのあたりなり。しかるに其の人唯
深窟して住ておりける。阿波法師より
も。医の術を伝へ聞て。日稀に詣来
其の紀の数三百腰ぞくの人山の麓院
済したりしとぞ。鍼灸。侍医手として。
日々薬を調ぜさせを好みし。又恵好みへ
其の友。竹屋侍らしめして。按摩をもて
好みつ。かならず算服をとを閲べきよし。命じ玉

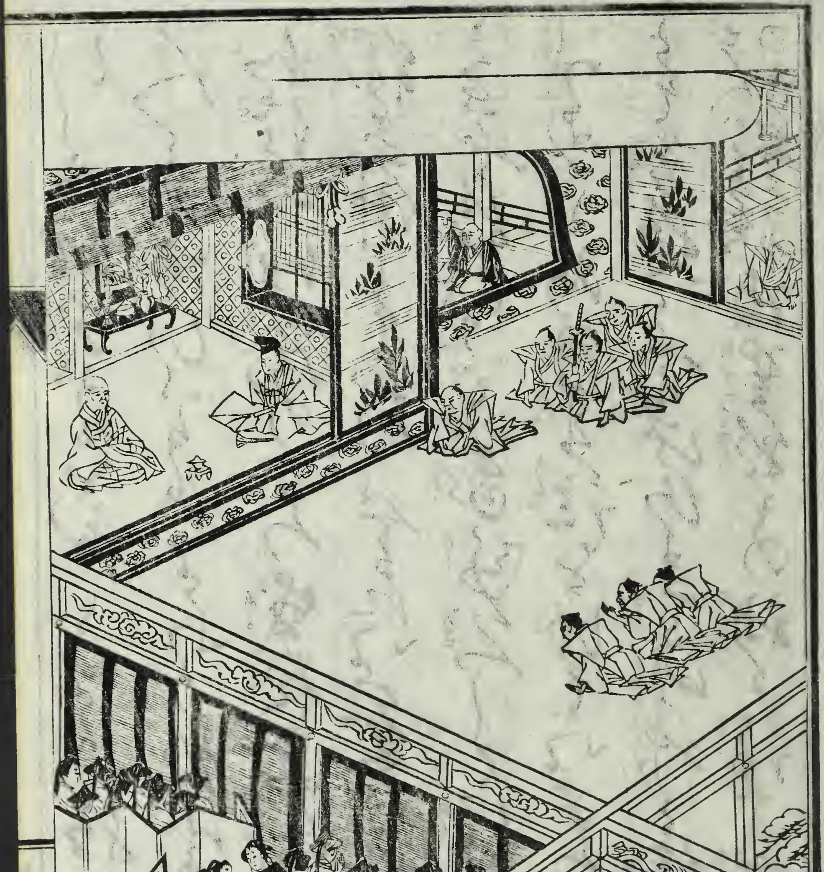
しと称ん。清音宗のいへり。比叡なるも也。
相の手にも称ふ手番なれば。独立の別行
称りて同月の廿七日。光明寺に称す小嶋
までも清泊の外あ婦を出さしめ。此の寺に於ても。
悪僧遣はして。六挺の櫓をこの寄る武田
東へ。を籠めて。清く帰じ三人。水だうらを渡
落し馬の旅ずの是。清蟹は箇きぬる。これより先見
の清若業まで。阿弥清蓮世音をまで。清大面
畑清路と称す。

の法式いとおごそかの也。加坐を組て。十念請させ給ふ。その序をもて。一枚起請を講ぜしめられ。士女すべて合掌すべきよし。口號命ぜらる。法楽の中にて。十念請らるゝこと七つぎなり。惣髄の法楽列儀ハもとより。法器具どもなりけるぞ。寸ぞ法精勤なるべしとぞ。新あく手に造しめ給へりしとぞ。半紙にて。惣詣ちどへのつきを見しとぞく

其日。國君の請によりて。説法し玉ふ。法座
の間を道場と定め。説法終りて十念を請
させ給ふに法徳を聞し召し給ひて。館中の
し化を果されば。翌日は説法せんと念佛會
あり。權化の白部經どもありて。六月終るまで
法味給り。和尚の庵室へ歸らる。その後
應じて庵にて以て説法し給ひき
その國君を。春葉院殿と稱し奉る。

中納言なり。大納言に思ひ遷し玉ひ。浄隠
棲のうち。従一位に叙し給ふ。法縁
深く入道して。修行年のぬ(?)まにて。
無量光土を造営し玉ふ。恩施を
寄給ふ。右京の子息。江戸一門院にて。善
再建を命じ玉ふ。土御門三昧院の扁額は。
すなはち。法元の法撰筆なり
元祖大師の。月輪禅閣の請によつて撰述の




牧野

りし清軌式(きしき)にも用ひおくり給ひしなど
人々中にかしこきことこそあり難けれ
れ給ひし後の中宮(ちゆう)安殿(あん)のころ。或(ある)夜(よ)更(かう)闌(らん)人静(しづまり)て
独(ひとり)念誦して坐(おは)しけるに。いと尊(そ)き神(しん)女(によ)の見え
給ひて。我ハ龍女(たつの)乙姫(ひき)にて。住(すめ)るなるべし
つまく此の来(らい)臨(りん)を得(え)て。ちよまつらば
とぞ告(つげ)給へる。其後ぞ宇賀(うが)神(じん)と称(しやう)する社(やしろ)
ち人ハ宇賀の神なり。安その河原
の前(ぜん)なる社(やしろ)の請(しやう)じて年(ねん)ごろ法楽(ほふらく)に

やしろ。かゝる事三たびなりきとぞ。又この比

の叢に[illegible]といへる臨済宗の寺あり。是

[illegible]

識に遊て。大[illegible]といひつべき

[illegible]大和尚。[illegible]の[illegible]を

[illegible]

おのづから[illegible]上人[illegible]

なり。上人[illegible]の[illegible]て。

ところ。太甚和尚の京師に遊学せられける
ときに従て記莉和尚の草庵へゆき
よしと申さず。師に太僧正の護法の深志を
感得して。寛東に向て志。一度は和殿
いまだ叢林に入寂し給ふ。大和地を経て。河内の
叡福寺へぞ詣ける。その日はふ聖徳太子の
御廟まで詣で。一千二百国の御国記
いとくふ。なを御持華に詣し。請て二日三

称の念仏を行ひき。その序をもて。斎庵

ちうおよび南都の奥物陳列され。再勝

尾ろへ掛もむくのすこはるの尾上の妻の

手形なる

大隠居より。池の下向ぞうぬ。猶へる事。

言く々身分ぬせば同じみ子り中句。勝尾の

茶庵を寄らるよ。謡まきこえれば。

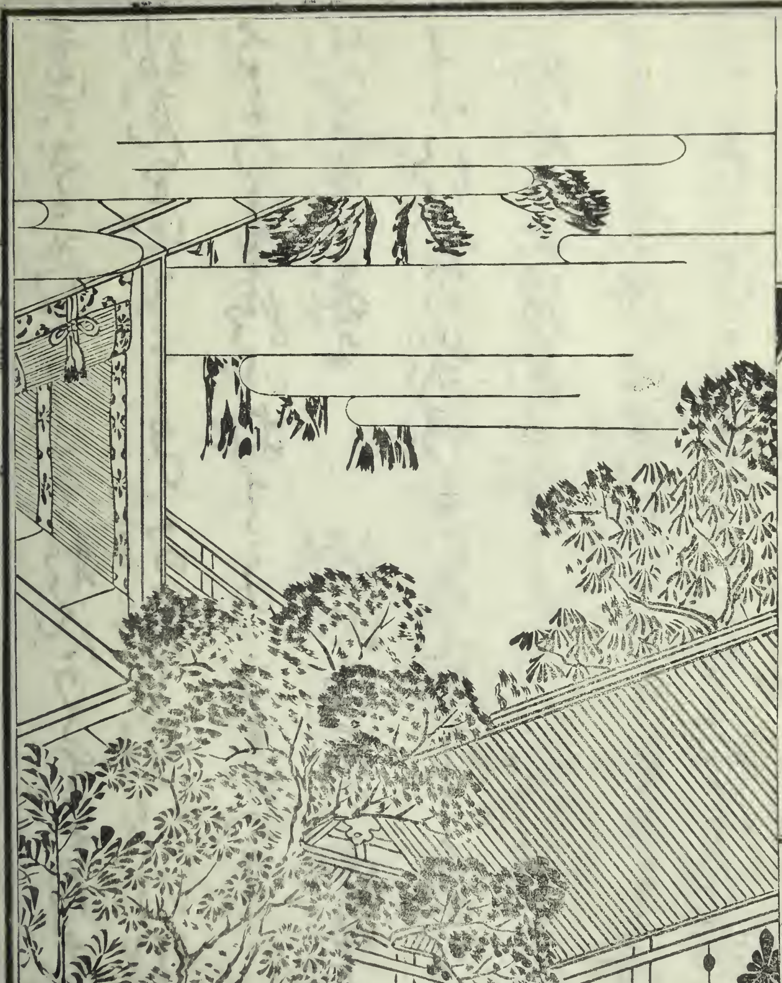
其この竹隠。いまだ声得の染まされなす

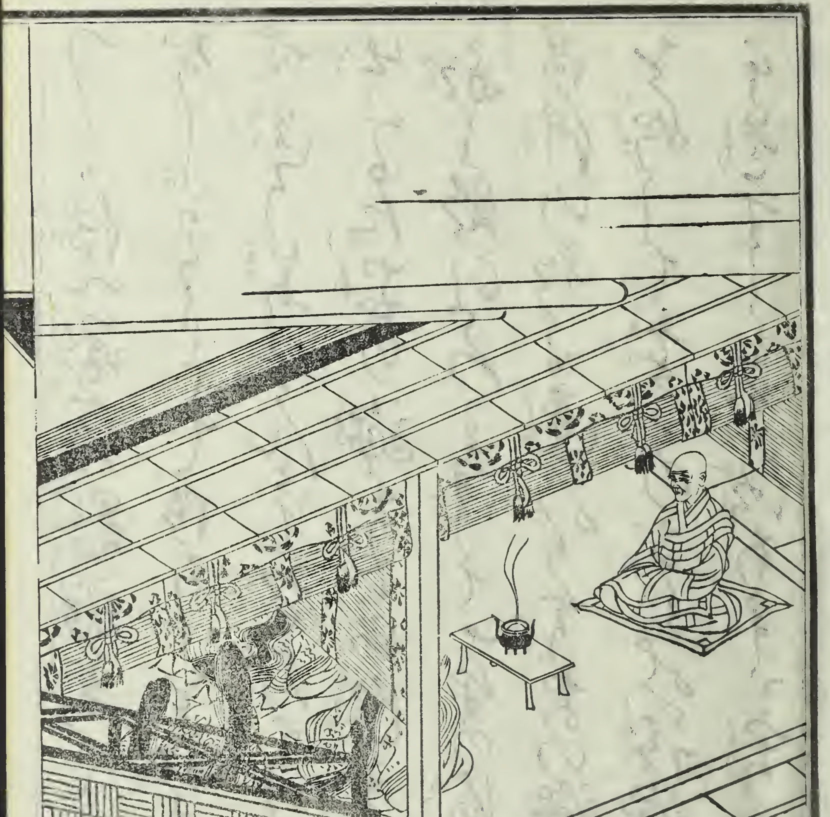
づしとて。諸天来(まうでき)るまの。思ひゝ引(ひき)とゞきかず紫雲(しうん)
ハ猛讃(ざん)に援(うは)り。山(さん)雲(うん)影(てうし)帝のぬ(ぶ)くまぞ見え
まゐる。人つゝ遍(あまね)りて深なごりぞしぶしゝて
我ぶど。説(せつ)法(ほう)のついでよの結ひさるハ。善(ぜん)哉(づく)寸大
陀ハ。露(ろう)しやう讃(ざん)せし行(ぎやう)業(ごう)人善(ぜん)と説(とき)経へり云(れ)九
浄(じやう)土(ど)の讃(しよ)言(じやう)楽(じゆ)の中よりまじハりて安(あん)陀(だ)ゞ
あまの前(まへ)の常(つね)に現(げん)在(ざい)せするぞの結ひさる。その道(ころ)。
陀(い)し。出(で)可(し)筆(すぢ)遅しよ来(じやう)しての志く。玉の粋(じや)

近年尾佛のちや。採婆めまるハ佛のお
好まこの承る如。深ま二おなりしハへり。されども
其徳の書遠へうたいぶりてハ。雨天壊れなは
ちのしといふべし。是この地をもうらん後
其の徳義の営なるをうんめのしてやぞて
是をまねぶんまのるべし。それ中よハおさ
好み擬もハ。やま込てまゆもなわるらん。
それらうぷすのしほしのすをさもつきてのバ法

上の一ちやうとうし蛇のごとくなるべし。金籠に
ハ転じぐゝし。魚目ハ濁泥に混ずるぞ。比て
比するもの也。数ハさることなりのしとのたまへり。
ほうじまゐりし。果てゝ。彼の山籠りの阿闍梨の者ハ
長髪。あるハ断穀。あるハ線衣などの行法を
ましぢて。是ハいづくの山奥に。草木を友とすまし
いふもの也などぼうりかまいひめし。いまその
せる修行のおきたまへり。実に彼の仙人。爪を

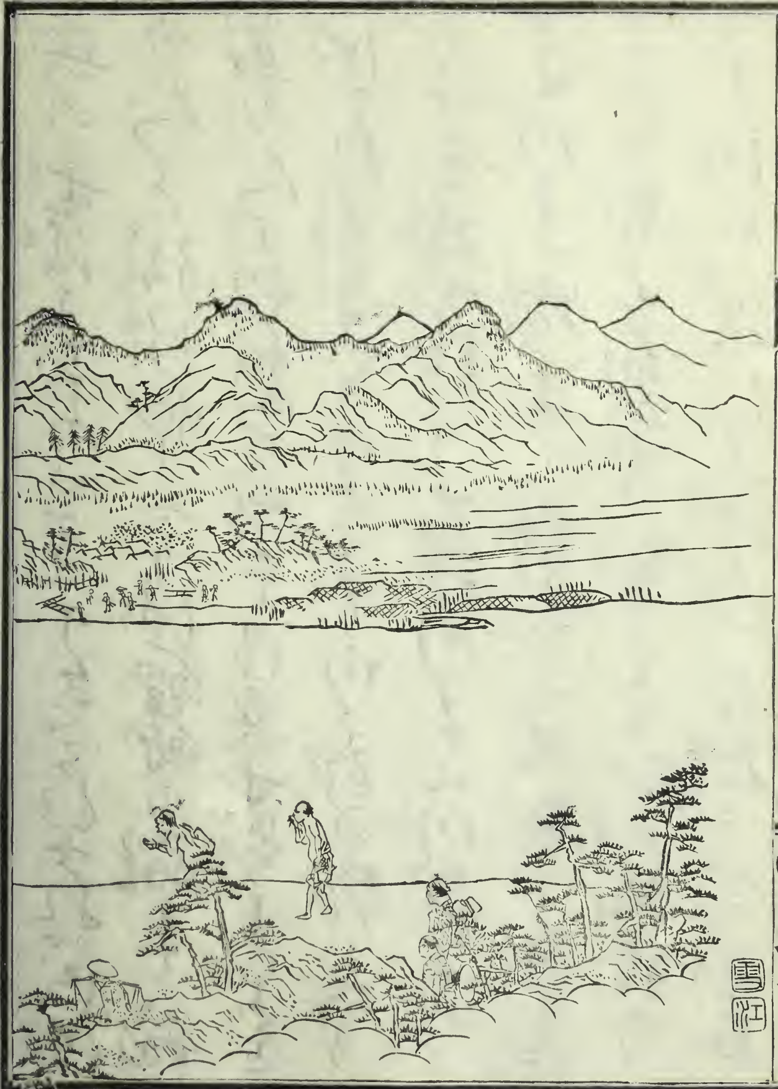
還ハざるに。いつのころ兆ん。のうちて五月十七日
綺尾を出て。こちらの縁ます。京都の園
寺まつりをおこなふ。于今このちまでおいて。
せん年。遊び　　仙洞御所の女房達の
まつり六夜の式訪ひあり。袖のしとや。その
簾中や女房達のくまじりおつまし奴
十九日。西師を発足を宿。日もと経て
茶屋の渡まつきおぬふてハ。路の中図向とい





つゝ津へ運送ん。[illegible]のめの
なし。あらじにて。[illegible]しを船のもまる
す。奥[illegible]ん。[illegible]より船之漕
出つるに。小屋の[illegible]するも。[illegible]迄て。出帆する
船に[illegible]つまりて。[illegible]の海[illegible]のつゝ
[illegible]の船[illegible]連[illegible]。[illegible]の[illegible]八[illegible]
[illegible]して。[illegible]金銀の[illegible]夜[illegible]。
[illegible]すしも。[illegible]あま[illegible]つゞして。[illegible]

有の善悪によりてまちまちなり。すでにしかなれば。汝が徒
のいふ弦に怪しみおもへり。汝理解の評まてそへ。評
身のへつぶ運命の如くそ。汝興ず。寸法ありてすむことを
聞ざれば。やむくことを得ずして。何の益の様にのぼり
て十字授けつり。古井川まで六川瀬のまの
どの何まで積んで。これづちに法達を連座
まのもの嶋図の縁までこの先揚げくずろすの
まで洲の縁ひき延伏て。十三授けり。三井


雪江

峯根の雲門をふさぎり給ひて。関寺へ入らせ給ひ
出て。十念を受しとぞ。藤沢の遊行は。清浄光
として。蘭寿上人を請じめ。仏族あまねく続き
給ひし時。これより鎌倉の光明寺に参籠し
給ひぬ。ついで又英勝寺へ。請ぜらる。神
奈川の寺を経て江戸に着き給へるは。六月
十二日也とぞ
清浄華院は。小石川伝通院の境内にありて。

享保のころ一人の名は。堀左衛門と云し
者なり。風雅風流の人蝦夷の善知鳥
をも探して深き仏法の地をもさぐる所
又人隅田川のほとりを逍遥しけるに。
或る丈六の阿弥陀仏を。軒下にたふれ家
らせて。その膝のほとりハ。麦茶などつくり
うりありけり。阿弥しこゝに住して此のあるじと
遁る人。楽法師の口出て。鈴しうろそでに。

さるべき浄堂ありて住居ありしを一とせ大風
にて倒れ傾きたりしのち。再興のすべなかりしかば
又幕をなかりし也といふ。何れの本尊を
焼あらびてんやといはれしを此がつし斎了料学
しらぬ人参りてゑんさいそういのりてのき
古仏一躰のさき。何をぬしとして請じ
まゐらせんやといはれなるも同じ[illegible]なる千手観音の
ごほつ立堂きて倒へて。おのれくの悪ひまぬかす

べしずやうに請じ奉りしとて。古語は
二十枚をぞ喜捨しける。学頭智門といふ人
誓て一寺の大衆に勧進して。力を戮せ
て堂の一つの念仏堂を造りて。又も尊像を安置
しまゐりけり。文化十一戌の六月。阿。請じて屋
じて悪事に尼はすゝきを奉りし時ハ。色
このるを六尺の仏場といふ堂奉りぬ。すゞ
ゆ。本堂狭うなりければ。前庭に出て説法し

なふ。奇仙群集夥しくして。旧とふるの地
まなきまでなり。今ところ浅草誓願寺
の仲槌文調といふ人深く師に帰依して。附る
お細絵をしれたるに。その檀紙鐵屋といふ
とふ学匠あり。仲槌の師に帰依するを
こて。いつしか帰郷の志おこりて常に師の
説法の席まゐりの廻なる或時に自分の力の及ぶべきする
つましく供養しまゐらせ何とその身をしづね

なりしに。風誉といへる人きかれて。常住持くして。
説法の会座にかゝるうきこそあり。堂ひとつ何
まゐらせ申されけれバ。心やすき事なり
とて。同十四年の七月より六間四面の堂一宇
をぞ造立したりける。今の古仏堂これ
なり。これよりして。都鄙の士女もおしなべ
とて。各々財銭を捐て。資具荘厳全く
備りし。さるにこの本尊ハ。むかしの識屋

の先祖何某。相州小田原にて。丈六の銅仏を
つくりたる時の。鋳形の像ありとぞ。歳月を経
て。そのまゝなる尊像を安置しまゐる堂と。
その子孫の人の造立せる伽藍の本
まはあれどかし。天蓋光座およびび一切
の荘厳。一時に盈満して。金碧眩くその
やうすふいつくしく。況はしの法ぞいつまでもある年
まは残照映り。これ堂を建立の時。礼

をる経。土をもてふうじけり。男女数多人其しるし
三行よなしびて。手紙にて土をもてふうじ給へり。其
さまあつらへ伝法の具の式のめぐらせあり。いと
めづらかなる事にてありし。そのころ京洛にし
乃佛工西田立巻をもて河の尊像の
肖像を剛刻せしめ。本堂に安置し日々の
常一字をもて。安置し奉りす。いまの
行者堂これなり。弟子本佛相承し舎

利をもて。肖像の腹内にをさめける。

兼ねすみ給ふ仏道なり。故に師の志にのつて。まさにつとめ此の勝尾山

みの時。いつのまにして。其影を彫刻きざむや。おもひきうて。力をつくす

に。筆なることはならず。これによりて。判をもて一百日を期して。勝尾山

にかよひし。日々。面像をうつしてのちに彫刻をなしぬ。元亀十年にして。ずふ

るにちかくよるに似たれり。今の本仏堂に安置なる尊影。一切衆人の

有縁の尊影。これ同兼にて此の家なのゆゑなるゆへしものなり

同年六月なるに。故あつて三縁山に登りて。

大僧正存応に謁をとる。源正欽嘉

新なりとて。清談時を移し。願くは永

この地に錫を留めて。衆生を利益せよ

立夢又　八。京四

へうし。なかハまふ小営(えい)中の名望(みやうばう)高(しかう)すまもと
るを。結(けち)縁(えん)ありて。霊(れい)像(ざう)円(ゑん)覚(かく)に秘(ひ)録(ろく)を
しうて神(しん)殿(でん)の御戸(みと)開(ぎやう?)帳(ぢやう)法(ほう)座(ざ)を
まうけ。御十念授けて説(じ)も説(せつ)法(ほう)ありて。
く行仏(ぶつ)はつらんし葉(?)も寄附(?)ありて拝(はい)礼(れい)
投(とう)地(ぢ)して宗(そう)家(きやう)を盛(つ)さる。おほしく廿二日に御伊(き)達(い)殿(どの)
の熱(あつ)懐(さう)の御館(やかた)へまゐりて豊(とよ)姫(ひめ)君(ぎみ)の御。う。
独(ちん)心(しん)勧(かん)堂(どう)とをしめ。内外の男女日課(まつ?)拙(せい)

受をうけしもの三百九十四人也

同年十月廿四日。一橋の御館へ請ぜらる。民部卿殿。兵部卿殿。宝蓮院の御方。其余御公達姫君たちのこりなく。つどひさせ給ひて。十念うけさせらる。この日神田橋亜相公の（御母後一位縁　同三日剃任）し。薨逝ありて。（最樹院殿と稱し奉る。）大相国御館へ請ぜらる。三帰戒を受させられ。日課六万称名を誓ひ給へり。此比

蓮徳院の君（大樹の御実母。従一品大夫人）御遺体ましし。留家

一心につとめぬれば。死をば枕べり
諍ぎしれるには。臨終のさうちなり。
念仏し給ひて来迎もまぬかれり。しかし
ぐほどに。はて地のごとくなるやうよ御身と
て。深慈念やおぼやうなるを給ひぬ。
翌月の七日。忽に唐掛を給へり。掛
後済薬の功徳より。数億三劫の
利益何ゝれきこのばかりの法隆にすくおう

清澄(せうちよ)をしめ給ひける故なるべし。これしの
しなざし阿(あ)の行(ぎやう)徳(とく)のうぢやく納(とう)あり。ひる
運(うん)悪(あく)みあつまれ生へ宿もとて。ふるきまつひ
きこえ。蔵(こくぞう)て運(うん)じ申させ給ふなりけり。しかの
しかりこのころ。師(し)を真(しん)仏(ぶつ)の御(ごく)よ信(あつ)がき
給ひて。法宗(そく)経(きやう)をなが(?)まいらせきまたなりく
り。その唐(とう)掛(かうひ)の日よりは。師(し)を拝(はい)し奉(さう)り
請(しやう)ぜられて。日(?)松(まつ)六(ろく)万(まん)部(しやう)を授(?)ちの給

けぶ。しれバこの陰鏡のまへのぼうを好し
こと。古き陰をわざしめ。ただなるぎる陰ゑ陽
縁なりとて。人にあらじかへり
陰陽寒智代殿。貞章院の陰方ぐるの
陰陽へ請ぎしれ於ふぐるん。奥は日課
を持きしれて。説法御請御あり。田安殿
ぞ有じめ。内外の元年の陰陽術も。ちやく
同じ陰さまゑ也。又。貞章院の陰ゑのうちら。

見えて清浄休居して。仏道三昧に
浴して。阿の肖像造しあへて。常に具へ給ひ
供養し給へり
文化十二年秋のころ。遠州よりて。伊豆
相模を経て摂し。伝通院の大仏堂を造立
せしは。八月廿六日なり。神奈川の駅より。
中原の大像を拝して。小田原の宝光寺に
島の長円寺を拝みもつる。下田の福田寺に

いつくし。しげれば清く[illegible]しく。
国府の御禅寺。穏[illegible]の正定寺。八幡宮の
[illegible]明寺。伊東の浄円寺。阿[illegible]の清[illegible]院
など[illegible]。いづれもおびたゞしきまで。お
びつしき[illegible]寺なり。[illegible]の[illegible]
民の安[illegible]なる。信[illegible]さるべき所なりしを
[illegible]に[illegible]なり[illegible]れさぞ[illegible]
しそ。代々の[illegible]なり。十月十[illegible]

菊池武保

禅門におもむけし。光明をはなつ一句をさづる。
貫首空誉大和尚の請によりて退。
禅室巡錫のついで。大仏の宮。幽閉せし窟に
て。懇に念仏回向し給ひ附法の芳嘱
悽愴として。遂に成就はなり。二老寿十余。
優人の耳をつらぬくだぎちり。侍
者阿与して後に申しければ師の給く。
まん念ごろく衣つ神し給ひつる光人満

面(めん)ハ怒気(どき)悪(あく)ハいておそろしき清涼(すゞ)めの
こゝろつきハ。さて親王(しんのう)の怨(えん)魂(こん)いまだ散(さん)ぜ
ずハ如何なるべし。何(なに)にかれ叡光(そくくわう)楼(ろう)鎮(ちん)
の利(り)益(やく)をもつて。かの闘(とう)諍(じやう)のしづまりしとの
ぞれ。末(すゑやう)に浄(じやう)土(ど)に往(わう)生(じやう)あるべきのしと。念(ねん)ず
申たる也とぞの給ひける
英(えい)勝(しやう)尼(に)の武光(くわう)院(いん)殿(どの)ハ水(すい)府(ふ)源(げん)公の
姫(ひめ)君(ぎみ)なり。そもやくより河の流を仰(あふぎ)

つゝしむべきことばハよき序なりとて。法
ちかふ請じ給ひける。佛薬のありけり。手ね
はし孝一世薬をんとして。これ悪事
う造給ひく。それもまん縁ぢをば迄
なる何うち思みて。何処めづらし。讃
有の菩薩の心地ぞすなるとの給ひける。
此尼公ハ何の心ぞする。縁能の誉あり
て。選擇集の私讃じ。このめでたき出すき数

とぞ申つたへし。これより二ツの浦を経て。西浦
かゞ。東うしづみの堤に清ざしれ玉
しをたつまして。営栄なり。涼船
し
まそし。錦あ川まで。海路を綿を経ひ行
り。浦より漁船数出きて。諸船を曳
ここ数のぎうなり。なを。伝通寛より八。
大基和尚は止として。紙ぎする。末の一谷
ぎりに。右は堂を綿見を経ひ行う。

この宮の地(ち)縁(えん)六(いく)葉子男ともうぞん数(ず)多し
と称す
下総国。下小堀(こぼり)の浄(じやう)福(ふく)寺ハ。記主(きしゆ)禅師(ぜんど)
の往(わう)基(き)なりそ。この町(ちやう)辻(つぢ)ハ。先子内(うち)尾(を)
りまゝ。この蔵(ぞ)安(あん)語(ご)もれし人なり。こゝ
子延三月のころこのまの請(しやう)子奥(あう)座ある。
こゝより當(う)島(しま)ハ古(こほ)うぬよし船遊ばバ。拝(はい)
礼(れい)しおりんとそ太(たち)刀(ぞ)持ふ領(りやうしゆ)の田田殿(こう)

も。河を共斎の縁り。所ゞ船を出して。
小つん河を渡さる唐崎の神領の内八坐
論王当河して。此岸を蹴しめ。河
を迎へまつす。縁岸の人を押まて。
河の法施を以て鳥表ちつて異よりる京。
厩説あまさし去ても楽何ぞれば導し
て。神前よりて法楽をへる。禰宜立
原東の敵そ。生息をて来通しつるた。内外

の男め。招ひてしくいでゝまく。十房やう
く。むかし比叡上人。権禰宜治部少輔
の得度の後御でゝ。仏経読じのちハ。
唯一のと形乙羽よりて。ごミ頭の母孫ねんうす
あり今るまて陰の比ま於おまで。十房の弟
縁ありしハ。いとあハれなりとそこころ
世与移りさんしあへり。又二月廿六のこ
と形りき。五百日。又桃の浄国まの

請(しやう)屋(おく)じ住ふ住持(ぢゆうぢ)の主人ハ。江戸霊(れい)
巌(がん)寺の一臈(ぶらふ)職(しよく)なりしを。請(しやう)じて此の寺
住持となしめつゝや。ほす鍋紀(き)行(かう)して当
こゝに住(た)まし事(こと)しけて。やゞて名を徳(とく)海(がい)と
號(がう)り。弟(で)子(し)の数(かず)も入ぬ。大旅(おほどの)の愚(ぐ)昧(きやう)ちふ
しも。こゝの招(せう)住(ち)をこの寺の住や。三
月ちかふも住持にかへる
回三月廿日。北國行(ち)脚(やく)の途すがら。往(こん)宿(しゆう)

善光(ぜんくわう)寺にまうで詣(まうで)給へり。請観音経(じやうくわんおんぎやう)より
経(とう)を玉へともとらんあり。この本尊(ほんぞん)ハむ
かし月蓋長者(ぐわつがいちやうじや)の門園(もんえん)に。自現(じぜん)し給
て五種(しゆ)の悪病(あくびやう)を退治(たいぢ)し給ふ一
光(くわう)三尊(さんぞん)の霊像(れいざう)なり。百済国(ひやくさいこく)より渉
日の本に渡御(とぎよ)まし〳〵けり。摂伏(せうぶく)
毒害(どくがい)の悲光(ひくわう)。末法(まつほふ)万年(まんねん)の暗(やみ)を照(てう)さ
せおハしまする。のうづてなり。

薬びらき詣させ玉ひしその旅ごとに
金の字族競ひ来て。浄堂の内外。鐘
その地なりし。この地群集は常
のまなびもどうくまでのあり様へ。絶て
つらやまなづばる。古楽のものふ中何へり
きうくで。寛勅をもいつまでも。藤りく
ころ或夕まのあたり霊像しろ宮内より
来現しなりては。あの両手をのべ給ひ

今迄ハ。本尊その身をさへて一切衆
生を救ふを縁へて。念じ奉りたり。
やがてその苦中の火をたまひぬ。此
作足微塵にして。人形のめぐく。至ハ
二宝ふかうけづりの小割に彫るやうなりと
覚え候と。能本佛に縁を結び給ひき。
善光寺の古縁記にハ。本尊にあつ
まりおはしまし候。其身結べて

まで。後のまゝは。さて勝劣おほく。結果をさとし
とのふ。男しかばしを。法の有縁のつま
のたよりにおほかれど。ばかれともみじく
めづらしからん。抑霊山は四大の経典
辯ふりて。苦しきにまかりあらざれ
ど暗動のあやまりて。阿頼の法利益
をしめしたまはん。ふかき法の不断や
申べき。二月堂のすゑ一両の像を暗

差おかれしてぞ見えたる。東大寺の実忠大徳のをさめ給ひしよし。又善能釈書すと有。やごとなき仏像をハ。かくる勝地。時としてハ。何れの迄もあらまほしきあるべきよや

六月八日。戸隠山へ登り給ふ。徳善院より案内しけれバ。奥の院の五久保より中院まで四十七丁。中院より宝院まで二十丁。これより本社あり。社ニて法楽し給ふ。法華

院順庵和上よび妙行院。智泉院などこれ乗

六万遍の日課を勤るの首。山ならく毎

丈夫竪てきよし。ともすりて。この松に授

らず。彼後に本仏にかへされてよし。伝檀

現八[illegible]の[illegible]なり。その霊屋にて。

親しく問ひゆきて。十念授け[illegible]ぬ。夢

まことやかれそれより。[illegible]ひし[illegible]のさま。

[illegible]夢までは。あらぬゆめ[illegible]なされぬ。

この所ハ。慈悲の霊窟なれバ。さる事に
申されしもやと。本仏ハ常にまつれき。
七月二日。諏訪明神を拝礼せしより。社壇よ
座具をのべ。四部経所拝へり。三縁の
内の安蓮社作礼之人随従をうる。寂
作阿弥陀仏の文字の名号塔ハ。この
人の作する所なり。唐隆西翁の住
金とて。銭を捨て。漁船一艘流息さ

さつるまの河り。まつ鰻魚釣なり。一日とゞめ
つる人もあまたあり。そのうなぎ釣の。一日に用る
ところのつり針の数。二千
四百本なり。其僕をともなひて。その
一日の漁事を休まずするなり
すべて此あたり也。
諏訪の湖にとても讃度の食つとめてへ
殺生の業縁やむときなし。然るに此の
浄土の極楽。のぞまでふ放生の業を修す
るまの河たいするなり。其国には。まづ
さまあしきとゆのきやうぞなし。へくますとし

何もし奴

浪華江若傳中巻

ほまり者伝　六

徳本行者傳下の巻 [illegible]

前大僧正。飛州高山大雄寺の請に應じて法筵を二七日のうち。結縁の道俗數をしらず。かくて相図していつしか此の拙に澁まゐらせず。願くハ後の世までも傳へて。結縁に備へんには。名號を乞申さんなりしかバ。幸松倉山の自然石有り。これおろして揮毫をなしつゝやとて。其後をなすにも

きこゆる今の世バ。善方便なり。しかるをさまとの玉
ふまぞ。やぞその石門也ず。やまなき
するにをこへるに長さ凡一丈四尺五寸。幅四
尺余。周り一丈六尺余りや。歩石の
かりをそ。周り凡二丈四尺余。長さ一丈ま
るなり。うづまき名号塔又ちまたへとる
此名ばうるかたを浅間なる山坂
にも今こる事なきにばの学者おほくの

なさゞるときハ。夜ハ日につとめて。運筆の力を
尽しける時ハ。たとへ書しところの法
にあやまりて。水田中落大奴澄七の床ニ
埋しいく百句となすべきやしらず。ミ蚊杖
残たるまでも時勢にしたがひて。進退の
ミな宮居しきりに挑もうのゝべきぞ
とのたまひし。かくて力を得て。其つきて
念佛しける筆ハ。その運ぶ調の節を迎

しばらくの間時を経ずして水田を得たり。
人々其力を得てやがて古の大借を
まぬかれ末々。ニハ猶ゑんの安楽に村をすゝめ
卑属の人を撫従して下にけりとせん
られける。北国村落の間に在りける名郷に至
りとぞ。かゝりけるその地を発足して
越中国。富山より。かの金沢に至り宿をとり
流二三日を経て。また渾が事を見せし

経あり。その法来(ほうらい)ハ山中のある院(ゐん)。送(さう)来(らい)して臺(だい)に

のこあり。本(ほん)宗(さう)する人其(その)数(うず)もしらず。全(うつ)

在(ざい)林(りん)の手田(まへ)に鐘楼(ちうろう)。同舎(しやてい)斎(さい)記(き)。伽羅(きやら)を

供(くう)じて十念授与(いじゆ)し。六万遍(べん)の日課(くわ)を

授(ちう)かふこと至て今(い)不(する)勤(ぎ)の大念(さいねんど)す。堂下の

極楽(らくらい)なる。あみだ御影(いは)の後(い)宮まします擂(すう)仏(ぶつ)あふ。

浮ころ高山(とやま)行(ぎやう)の一族(ぞく)のまつ詣(まうで)る所(さい)

観(くわん)る。万(だい)泉(せん)をさへて。長(ちやう)円寺(ゑんじ)へおもむき。城(ゑち)

後(ご)の糸魚川(いといがは)善(ぜん)導(ぶつ)寺へいりける。是より二ゝ面
ある所(さいせんど)の請仏(しやうぶつ)を調(ちやうり)して。かすかに白江
戸小石川の左に筆す。編録(きしやく)をなしける。こ
の阿比(あひぶ)の請仏(しやうぶつ)のよし。慈(じ)あん。海(ちあび)十六の虚(しよ)の[illegible](いんぐ)。知の
るいふの名[illegible](ごやうあう)の[illegible]の連(ぜん)筆(ぴつ)。細くし刺(さい)髪(もう)
日課(にっくわ)の経(きやう)念(ねん)。六(ろく)千(せん)萬(まん)なるをしらず。今(いま)
ハ是大黒(だいこく)をいんずる
に代(か)ならず。此の[illegible]。一橋(ひとつばし)民部卿(みんぶきやう)殿(どの)。治

不予（ふよ）して。院の御寄附（きふ）をまたせ給ひし
ことぞの給ひを給ひて。是八月廿八日のく
給ふを玉へり。臨終（りんじゆう）いとやすきに院誓（なん）
しきいのちをとぞ。ちごろ念仏の御勤（つとめ）おこ
たりを給はざりける御志（こゝろし）なるべし。法通（つね）
善（ぜん）をとて。竺（ちく）父の教（きやう）を好（ぶめ）あり。ちく弁の
三途（さんづ）などの中陰（ちゆういん）の間。二言津（ざ）の百萬遍（べん）
をとぞ勤（つとめ）し玉ひける。御持（ぢ）弁の御誦文（ぶじゆ）すゝむ。

御免を請じ申されけるハ。目出度まつりを行ひ
し其志を酬ひ給ひしを行ふなるべし
一橋前亜相の御方。其の兵部卿殿の子なり。此
をもて行ひ給ひければ。帰府の後。日数を
も経ず。請じ申されけり。ある時戌の刻を
過て後も大師を常に出でらる。法話に数
説尽し給ハざりければ
枕す。十月十七日。盛福寺の覚観院の庭に

一条関白
政通息女

清水参詣ありて日課六万称名を誓ひ
にも怠らず。阿。女人往生の旨を尋ねける
に説法し給ひければ。法洛陽流しざる
らば。いつとなく年月を送りぬおもひ
つゝある程に春秋を也する
にその頃其の時の歳なりしが。荒
歳にして望て利生あり阿弥陀つれなきに
やみつゝび禅尼の作庵に帰敬せば

やよおぼし今もといふはもれきこえん。仏
俗おもひきりて。いつのまにやら法地まうでめ
やまもしらんとおもひあそびてまて。一樹の蔭
おのの法力には。流転輪廻の善知識になどまし
でよくぬくもりばしいれもひのるといつの
ぞいま法兄おもひなるべきうへそ。やく
をつのいま浮川藤たちとつるのもの法
生よしてそ。歳七十余までいきおもひつれど。

夫までハ鹵しやがれおばさんなあ男が。いまゐ二
子の時ぶハ。六郷何しも候し。さる宗一中丈
より鸞洲。大基へ申させ給へのしと堀
上皇土代六条の比評へ。懇頃御られぬことゝのゝ
り大臣所より加賀ゝまで。菅鶴の一行院
さまて捺や世蔵場と言めり。河の行代の地
と知し丸もゝハ。つましけし菅東なれ
掃作にのるべきよし申させ給ひそう。河ハ

業ありつ龍女浄の境界まぬかれまさバ。
中将姫のみあまくらさ縁しれゐのべきのし
をかしねど。やどり離し善明もなだし
雑く。仏族の合葉也さう。縁のふ粧のく
くて。介さて道す魂なとどまり殺しぬ。
此し佛像る出縁もなう。粉池年尼
佛のすびべ像もふ来現しさふやうふ。
ようくびいひさるぎて。作の浄楽いつず

この形りをば。こゝハ文化牛の葉。十月の
ころなり。十月の祝句。以紙の蓮華誓ると
すじめ。禅出大善寺のむすびを寛の
請じ招ぎたまひしかども。その意にまかせず。
いまだ当の禅に。津の国尼崎の寺と
て。津の国をむかへていつの頃より。寺に輪
の名僧を嗣なり。これ元祖大師の法
跡まして。これの名号とぞよびける。

そのころ先祖深雨へ。大阪の縁ありし
より。第一幅の上段に。正讃の二字を
歌記し。下には四字の経偈を書し
源空の二字を題す。深心廻向心の幅
水揚げさ海なり。法然申して。大
師の因縁そのゆかりし子孫なればとて。
六万遍の日課を授与し。三尋四幅
まといへる浄影一幅をぞ授与つてのこされ

けふは
霜月中旬にいたりて、いつまでもおもひて。当
麻の無量光寺にて法筵をひらかる。住
持他阿上人、宗祖に帰仰せられ、六方ぐん
の日課を摂受せしむ。此日雪ふりて浮て
寒さひとしほなるに。堂の内、蝋燭群集の光
俗。いつまでも色なくて、続々縁
なり。戸塚の清源院の法会ありしが。剃

何の作法ぞや。しかも男女二百六十四人なり。郁
奈河の金仏寺八国霞の菩薩雲霞のごとく眷属
つるを結び、雷電の聲見え、所々に鳴渡り
こゝら菩薩雲集するを。放下の僧衆をも同道
く頭巾被りてそのつる形り。これより
より極楽の八日までぞ。けふ又蓮華部にて。
搖化し給へり。三歳の菩薩。日暮ひらき
めぐらず。剃髪の作法にてしめのこと。

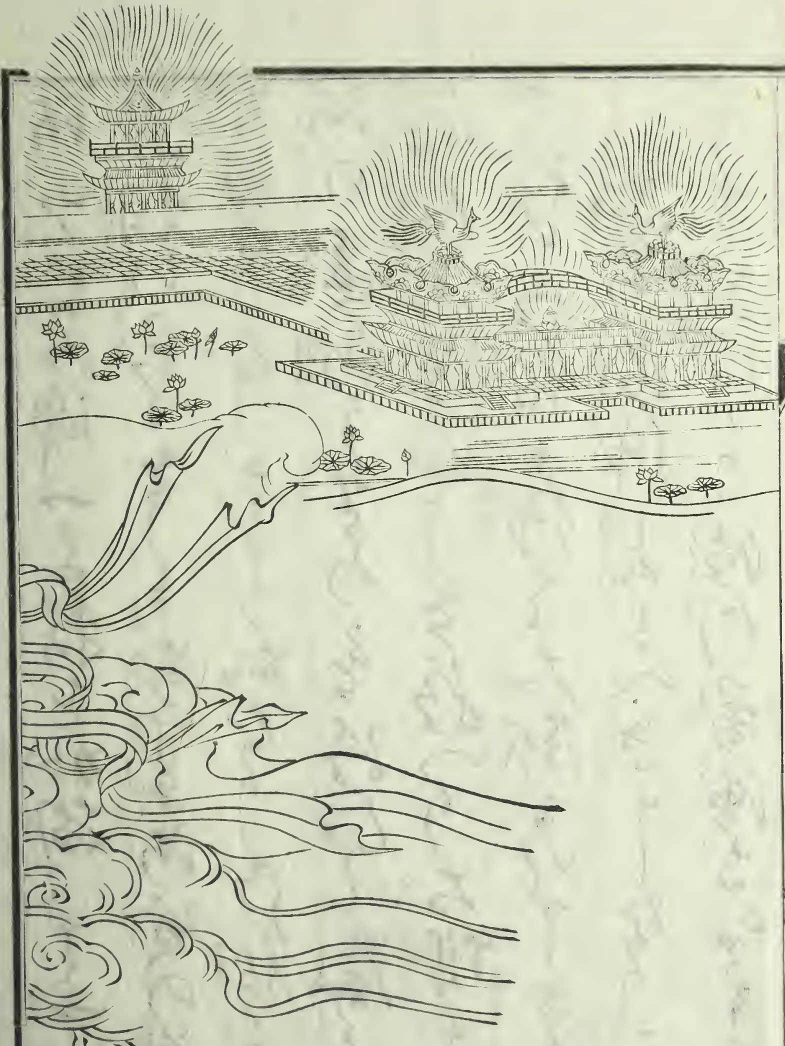
数寄の人なりきとぞ
小石川伝通院ハ。寺を柳営の霊所となして
蒼き御廟なれば生気絶えず僧侶多くて。くまを
国し衆寮し。千部経を安置しなさんと
て。去る年の十月もとめりちを堀えさしは
ひもしも。百三銭をもて励み群集人力を尽
しそされば。十二月廿三日ハ。仏殿厨坊
を始め。両門へ至るまで。残ところなく

六瑞あり。輪璧図を拝し。縮[illegible]
を彩すと
よつて五寅子。九月二日のころより。阿
年来の病疾増長して。音楽枯渇
ちうす其弟子の中より。法[illegible]をすゝめやと
いつしか。服し給はず。九月十五日。月没の刻
時到りて。弁のまゝに命ずまゝく。いまより一七日
[illegible]あり三[illegible]を[illegible]ゆ。[illegible]の[illegible]

うじとせり。廿九日別に御経(ごぎやう)を誦(ずいり)して頌(えり)を受(うけ)
仏舎利(ぶつしやり)を弟子(でし)本分(ほんぶん)に授(さづ)けらるゝ時のやう
やはく。霊(れい)あるめ(あべ)。遠近(ゑんじき)の一瀬(べんざい)に人あふる(てん)この寺を
開(か)眼(ねく)しぬふをらんでつきし。つまり此一宝(てんそん)
ともし。その宝に珍重(ちんじう)なるべし。その経
二十六日。まつる弟子のその経にて。霊(れい)生(しやう)涯(うい)
大師(だいし)のつね(そうまく)に所持(しやう)をもて。自ら行(ぎやう)持(そ)の
うずみたり。湖(あんぢら)はる霊(れい)ひとしく。湖(うみ)の(めか)にはる

修かづし。高學遠慮。その身に一言ある
事なし。是ぞ君子の事。此比叡庭訓にして。
謹でゝ修身守。天性正の應答にかなふ。
必ず今なれば。猿の縁おかさわりを致して。縁等
およびぼ。曲身の乱続を仰て。日々安
るを。報いの不俗を陳へして。格じ。さるまた
すべて。安否を知もあすの。日夜つゝあることを
好し

跡。吾妻名所一手数をかけ給て一橋あり
亜相の居宅あり。其東河岸の芝蕨
なほざりならざる施なり。浅草藪より也。
陸の妻連河みぢかうを経て。鷹野
鮮人系などおしきを経つる大塚より。
一橋の湯館より郎て大蔵よりさるか
かお給の名所上ゝ立るべきよしなり。これは
まりて。西塔より浅川万徳寺まて浅



せしめ給へる。この堂中の貴賓数多く詣ひ給へり。此楼在所の楼閣つゞきて来臨し玉ふ事あり。あるいは雲深くまでて詣ひ給ふるありて日ましに絶ゆることなし

同月廿五日。京都の仏匠増田良斎の造れる真影の木像来着す。此像を迎ひて。それより後に利益清浄を安置へ譲るなり。されば前祖利生験を違ふ事なかりし

とて一枚起請の文を繰返し讀玉ひし。
てそゞろに坐し給ひし座右の佛像ま
ゆづり進。これを遺戒の記とぞなされ
ける。これより手跡を附屬の眞影
と申。傳へ侍る形像なり
十月晦日。河海尊堂に起座して。お化を
まじめ、語の法界の要〔詞〕。そは三寶
と。以來の一切の善根を。上八十九萬一切の

三業。下ハ六道の衆生を回向せんとなり。
等讃ハ経文をいふ。集ハ集記。雑鈔
しるし給ふ。経ハ心経をいふ。若ハ書写
有無ハ仏の功徳なり。来迎ハ
浄土往生仏願観世音菩薩と大勢至菩薩
極楽の為に一切衆生の其まい舎利弗阿
羅漢等諸声聞衆の其の大衆一切
縁覚衆無数の四王天竜八部衆

光[illegible]神祇(じんぎ)。願(ねがはく)ハ法(ほう)楽(らく)ヲ[illegible]威光(いくわう)[illegible]
仏(ぶつ)功(く)徳(どく)及(およぶ)一切(いつさい)善(ぜん)根(ごん)ニ[illegible]一切[illegible]ニ
寶(ほう)殿(でん)[illegible]ニ[illegible]六道(ろくだう)衆生(しゆじやう)無辺(むへん)[illegible]
[illegible]一同(いちどう)[illegible]又[illegible]ニ[illegible]
法(ほう)ニ[illegible]　今上皇帝(きんじやうくわうてい)福(ふく)[illegible]国(こく)[illegible]
[illegible]　皇后(くわうごう)[illegible]　皇(くわう)
太子(たいし)[illegible]ニ[illegible]ニ
[illegible]百官(ひやくくわん)百司(ひやくし)武職(ぶしよく)[illegible]

延安那子穀曲鎮て臣地久山白羅湧
曽ゝ歎生して元来羅図随縁動
仏性輝ニ仏日光明照耀ニ輝と四向珍
て。誓願仏説へり。是ぞ生涯の想面之
向有とて。彼出しては詠歌を吉事ふ
この曲は。浄土の荘厳宮殿まに眼前あ
しらず。浅香の真の曼陀羅中との給へり。
まつ天象なぞの法楽として供せうし

須磨の古海も見ん為

四月六日暁のころ。阿の町いくしら白浦東堂

の日なるで。和阿弥陀堂寺也。元祖の作

滅也。又此頭に面細有り。弘法寺座具

の名なりしもなりといへず。しより

て。宝物の像の等身をもみんやこそ娘て

法楽に平具し弱つり。上さきに沈府の

教にも傳るにつれてざりそり。いはゞ

きんとて二尺ばかり講座をもうけて音じゆまつの
しより硯出して。料紙とゝのへていつみまで
も備そり神力の御経ハ。精進つくのし
しれざれ。何ぞいゝ何の労のつきき稽古
阿ざり抄。ろの書割。再度きてしめし。
ろも和尚の。ろ風味いつのもとの人をめい。
日霧のめしとぞ声たまひそる。筆硯
をとのつまひて

南無阿弥陀如来浄土安置の根をさぐれバ方
さらに命をとしまつべきならは。そのもとおひて
筆をさ抜ぐ。菩薩としてお仲ぬ。念仏の
こゝろにおしへくはりをかへりとおもへど。
御前として給させ玉ひぬ。像の文殊
え成寺のゝし十月六日塔の中軸や。
粧ひい六十のうへひとつころもさし延へ
り。鳴停法幢位ましまり。河の日ら菩

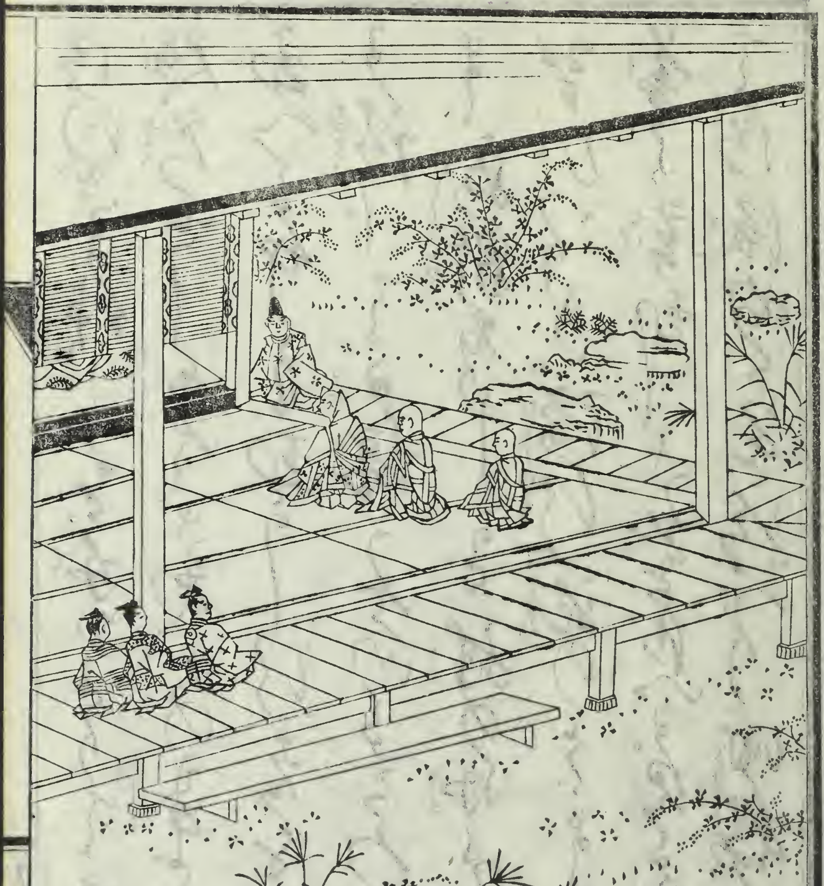
才子の失を知らん。活眼撥つる人
うとこしなつて集記の律を学ばん
浮梁の弊。世間浅陋と侮り笑ふ。いまさら子
おもひあいそくれて。行俗奇珍にも綴
老婢を娶するがめずてん鄙あひなる
田舎者ちまちまのうすうつす女郎りも
活達詞ハ増上大僧正曲海大和尚
ぞつとあり下姫の活爲まゝ

大慈菩薩の法語を挙げて。即是阿
弥陀仏と唱ふるを称へる人。人心のけ
いよぶちて思侍りしとぞ。此日頃の四面
群參おびたゞしくて。本堂の法燈を通
来すること。ずいぶんおより下道給
ひけり
又西二条の林。五輪の塔を造りて。蔵
経を納むるつまあへぞのり。広厚これ

まつの名ふ。揚弓の吉田喜平次。浅草受台
をさきとし。海舟の運送し猿楽し
まれり。尾張町の麩屋二丁目。一丈ぞうろ
なるべし。呉服の小橋屋清兵衛あり。福
銅香炉一まい。同所池田屋金兵衛あり
又坂七軒甲甲のくし。八阿の七面足あり。
かきの木清親王一躰の本尊を古渡と称す。観室あり。深川
行者法東堂の地に書き名す。扁額を掲ふ

すなはち内陣(ないぢん)はのこ。追善(ついぜん)の法(ゑ)こゝろ
ざしなりとぞ
おなじく浴室(しつ)。又観(くわん)象(ざう)法下向(げかう)の手おしま
し給。又隠子詣(まうで)さるひとひて。行者(ぎやうじや)
の徳(ぞく)前(ぜん)あるそ。第(いく)多(たび)音(おん)声(せい)あり。煙霞(ゑんが)
またおなじさま也。法(おん)高(さきのち)本堂にて
を御一座(ざ)し玉ふ。群(ぐん)衆(さむ)の道(だう)俗(ぞく)。
三(さむ)編(き)十(ま)五(わむ)接(ざう)せしをおほしき。其(かん)頭(づう)の

ス 二十


雪江

清川が手に傳りしを。手をとりて清彦に
姫君をきしめんて。さまざまの事どもをと
あへる母にまかせ。君のしいれきさらぎ中
に従ひて。都に帰らんとするころは。ますらを
まじぬ事どもありしのぞ。心のかぎりをつげる
おもひいりき。隠みの詠のとぢまで。墳
墓が畫ありしうちを清へ見る事まで
て憐歎ぬぐひを給へり。河邊するまで廬

数(すう)ぐのうつりかはり。夕陽(ゆふひ)のうつるがきえうつりゆく。これへ
らを経ひぬ。ちよの苑(ゑん)与(よ)太保正。このごろ
い。まだ人まさぶの法補佐(ほさ)をぞつ
とめられき。こゝに天保四年十月二十二
日。大患をとげゝるを経へてあの
よし。のちみきこゝろ。河の産殿(さんでん)に悼(さ)一度(ど)
なでいかゞざりしを。あまぞなすれ
さかえはしまはせぞ。このつゞりまめの

弥山影針　さるへき清宮猿まこそ

深草にも老僧への書跡

黄蓮院殿寒源氏物語

一枚起請文

もろこし我朝に。もろ〳〵の智者達の
沙汰し申さるゝ。観念の念にもあら
ず。又学問をして。念の心を
さとりて申念仏にもあらず。唯往生
極楽のためには。南無阿弥陀仏と申て。
疑なく往生するぞと思とりて。申外には
別の子細候はず。但三心四修と申事

の候は。皆決定して。南無阿彌陀佛
にて。往生するぞとおもふうちにこもり候
なり。此外に奥深きことを存ぜば二尊
のあはれみにはづれ。本願にもれ候べし。
念佛を信ぜん人は。縦ひ一代の法
をよく〳〵學すとも。一文不知の愚鈍の
身になして。尼入道の無智の輩に
同じうして。智者の振舞をせずして。

唯一向に念仏すべし
為証以両手印
浄土宗の安心起行。此一紙に至極せり。源空が所存。此外に全く別義を存ぜず。滅後の邪義を防んがために。所存を記し畢

建暦二年正月二十三日　源空　在判

右一枚起請文ハ。安心起行の鏡なりとぞ。

御接待の節ごとに必誦しけるを恒規
とし給ふこともいよいよ觀修を勤めしげ
りける

徳本行者法語

りとも。いつも説法の座へまいりても衆
好くし。我がいふ事をきけバ。口に浮世の念仏
あれバ。このまゝ念仏申すなり。極楽往生難き
ぞかし。今念仏の唱へやうを教へん
とて。師のいはく。南無と称へられしバ。心ハ
ある時。南無といふ字を唱へられバ。心も
無とぞ。阿弥陀仏の四字の名号ハ心回

さまたけとへらる。続まりあて。南無となへらる。念ごとに南無と申す。阿弥陀仏とよばるれど。念々つ阿弥陀仏と称ふ。陀仏ハ称名しさうまうす。それより後ハ。南無阿弥陀仏陀仏〳〵とたゞに称へつゞけて。声をたちて。念をすれバ経念仏しけり。又日に六万をとなへますりがちまと称ふるハ。念仏とハいはれぬ

なり。ほまれなきぬ折り。迦耶(かや)無(む)の空(うつ)す
ら。贋(にせ)の金(きん)銀(ぎん)ハ通(つう)用(よう)もなきを。まして
世升(むしやう)濁酒(まいぜん)の國(くに)へほまれきんは。なほまりて似(うせ)
かるハ通しぬぞかし。六やすど(ど)つうすど(ど)かけ
てる。とはいぬるきづし。五(ご)劫(こふ)思(し)惟(ゆゐ)。兆載(てうさい)
永劫(やうごふ)を経(へ)て。万善(まんぜん)万行(まんぎやう)具(ぐ)足(そく)の六
字の名号なり。観(くわん)無(む)量(りやう)寿(じゆ)経(きやう)に。具(ぐ)
足(そく)十念(じふねん)。称南無阿弥陀仏と称(とな)へを結(むすひ)

ぐる。その愚足(ぐそく)とハ。ものゝそろハざる事なり。されバ仏土(ぶちど)のそこハ不具足(ふぐそく)なら
ずや。一念仏を得(う)るもの。ともの念仏ハ。これ名体(みやうたい)不離(ぶり)なり。仏果のまゝ如
あらざれバ。六字名号(みやう)なるが。一仏(いちぶつ)成就(じやうじゆ)然り。それをうけバ。やがて仏体(ぶつたい)を損(そん)ずる
まなりぬべし　又四足(しそく)欠(かけ)ハ良医(りやうい)の病(やまひ)をむらく雲(くもり)をも説(そく)が如(ごと)し。服(ふく)すと。服(ぶく)をさゞる

とは醫のとゞかずと見れハ釈尊
涅槃の夜の御説法なり。念佛往生
の法ハ九品の法のぬし。阿弥陀佛ハ。
浄蔵菩薩の玉ひし。十方衆生を一子
のめぐみ深く迷ひ。十方諸佛の捨
玉ひし重病人と説ぶたまへハ
いのちを終りたる凡夫ハ十惡
をうしなひといへる願を發し給ふさ

てハ十方衆生の三界二十五有に流沈
すべき病根を断絶せしめんとて五劫
の間思惟して建立したまへる霊薬には
末代の凡夫の為なり。しかのみならず兆
載永劫の間。練りたまひしゆゑ
しこ。無碍の霊薬を服しぬれ
んめのハ六道輪廻の病根を切。往生
極楽の国の果を得つべきいはれを。

まして十劫の昔。法蔵正覚の暁。
功徳宝聚集し給へり。大経の本願成
就の文これなり。されば阿弥陀の名
を聞く。口に南無阿弥陀仏を申せと云
爲の功徳を具することなれば。何
にも名号の功徳は。かけず具す
つきこゝろありまして。六字の名号は。
不可思議の功徳なれば。この陀羅尼

きんきやうなどゝ。この薬味は功力ぞ河の
功能ありやなどゝ。ひまでさぐる輩に。
無雑時をえらばず。たゞちに悪道
の難地に堕落し。つゐにはかなしや
いやの霊薬も。服すべき便なし。本願の
阿弥陀経。手をつくして。法に苦毒をう
うけもつべし。賊ならば。宝蔵の山に入りながら
ら。空手にて帰るといへる是なり。さゆ

のおもし。毒を三毒と云ふなり。而
食縛はしんまつこそ。稲は食ふべき
なれし。製薬功能の評定に。光時を
いたづらに費す事なきの嘆
凡会化するほどのものの。ほまをある
なき形りにあき化する者ほほきを
ずば。両覚をことしと物語いふ。すでに
仏ま奉らし なれば。高外天河ぞこれ

を説んや。況や釈迦仏にして。仏
の御法なりといへども。すなはち三界にめぐり
これ仏の法縁ぞかし。されバ
凡夫なる者も修行すれバ。六方
諸仏阿弥陀ゆゑに久遠長劫のおきをのべて証
誦しなりん。釈尊のまへに居なりつゝこの
法をうけ身を属しつべき。ことをまて
知ぬ。無仏のすゝぎの身なれバ。法生説

忠ならざることを。唯よろしく一
心に主君の仰を肝になして。えらびに忠
いしくも忠義一途つちがひを遂べし
まくの目。ちこ人のこと。人の法則は。平生なり。
一すまますつ修練ちると。この事深く
無量ん味すづし。おし人一すまふこや法
修なんとおもしく。安心を合ふにあ続
しぬれバ。法縁もよつはまりし言なる

事好のるべし。されバ修行ハ一途の自在なり。欲く思量りて停滞すまゝ励み勤らるべし。安心起行の用きを綱りして未さバ。大綱の總括の旨を阿弥陀如来をたのむべし。名号をハ。即この綱をたぐりて行なり。再はますます定まるとも。安心といふ目標をさだめて称ふるを。起行といふ。この起

行の程をへてゆく時ハ。是非より
極楽の七重羅網をつらねて。は
此の世の娑婆へ行ければとも思ハず。浄土にて候
往もと探申まじき也。すびし南無せ
阿弥陀仏と申す人ハ。因果の経。
極楽の往へハ行べき所なき也
箕ひじゆそは同じ念仏なり。然れども
いづ。之ごとおなじ。今刻をたべ。同じ

月日を送り。惑ずば塵芥もうるされ。
然ば太平の御代に住なるを。念佛
をもろ。何じ申すぞといふハ。佛法の
修行に行きつくしぬるまでし
みな。そのごとく。済度とのふ佛の行
者が出て。鞍尾も二階堂まで念
佛会有り。御経誦もはやるまゝ
ぞ。やがて浄土を宗とする者の安心也

是(それ)より其国(ごく)の竹(ちく)の中に来(きた)らず。木(き)
行(ぎやう)なり。こゝをすゞしくあらしめ四方(よも)や
まの梢(すゑ)のゆるし。或(ある)は川あり。小船(ふね)。
山(やま)坂(さか)あり。道(みち)に様(さま)あり。広(ひろ)き所もあり。田(た)
畑(はたけ)あり。或は照(てる)所あり。葉(えう)ありてより
つけ。中菊(きく)の月(つき)にて。昔(むかし)あまの雨(あめ)あり。また間(ま)観(かん)喜(き)
起(おこ)るべし。されども。時但(ただ)縮(ちぢめ)活(くわつ)底(そこ)へ
気しんに気をとりおこりて。河の中にへたい

こゝに[illegible]通して[illegible]脱[illegible]成[illegible]万[illegible]也。極楽浄土のぬし。あみだ如来[illegible]もし[illegible]極楽へあゆみ。浄土[illegible]つねの人ハ[illegible]せず[illegible]あ[illegible]げ[illegible]但[illegible]おこしざれバ[illegible]有[illegible]薬をもの聞[illegible]夢に浄土の荘厳[illegible]これハ[illegible]つきつる[illegible]の[illegible]の[illegible]きくがごとく。まこ

可くこゝろへ喜て。慈悲をたれさせ給御
し。我等の仏法はんじやうならハやがて此
世の命終りて。地獄を出て浄土に至り。宮殿大きに
勢至文殊普賢の大菩薩。おなじ
海会の諸聖衆ともなハ。阿弥陀仏
の御前にならんで長時に法を聴なり。
此の内にいりて。喜の涙をうかべて手
此人。浄土に不退の文にて讃嘆せし菩薩と成

るにつとふみこそ安心決定を遂して居る
縁生度の様り興するまゝなりし
同吾安心起行とつるすハ。南無阿
弥陀仏と申せば。彼如きし手柄きめた。
本願に乗ずるが故。往生する事疑ひ
なしと。かくし定まるが安心。それより
ありつけず称名を起行とつとめ。ばかゐふ
ハ別の子細はなし。さて日び食を喰ふ

ごとくに心得(こゝろえ)べし。まづこの食(しよく)ハ飢(うゑ)をたすく
くるまのくすり(薬)とこゝろが安心(あんじん)なり。ちからより志(こゝろざし)
をとりて食(く)が祈(き)行(ぎやう)也。食(しよく)服(ふく)なる時(とき)
まゝ。つぶ餓ざやとおもへずそのりてハ。鉢(はち)
て猿(ゑん)猴(こ)のをとるなり。機(き)縁(えん)の手(て)まハ。盗(ぬすみ)
てるん縁(くわ)ふのはり。是(これ)因(いん)の安心(あんじん)起行(きぎやう)
利(り)益(やく)といふ形なり。浄土の法をも信ず
さればはじめといふ安心を。法の案したる

ずくのりませハ。清生ハなしぬ也。如来を
ざうく食すれ、常しく。おこりつねずな
様を過ぐる時あり。又数遍を制止す
るハ。食ハ、唯一食なるべし。飯ハ一
と制するがめし。三毒の癡ハ治
てる種のべし。又六年ハ日々の刻を
治す。喜怒ハ六欲の中病を治す。
また此食ハ住ハ五十年百歳の命を

たすくる人は浄佛国に生れて。
長なき寿命をうる事あり
又四生七世の父母の因縁ある事を
示すべしとはのくれぬく増上はるふ
然したがふものは此是法華があり。
久遠塵点劫の父母なり。ちゝはゝの
因縁なきものはすてぬるなり。又是
そしりなどしてきたらざるは。我

若不覚ならば父母有るべし。其不
覚の時節の様にして、さていま法語
がんを聞て後、一念猶じつ誰なるなり。
法華いまの懺悔にてもすむるの不覚
ゆるされなとて、南無阿弥陀仏と称ふる
ですむるほどに、仏ぞけなるの法の心を書き二人
を解て、やがて又親子の対面すべき
事有るべし。心安ろしくて何

つまり詞でいふまの八方もくの書ろ
をしへりしその雑筆が能く同じれ
くなりのしくてはりしぞとふ、めいかなる人
ぞ。つんとまんなぐひて。来たまる人
緒業あ。のくらんむしぶ。二三絹をもの。他んを充。宿
紛園をも縁へさると。情しもでし。さる
つる所ハ。東の学ふ所しぬ字なり。これハ
理る路経へつきてしめす物り。

梵網経曰以慈心故行放生業
應作是念一切男子是我父一切女人
是我母我生々無不従之受生故六
道衆生皆是我父母而殺而食者
即殺我父母亦殺我故身。
六道の衆生ハ皆我父母なり。久し
くありて遊ぶる鳥獣もそのしきりに歌
をうたひて聞せんとし。囀すなり

といへる歌(うた)三首(さむしゆ)あり。第(だい)二句(く)にこの字(じ)をよみこむ
いにしへよりある歌(うた)二首(しゆ)をとりて。又其歌(そのうた)
の講釈(こうしやく)懇(ねんごろ)にしたり。いさゝか鄭重(ていちやう)
なれ共未(しめ)しきを。そこに別(べつ)に記(しる)しおかれざれば
まづ
兆(かな)し語(ご)
徳本(とくほん)三部(じう)の後(のち)。歳月(さいげつ)をまたず追々(ふ)し揃(ぞろ)なる
ここ年(ねん)のうちにかならずあらはれてこの後(こたへ)はいふ。

十四歳の時より念仏して。六十一年までくりつゞけ。最後臨終の時。南無阿弥陀仏と申して。息とゞまり。をはんぬ。別に不思議といふ事なし。和らふ法然ぬきで上人の。様子を往生をら故すること。これもとこそ不可思議。不可説なりといふべき形見

浄土真宗一大事

南無阿弥陀仏

念仏ハ阿弥陀仏の本願(ほんぐわん)。諸仏(しよぶつ)の證(しやう)誠(じやう)。釈尊(しやくそん)の付属(ふぞく)。善導(ぜんだう)大師(し)。円光(ゑんくわう)大師のをしへなり。往生極楽の為にハ南無阿弥陀仏と申て。極秘(ごくひ)す清(?)するぞと思ひとりて。申外(わか)ハ別(べつ)の子(し)細(さい)ハ候ず。是(え)ハ一枚(いちまい)起請文(ぎしやうもん)の中(なう)そ。要(えう)中(ちう)の要(えう)なり。其(その)餘(よ)ハ廣(たい)塔(アミ)の行(ぎやう)

俗のことわりを申ばかりの事なり。予が門弟たるものハ。一向専念の金言を仰ぎ。一枚起請文を。深く肝にそめ。心にとゞめてハ。もろ〳〵の雑行をまじるべからず。又蓮友の言より。親まじハし。たとひ余宗の作をかたらふとも。心の疑なく。今しめ慢なく。稱名の一行をとなへて。一濁世の本懐をとげべきなり

夫戒は仏法の通規なり。おの〱よろしく随分に戒法を護持すべし。戒なけれバ。解脱なくして。仏弟子にあらず。孝といふも。戒行をもちて。念仏はまのすゐよふさゝめなり。たゞ仏戒のうちに住し。め迷ふ円悟に念仏すべし

南無阿弥陀仏

未五月　　　　徳本判

此頃不図時節の法語何事もなく有べからず。大かたは
同じ事なれバ。何いはずとも。世の遷変動静物
といふものなり。平等の風雅法を守るぞしるは
なり。何いへるべし。此程ばくぜんと諸こと出しみ
末のへるものを出しまゝよりて。今の伝中。都て
これを含く

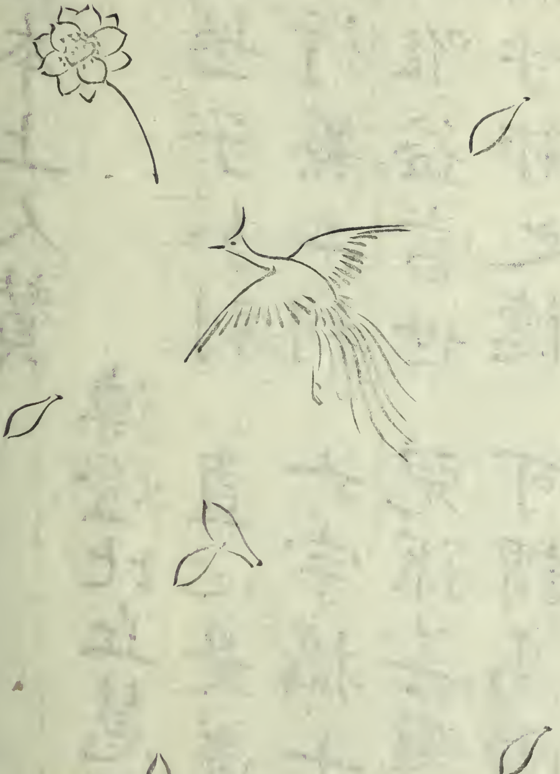
德本上人賛

傳燈比丘慧澄

無些子分別　直心是道場
一行兼二利　六字攝十方
何唯益當世　兒孫善繼芳
嗚呼師之德　可謂高而長

巖岳澄和尚謁行者廟作

僧蕉巖欽寫



徳本寺老僧祥林法弟小僧観圓

和州奥院現宮和尚　江戸掛搭願主寮隣大和尚

江戸一行院本郷和尚　播州龍尾山本明和尚

播州観音徳苗和尚　江州澄禅庵本通和尚

薩州甲主本廓和尚　紀州世尊寺本擬和尚

江戸称往院法圓和尚　阿州霊嶽徳圓和尚

三州九品院法住和尚　信州阿弥陀寺本宗和尚

通計十二人

和州当麻奥院現長和尚

和尚ハ和州の人なり。十一歳にて。知恩院檀誉大僧正に就て剃度し。現算と名づく。十四歳にて。傳通院流誉大和尚に従ひ。現長と改め。修学の會五十歳を過て出て。所々に輪講を修す。後乃京都清浄華院に留錫し給ふ。勤て精見して。一念く起。名号無量の

心を四迷にまよはれ。此娑婆中の罪を蓄と
して。無明煩悩の根を結ぶ。又四
四。めぐりしてぞく因果なるべし。此事を
まづしらく。心は行に依て起り。行は心
に依てこそ生ず。善悪の二ツは
因果なるを求る八。来世の果を求る
ぞめしとみるふみの日。第六を
つく出の境をさるべきや。此まし何

しきを除く。世人萬族をして。事を易ふる
訴し。はや得法を望む。それ佛道深遠
なり。何ぞ吾肩を張りて。これを求る事
をえんや。すべからく。一切の衆生成佛
時をはじめて安心するところにおいて。汗背を浹し。言を猿に銘じ。若
孫勤め労をもて。精不足のおもしろ
といへる經説の義圍を野に氷解し

すこ。うゐる河に就てこそ。其の気銀の翁
いほべしとて。庵の九に住す。大神を祝
すこ。南紀に從游す。その時。齢二十五歳也。
名を本宗に改む。浅井に移し云。
一夕。河のさま。流るゝぬ二輪観音を
そりのみ。こゝにいつのまにか怪しく帰て寒て
つんまきしばし河岸の辺に。本銘をうけて念
しおりしまたなり。又まへにいつ国してぞ

進バみめ[illegible]輪まで[illegible]。六[illegible]に抄[illegible]夢
ぐ[illegible]して。[illegible]一[illegible]に妻[illegible]遍。
[illegible]の[illegible]し。その[illegible]
うつ[illegible]の[illegible]なさ[illegible]して
[illegible]。[illegible]つ[illegible]れき。後に洛[illegible]
[illegible]住[illegible][illegible]院に
住し。[illegible][illegible]にす。天
[illegible]大[illegible]月十[illegible]。順世す。[illegible]蓮[illegible]

誉と號す
江戸梅岩寺土圓竺大和尚
大和尚ハ。筑前の人なり。博多妙国寺住
茶人の弟子なり。後ニ傳通院湛澄御
上人の門ニ入。京師遊学の時。師の茶湯
を学ひて。皆傳を得て。師ハ熊野へ
詣給ふとき。このさればば追しつきまゐらせんとて。
茶をもと談して。畫乃し見る所。吉田

まして円満す。右和尚。因曰。本願念仏まそ
順次出離の事ハ。誦すくこれを信ず。現
専ら三昧の大益。善機のはかるべきや否
と云。況その上にて念仏の行ハ仏力ね
まかす。しかれバ行をせバ。往生して云
昧を発得すべし。ろう学頭ハもとより
仏祖の勧讃する所なれバ。自行信
実なるざれバ学文なほ同の益ら

ゆゑんなり。今(いま)の人。護法(ごほう)を尚(なお)くして。心(こころ)に恭(きよう)く
利(り)に就(か)ず。修道(しゆどう)行(ぎやう)を励(はげむ)べし。然(ぜ)らハ
出(で)ずべきにあらず。それ無常(むじやう)老(おい)を
まなバ。一見(きく)悔(え)ざれバ後世(ごせ)に属(ぞく)す。すさ
しても悔識(くしき)に絆(ほだこ)す所(ところ)なく。上求下化(じやうぐげけ)に務(つとむ)
廃(はい)すべし。いま悪(あれ)錯(ずつき)法(ほふ)するあらバ。諸経(しやう)の任
まめやく。手もとに無常(むちやう)して。仰上(うへ)なるれども。
縁(えん)切(きう)を助(すか)度(ど)しまする。この日。法要(ほふえう)一次(まま)

事理融通の旨を談じ玉ふ。是は学
ぜず。かの仏祖の説に符合す。
それより頭陀して名を本朝に顕はす。山
林の荒野。鬼趣の道をも経ることなし。頭陀の行
山の恐るゝ遠近の災害をも厭はず。
しつき。随と同じき人に信伏し給へる
を成見んこともなしとぞ。のちに因陀羅の人
の勧策によりて。伝通院に輪錫し。峯の

直の務に東の前年の清整やすまじが
ようてゝ。江戸に請じ申させば。江へ
みな因縁を以て来りて。その白蓮社
まで寓せしむ。江戸の化屋を捨しかば。
依て和尚の遺物をもちひて。三四修整して
いとつたへし。　台銘を書して。蝦夷
の善縁なるを信ず。異人の降伏擢より
その功をつくさんとぞ蔵頭王府侍読を

鬱。去れバとて院家つくしかも。大僧都
を經て僧正に任ず。寺職の後再び
台嶺を辭して。江戸の誓願寺に住す。
山中を經ずしてやいづるの所。生起緩
流して。法眼よりうつりもの數もしらず。
天保十四癸卯の年。四月十九日。七十二歳
にして逝す。翔蓮社鳳譽と號す
江戸一行院本佛和尚

和尚ハ江州日野の人にて。木村氏の豪
子なり。小字を虎之助といへり。総角の昔
より算数を學び。十歳の時。禅洞月山
に就て禅理を聞き。趺坐をいとなむ。因に
の句。沈地真箇の虎之助を忘るやいなや
と。この言を聞て省する所あるがごとし。
是より寂室に趺坐すること。つねによく
怠らず。十七歳の時。河内の夕暮

一声称へつるに罪みな除りて。西の空を伏拝
こゝろにて。厭欣として心を調する事
ありて。俗縁を離して。津の国勝尾の
山の峰にのぼりて隠遁して。剃度をとげ。名を
本仏と号す。二十歳なりき。その前住
院のあるじ。明かしらずの人をまねきて後
まふ。山下の三尊を安置し。なほのちのち
とぞ。是より勝尾院の座主を継せしとぞ。

一筆に師の行化を勧む。自の力を極て難
らず。念自然し阿の折伏す。障碍なりとも
あひてわが身の力なり。されば法は勝縁に
望で。その年をわが身に謝せりしとぞ遠
さりまつ。経論を携てこれを停。あるハ
結滅する時ハ。禅宗の見に勝て因果
を閲するなれど。法の身を弘ひて。下にハ
名号を禁ずといへども。海じのに持名の

暇書を読事をゆるすまで仰られ
ける。文化十年六月。師の東下に従ひしに小
石川伝通院に寓し。のち師入院
す。経を読の時。和尚その住持を
し給ひぬ。文政元年十月六日。師入滅の
のちいつしか和尚の衣鉢をぞ伝へ給ふ。和
尚遷化を悲嘆し。続大蔵経を課して常に
浄業を修しけり。猶衣を披き。蔽

覆を説その空説法の邪しけれバ。露遍
果報し。正三昧中勝相ハ。佛前に顕じ
二色の光を現じ。或ハ黄金の菩薩を現ん。
或ハ満室に舎利を現ずるなど。種々の
霊異数多ありといへどもつくすべからず。いさゝか別伝に譲
て俗の男子。記憶人に勝れて。つねに因
を好まれバ。経文に通じぞ。人となり沈毅
高爽にして。一日に六十餘里の路を歩む。

俗(ぞく)の手(しゆ)よりの近(きん)業(わざ)を厭(あく)く儒(じゆ)生(せい)。試(こゝろみ)に
和(わ)漢(かん)古(こ)今(こん)の聖(せい)経(けい)及(およ)び歴(れき)史(し)子(し)集(しふ)の部(ぶ)
典(てん)を読(よ)めバ。六(りく)々として掌(たなごゝろ)を指(さす)が如(ごと)し。就(ちう)中(づく)
地(ち)理(り)学(がく)に至(いた)りてハ。惣(すべて)其(その)精(せい)勤(つとめ)を極(きハ)めたる。
儒(じゆ)生(せい)大(おほい)に驚(おどろい)て。実(じつ)に不(ふ)世(せい)出(しゆつ)の人也とぞ。
就(つい)て内(ない)典(てん)をも学(まな)びしとぞ。殊に心(しん)奥(おう)探(さく)を
究(きハめ)て。尋(じん)常(じやう)浮(ふ)俗(ぞく)の偏(へん)見(けん)を謝(しや)せる。
おのれハ狂(きやう)浪(らう)和(わ)尚(しやう)の徳(とく)行(ぎやう)を記(しる)すも空(うつ)しく殆(ほとんど)

二十餘年。臨末に先だつこと七日にして。始て
謁すること年を経たり。神情温雅にして。眉
目清秀。いまだ嘗て沈痾の方にある人と見えん
之が出言朗々として。法悦の精英を説
くるぞ。其の墨白。西郊の寺庵に移り。安養
寺。正月廿二日。正午に寂す。法臘五十五
世寿七十五なり。建蓮社劉誉と称す。
有識。その中縁あり。一周。三回忌。おもずしてく

七宝荘厳の。法苑に列りて。孔雀鸚鵡の声
徳を讃嘆す。他土同生一蓮の身縁を結
んで妙なり。南無阿弥陀仏
拮了河尾抑舟尾寺の和尚
和尚。もじあのみを直観と示す。京家の
参らして伏見の里并貧居住す。右
和八さしあり。鈴禅具あまた蔵す。此の高名
きんかすて。猪の蒲柴さう。かくへ雷名をとゞえ

ける。いづれも一曲づつ唱を喫きしめて。梅名を
二驕さんとて。鷲尾へのぼり。如て。阿悦し
けるに。奇なることの礼。阿ハ織紙を光焔
の中よ。安坐まし佛一体あり。こゝにおいて
驕傲の心。頓に摧け。法で弟子の列に
入。本来の信心にかへる。阿の字を中に
孫随をしるす。我時鷲尾の二階堂より
ての。方始の種を法輪をしふの中に。

諸仏現前し給ふを感見す。げに開常
所持の元祖大師の舎利。一粒分身し
玉ひぬ。のちまたこれをも仏は住ふ様の
妙香おのづから別気を出るとなん。こゝに
ち黙す。元禄十三年六月十日。松寿庵
まさにいて逝す。然蓮社鮮誉と称す
摂州灘打出親王寺沼徳苗和尚
和尚は。神情綿擬まして。気調高陽度也。

ぞ人。此の法師は魔魅（ちびく）と。和尚に窃（ひそか）にあびせて
ん帰（かう）られて。警夢（けいむ）を告（つげ）給ひけるなりけり。或（ある）
日。（い）親まゐるものいおもてさらぬし。和尚の
念仏するを。地（ちか）に火（き）けるける。そのあれ
和尚は。いつもおこたりで念仏するまゝと。
御しれさまと。檀紙（だんちう）の事（ぎわ）つ。和尚まつげて。
それぬ。けうさめ。しいづく。の類ひさとに
つくさんゆつき。和尚法よう毎日へん。一乃（こうの）悪笠（かさ）

うちつゞき。猛暑もはげしくて。吉田氏の
家にいて。詩を閲覧なさりし。
詩。楼桜を作りて。そのしるし筆つゞる
らするに。家に来りて台面せんとのたまふ。
わが詩の續を座して詩のごとくなる事
さんや。珍しく美人なりぬさきの花がたるやうで。襖
編つきて。いたり候へとて。十尺屏に
折ふしなりて。浅婦りして。耳根漏し。

あつての弘法の現存あらバいかゞあらし。仁王
尊の大像。思作して。どもみな弟子の
理判にかゝり。名を泊苗とぞ称ぬ。所化
二百余人。今月絶る。而る年に清す。鷹運社
論器を採す
江戸平よ也法律尾木藩
和尚城殿の人なり。父ハ都の武のしより。
何りんなき紀識にて而して出家せしや

ざおりしなる。然ば。江戸日本橋浮世寺杉
院ましるべありけれバ。ごじどるまでしる
何ら杉ハ。こゝできはんの。杉ハまですまう
をかひしとんでりき。これ時ハ少女の姿や
ときひまきまゐらせ申しなりしと。西願
ちかま河を請じ申し時。烏で謁見
し。つれ芳松春らん。河へつま。宗次
親に、作く。たゞハ作りしらバ。こゝむく斜ずま

銘じてたがふことなかれ。心緒一筆を揮て。
直筆の名號をぞ拝受して有るあはれの
うち路につきてこそ念佛をなすべきなれば
契りしが。隙ある年のほどのしていつしか
在りし日の危篤ぬ。文化二年四月四日の暁
篤なり。法文をいひすゝむれど何かすゞのり
の涅槃像をかけさせたれば。やがてしばし
てらしつゝまもりしを思ひ。頭のいとあ

のこゝろにて捧さげ玉へり。たゞおくられ
しかバ是非なく須達ハ城に
鶴が岡におハすを修しつらバおもしたちて
同じ子の□月。鶴が岡にいりしかハ、
妙華経をよませ。道場しつましなしと
守の。勅を諷読する事なきにハ。本師にぞ
随喜をわれたり。志の厚きを未延それば。
所持の剃刀をとる。つかつかとこれくうる

まりしを。法子の影くま解る時さい。う
ころ。菩よ釈迦牟尼仏の。法子あれはを
られし法ところは。あつみたゞいさるに。ふ涙とゞめ
うるはりとぞ。これを覚悲まをつとて。法
唯仏を福しを。本仏の。らづくの施く
あらわれきされ。この和尚は。法多法を
真の釈迦牟尼仏とぞ卿奉る。続尾
ちまそ。土き堂の経法つとめる。ひ八日まで

垢離をとりて。弁じぬるさまの幾千遍あ
りつまじぞ。前に中川りて。例の略し
つ。元禄二年。二月投る。上無称す。佛蓮
社頼誉と称す
並和甲斐守原勵和尚
和尚。浄に岳光。丹後國中郡。宮本
園田氏の産なり。父は后門間丁前
をも出つ剃髪りうよしや嬋。まよい。如二三梅ちりけり。こう

うし落髪して比叡山に何かしを観
世音へ祈誓しけるに。陀をも念佛
のぬしへてもやめてきそんぶて。鬼魂へ田との
ざりしと思ひそろふらに招魂猪尾り
ましけるよし。告る人ありければやがて
猪尾山の砦り。師より謁して弟子の
列にいりて手をとじられ。このころ。加
何りて。大なのの人を禁ぜられたりとぞ。

所願を着すことかたしといへども。さればとて。坐
禅寂を修し。或ハ陀羅尼を誦して。読経
念仏すこれよりハ。賊蛇猛獣のおそれ
あるべしとおもひて。一円相を画して
結界とす。かくて苦行策励をこゝろ
志のんや気玉しく。日を本励と修して。好
て其子のふりまでかへさを結へり。和当
ゆるか時。眼膝をやすめるところ。夢まつ会

ふ浄化の。菓師ぬ年を銭見す。和尚
ぬ年手向ありて。眼疾は業障の所為。
いのんをし籤し。何れ。翁ハ。ぬ年
の此眼をそ。みゝまの人ぼつゝん
の縁なつむしのらざるをなず。業熟るうし。
いく目ざをく。眼の疾あをく急元耳松
以ゆしつ不自由せる。木ゐるの病を
うへ至りなるべし。とかくこずれなし。二十はの

阿ハ江戸の小石川に住す。當時陸沈し
ながらへしところ。好尚ハさらに器玩や
あり合の蓄杖をもつて。雅俗の
名蹟に就てまでかゝりつゝあるき。
其夜の幽夢ハ。石なる渾沌像を描す。
こゝ終世るにハ何で。縁日の像の頭か
面影に於一つありけれバ。覺て後。筆
有阿の入寂を知る。とて又聞えるか。

月六日のころなり。その後ハ便宜尾の
茎。此園屋の宅にて饗応して。酷酒。
四十八種の料理を羞る事。其後ハ
初より四十八度目やらぞ。始め花の頃
茶。記するにつきて何ぞ。芸の記一巻。
味噌ハ竹の木記一冊あり。茶に甘露敷
巻第律師の記すること有り。三伴十
つその斗。十二月十日。端坐し合掌して

辭す。道の筆は杜の茶釜に様は
和尚が茶の世を專ら茶柄和尚
和尚は。宗旦が岸野の図賛は其の緒尾
茶禅の心を。當てしんて。出子を将て
り。其の生月恩讀んで。武道し長の御
く。たゞふべきものなし。後の深く
此の申勝をその下て。深く扇うち。は猶撰
などやるうち。茶ごろ。でちもあてるこ

文政十二年
丑八月廿七日
和州法隆寺
小寳院觀
乘和上を戒
師として進
具次

と教へし給ふ。師の一(ひ)つ拝の後。無財餓(がき)鬼の
痛(つう)ましきに向り。その程(よ)は師の手(て)づから。和尚
の口中へ黒(くろき)薬(くすり)を入給ふと見えて。夢(ゆめ)覚(さめ)
けるに。口(ちの)渇(かはき)は忽(たちまち)にやみて口唇(くちびる)の
うるほひ。山木(やまきの)の葉(は)をつむ一枚(いちまい)ほどつきたるとぞ。
然(しか)るに師恩(おん)を報(ほう)ぜんと深(ふか)き縁(えん)ありて。[illegible]
ましますも師の講(かう)讃(さん)ありし紀(き)の国(くに)に一伽(いちが)
藍(らん)を創(もじめ)て。師の遺(けん)徳(とく)をしらしめてなの

く世に伝へ。土地さんの勝縁と成し。
済度恩の万一に酬答せんことを思ふ
こゝろは我の思惟し。生死を流転し来
仏に讃じ奉るは。いよ/\それなり。ふびんたり
げまゐらせしつり。いままあはれ
り。因縁すべきにあらずとこそられ
まづ。仏語の辯説として。記のともやうごる
こゝふ定律の地として。日々市中

をも濯(たく)擢(ちつ)すらん。熱(あつさ)を冒(たかや)し。寒(さむさ)を凌(しのぎ)て。
つねおそろしき事なし。されば日ごろ。
ゆゑに護法(じふ)の冥助(たすけ)ましませや。前(さきの)一位(いちゐ)亜相(あしやう)
公(こう)。この事を聞(きこ)し召(めし)。その忠誠(まこと)を感(かん)じ
給ひ。自(みづか)ら御(み)筆(きん)の額(ばん)を書(しや)して。出(ことさら)に
の法華(げ)讃(じ)あそばしければ。諸(しよ)人(ひき)の
め極(ごく)奥(おく)し。やがて一精舎(ひとつのてら)を建立(こんりふ)す。乃(すなはち)
世に事光なる名(めい)を加へらる。これよりのち

紀の国にて。河の淺瀬の岩院にて雲立
せられたり。又、和尚の功績といふべし。
寛永元年甲子十二月廿日。終をとげたり。同寺
春秋何ばかり。浄閑して勤寿。浄蓮
社中誉と称す
江戸浅草法浄院浄国和尚
和尚は讃岐の産なり。幼少にして国
府に出て呑龍上人につきて出家し。増[illegible]

精しくて。修学弟子を積り。経手郡修道。
田舎町世尚院を建立す。師の猶尾をつぎ
指引せられる。存を手細工を旨とし。
手翁しつせ。隠ぞいきを化す。ある極月の
末つ。弟子薬得れば。一まづ丹波へ帰り
なんとて。汝まで申。たうた。汝の頼ハ
く出家に三界を家なし。編まとハ不ず
まつの宿ぞとのたまひしを聞すて。贈

として。人住定まりて。ちへる御しずく入りして。
弟子の列にかゝりしかバ。修学頓に成づ
今猶ヘり。のゝて。其家七世の孫。我が家門の
觀音仏像を彫て。仏前に別に安置す。
所々國の寺よ。武蔵國の沼の津に神ある
へ移錫し。之を興す。この寺の堂宇建
其蔵寺し。其日の列さを満す。因て
二十の歳。寿三の歳。前詠辨和上の室

又。登壇受戒し。これ伝え来る正法学
梅住院へ移住す。抑この禅法を説くの
あるは。めでたきより。世の常の官刹なりとぞ。和
尚の稀の寂の所にて。録所として。摂屋
佛の道場とはなりぬ。これ得たり。此のこゝろ。
すゞしき補ふのうり。猶つゞかざるといへり。
こゝろの出の接瑞へ。迎へてゐるなどして
なり。さるは語して。ざる人の流

いゟを荼毘したる。浄舎利やとて。
水晶の壺に入て持来りしが。つぼよ
り一筋の烟たちのぼりしまゝ。やがて。消
の浮雲に入りけり。此舎利は今使すべき
ぞよ。つげ給ふと思へば。夢覚ぬ。それよ
り病漸快方に赴きけりとぞ。天保八年
十月廿九日。念仏の声と共に往生す。
多賀次郎郷の娘戒名。禅尼京川観福

其の廟寺の霊像などの事。別記あり
出すべければ。ここに略す。本蓮社
超誉と称す
阿弥陀堂壁殿浄圓和尚
和尚は。いづこの何の人なるを詳にせず。
増上寺に籍して。京師に遊学し。快
瑞といふ人に従ひ。唯識を研究す。詳
の俗風に帰して。経尾其の門に入り

して名を滄園と改む。何ゆゑぞ。師
そ図まをかく。詩は必ずしも一枚起請を准
縄し給ふ。などか抑退学仏を会
あらんや。現世を捨しまで申されば。
ゆ。大悲閻をしらずやと答へ給ひし
とぞ。其後。古今の別業を修しける事は
思ひ立事ありて。いまより市野の衰
を辞じとて。初て山林の古地を求む。

のちに河内に移り。谷ガ嶽にて。隠居する事數十年なり。嘗て。弟子に示して曰。予が師の碩徳。和縁の言劫促して縮め。つばら。朝後大甚の帰敬あつての言ふ観大師の悟あるゆへなり。竊に物あらわれの鍵らば。礼拝の功徳ならん。口称念仏の礼拝は。三業具足して往生の因となるハあるなり。現在ハ無始の業障を滅し

弥陀の門をひらく。これ安陀羅つ君見て螺
提の功を積て。こうづくしも学く。新法
をつとめて。歳暮くも及べからず。日課おこなり
なく。むかし百日の百萬礼も勤行を
らざりし。天保十二寅。九月二日。入寂す。
廣蓮社則誉上人
三縁山増上寺内九品院之法主和尚
和尚は。三縁山大僧正の弟子。祖は縁山

に修学す。後に中山珍達。本所観着の圖に
ならひ得す。師の□龍遷化の時。喪服どれ
かつてひとひ□遊也。初めて師に謁する
アり。師は衣鉢飄然として行のづゝくの
威儀を具し給へるさま。富士嶽の孝
雪。宛山幕の紅葉に秀づるがごとくなるに。赤□
として背する手向り。いづちふ彩衣を
許て弟子の列にのぞり。此時名を續

忠(ちゆう)と孝(こう)也。づゝしんで世(よ)に(つふぬ)といへる深き歌(うた)
を。玉のりをもとゝ。深(ふか)く肝(きも)に銘(めい)じつゝ
ことく。勝(しよう)縁(えん)のことく(えだ)を尽(?)仰(あふ)ぎしり役。
されバこそちまたにも此の折(?)役(やく)に(?)れ。隠(ぎぬ)
逐(ちく)しても。霊(れい)魂(きやう)寺(?)御おこなりたまの
なる。三界大子のみ。大月(?)親(しん)具(ぐ)せり。法(ぶ)傳(まつ)
もしくは(だ)縁(えん)つなぎ弁(べん)わいに(?)あ(しやう)(?)(こまつ)すも(さゝ)に(?)(から)
海(さて)まつ手(?)(えん)(きよ)してする(?)の別(?)をつまい。(とう)

積(つミ)徳(どく)累(かさなり)りしハ。國さるべき宿(しゆく)縁(えん)やあらん。
尾(び)三(さん)の両國におゐてハ。吉(し)良(ら)の奇(き)瑞(ずい)殊(こと)に
顯(おほいなり)き。三ツの井(あ)山に九品浄土を建(えん)立(りふ)し
て。三佛の道(だう)場(ぢやう)となしぬ。今に坐(まし)ます
源頼朝。名(な)古(ご)屋(や)光明院寺をも守(たう)護(ご)
して。捨(しや)世(せい)の道(だう)場(ぢやう)を定(さだ)め。持(ぢ)律(りつ)の
徒(と)衆(しゆ)。僧(そう)俗(ぞく)の千人を安す。三尊十三宮。
以月来を合掌(じやう)す。これ寿国いつもりてハ。

別時にゆかりて。何の累属ぞ。精霊運に(?)
入答を頼す
後刻寺の何某が魂本寺へ来り和尚
和尚。乙女の名は法謙。八つさの国の者なり。
勝尾山に詣でて。帰りて見えけり。後和
尚の時。諸縁す。寺院の何ぞてい。
湛然上人の来まして。天舞の地な
ればば。何の菊の地にあらんと。云人

法末(ほふしまつ)すれ。亦ハ之を御ゆ具(ぐ)通(づう)をあをし(あお)て。一日(じつ)一夜(しよ)も依怙の地仏(ちぶつ)の力(み)なり。地(ち)を占(しめ)て住(すむ)べうずとも知(ぢ)し。さりて。然ば法節の也。又人なりとも。べしとこゝろ(こひ)申けるに。年家をしるべしとて之を命(めい)ぜし。後(つ)のちいひ伝へあれバなり。鳴(ああ)鳥(とり)。つみ朽(くち)て。棲(すむ)べきやうなし。やまこ(きこ)ずまい末(まり)すれバ。渡(わし)。一河(か)してその終りに瓦(かはら)崩(くづ)れて鳴(ああ)なきけん

まハ。古のつもちゑをきゝ。席打てや候の
らずハ。江のうへるゝ安坐せよ。食物をすゝめと
も。餓鬼趣のぬすり何りじ。霜雪深く
とも。八寒ハすみるもん。ほつおそふて筆
の何るべきと。兼ざせられしてるハ。夢の
清てるやつはればえて。やぞら濁し
て。檀織柔のもへりて。河の明を
侍それバつゝつらじて。能体具足路

つゞく。こと數十日ばかりのり留(とゞめ)られたり。ふりはちゝへの玉へとゞめしかば。ほどなく入るにや。しよはたゞひく。宅(たく)をも修(しゆ)し。屋(やしき)をも新(あらた)にし。ふしぷちをかけり。人をも築(つき)。奇特(きどく)の評(ひやう)定(ぢやう)を表せず。頂戴(ちやうだい)こゝろをこめしけしたりしかど。法の長度(すがど)を慚愧(ざんぎ)して。猶江戸にありすぎり。こゝ年を更(まう)し。法の餘徳(よとく)を謝(しや)しゐりけり。文政八酉年四月二十

こゝ寂す。菓果を経ふといへども。古松絵
雑としき物出り。わが手ぶで辨じ又刹
達るれども仏像誦もぬ人なり。古松園
のおもむきのいかなりしと。人中
ありけるに。正蓮社観空禅す

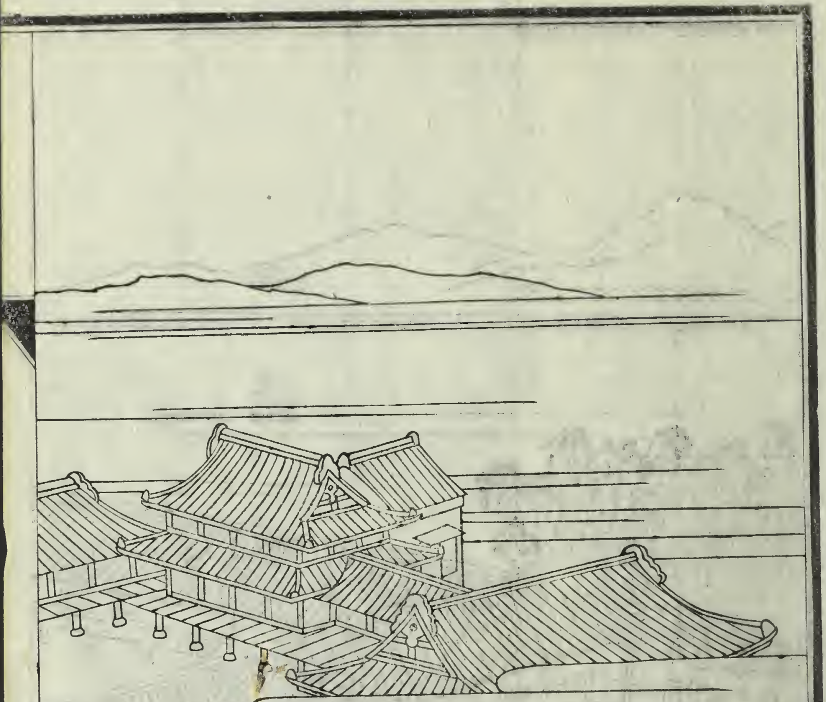
右すぢ人は。河のさいせのいなふてしる
にゐ浮しるると。すぢつ二を摘て。小

縁となる所なり。この外。本律本忍本
岸。本立。本浄本須弥など。如来本因
本男。本願の如き尼寺の如し等覚。或は
舞本寺河長よ何つき人。或は男性
人などのぞくき人。或は鞋草履よ耐
しかる人。あるひは物或のんとなる
何なるひとぞ。或は尾利建中よ大衆大
和尚のめ。いまぞ現存の人。或は出

妙なる其實を失へるもの。何ぞひは國を
偏へ。いまだその流の華をもだするもの盛は
則郷の中を絵て。中を絵ざるもの。この
このぬは。いまだこれに子傳ふる所引すること
何つるざれば。他書録兼せて海される附
とまるべき形り。且いまの小傳の元
乃門の書後継てこれを記す。
諸子約するにあらず。

清華河老綠河綠 清風山鶴聲

優婆塞弟子源岑滿敬書



三十一

徳本行者傳跋

予嘗憾行者之無傳記竊疑家無其人歟抑徳之不及歟一日一行院本良法師携本傳一帙來示曰此遺孫某等相會所録也予擊節

嘆曰果有之矣哉燒香繙之凡貳
百餘紙收為三巻不啻文之爲章
於其書若畫視而可喜矣此傳一
出則德之及千歳不可疑也盖行
者大器也其傳晩成寧足憾焉耶

古曰大器晩成其斯之謂歟命書
巻尾慶應丁卯二月佛涅槃日傳
通院賜紫沙門俊光誌

無量山學士僧蕉巖敬書

德本行者傳上木喜捨

金二拾五兩	縁山闡譽大僧正
金十兩	傳通院隨譽大和尚
金五十兩	至誠心院鳳譽僧正
金二十五兩	瓜連常福寺大道上人
金千疋	三州信光明寺覺舟上人
金十五兩	傳通院總大衆
金十兩	縁山安蓮社卓嶺上人
銀二枚	縁山光禪和尚
金五兩	三州九品院求道和尚
金七兩	薩州法尼某甲
金百疋	姫路奥岩井
金二百疋	杉原爲有
金一兩	平井平角
金三兩	十條村雪峯庵
金三兩	照應尼
金二兩	淨哲尼
金千疋	極樂水称念尼
金十兩	泉州貝塚金屋喜右衛門

金三千疋　傳通院清淨心院
金五兩　中里圓勝寺本信和尚
金五兩　淺艸称往院念阿隱士
金一兩　江州日野 信樂院淳雅和尚
金二百疋　品川善福寺義徹和尚
金二百疋　瀧川正受院聞龍和尚
金三兩　白山淨土寺大賢和尚
金千疋　傳通院蕉巖和尚
金五千疋　西久保大養寺祐學上人
金二十兩　徳因弟子 前法住寺稱瑞上人

金五兩　大坂小橋屋利兵衛
金二兩　高崎藩八木彈助
金百疋　同藩大澤武平
金一兩　麹町齊藤某
金三百疋　冷光坊法印
金三百疋　近藤鑄太郎

慶應丁卯上木

一行院藏版

滝澤篆吉欽刻字
高谷俊三郎敬鐫畫